

# 繫

T u - N a - G u



2 0 2 6 年 — 第 1 0 号 —

繫 第10号／目次

創作

解体

寺本親平

4

復縁家族

内角秀人

14

五月の美しい日に

深井了

36

加賀金城魔界伝説  
(資料編)

池田良治

52

相続

むらいはくどう

120

## プロット

「本人の意向により未掲載」（寄稿）

28

合評会案内

35

あとがき

138

# 解体

寺本親平



明け方まで降りつづいていた雨が嘘のようにあがって、江戸の中期当たりからあったと想われる、我が家の前の曾祖父が建てた大きな納屋の解体工事が始まるうとしています。

大型ユンボがトラックの荷台から降ろされ、雨上がりの爽やかな空気のなか、もうもうと舞いたつ埃に向かって四方から水をかけられながら、ユンボの鉄爪が情け容赦もなく納屋の柱や壁をひき剥がしかき笔つていき、見る間に解体して三日とせぬ間にそこはすっかり更地になってしまっていたのでした。

頭蓋骨が剥がされたような気分になりました。臆患の極まった静けさが均された地面からしわぶくような震えとなって吐きだされているのです。地に沁みた恨みがましい臓物の捻れが沈黙の端っこでざわついているようでもあります。

果てしなく過去へと伸びた白い靄を漉いた今日という時が、何層にもふり積もった時空の内から外へと切っ先を突きだしています。

百二歳の祖母が、「建てるがにや三ヶ月、毀すがにや三日か」と呟いて、入れ歯を二、三度舌で押しだしては吐きだしています。

納屋と云っても、建て方は昔の藁葺きの母屋には似

つかわしくない立派なもので、農作業の様々な準備や後始末がここで為されてきて、祖母は昔そこで蓆を織っていたのです。一息つく居心地の悪さを持ってあまし、睡魔を風に売り考えを雨に預けて、ひたすら同じ作業の繰り返えしに安定のおぞましい意趣返しを受けいれては織つづけていたのです。

四方は総て通し柱になっていて、一階の天井と「アマ」と呼ばれた二階の屋根裏の梁は母屋同様に太い松材が使用されていて、その松は先祖が持ち山に植えたものでした。通し柱や内側の壁へ斜めにはめ込まれた板材の所為で、震度五強ぐらいの地震でもしなやかに揺れるだけで腰が据わり、したたかな百姓の肝と狡猾さが蜘蛛の糸か蛞蝓の這った跡のようにはり巡らされていきました。

アマは後に六畳と八畳の日本間に改装され、亡くなった父が土方のアルバイト先で知りあった北海道出身の夫婦者に貸したり、父が耳の不自由な母と気分を変えて枕を交わすことができる場所として使ったり、後々はわたしの勉強部屋になったりもし、それなりに懐かしさや思い入れがあります。

幼いころ、わたしは藁屋根の囲炉裏の煙で燻されて煤けた百姓家が嫌でたまらず、友達も呼べずに瓦屋根

の家の子を嫉み恥ずかしさが極まって、夢の中で怪獣となつて我が家を喰いあらしていました。

そんなわたしを母は、「ううううっ」と言葉にならぬ呻き声を挙げてすまなさそうに見ていました。そして今はウンボという怪獣になったわたしが納屋を喰いちぎっているのです。父は同じ敷地に家全体を新築すると災いがあると云われているので、母屋の前半分だけを建てかえて片足は馴染んだものの上に置きながら、精神や身体に障りがないようにという按配のようでした。

後ろに残った古いほうの屋根裏に寝起きしていたわたしのところへ、優しい無口な婿が遣ってきました。浮いた噂の一つもない男のような気性の女と思われていたひとり娘のところへ来てくれたその婿に気を遣ってか、父は田圃を売って後ろを新しく建ててくれました。ついでに墓地も整備したとたん、父は早々とそのなかへ隠れて、縁あった者たちの心の淵へ沈んでいってしまいました。

父がわたしに添わせた夫は、父と同じ胃癌に罹り、五十五歳で他界するまで声ひとつ荒げたことのない温和しい人でした。旧国鉄に勤めて酒も煙草も賭け事もやらず、わたしが初めての女で無垢な性欲の薄い男で

した。わたしは云えば、中学の頃に始まり夫と結婚してからも何人もの男たちと遊んできたのですが、気性に似合わぬ子供っぽい笑窪のできる丸顔がわたしの淫靡な男好きの性根を隠してくれていました。夫は病院のベットで黒褐色の血へどを吐いてから「さよなら」と云い、そのあとに「ば」と聞こえるか聞こえぬかの細い消えいるばかりの、息とも声もしれぬ一語を残して逝ってしまったのでした。わたしは確かにそれを聴いたのですが、もし「左様なら」だったならば、わたしの耳には明澄と豊唾の間で、「ば」という最期の語感のたゆとう響きがいつまでも消えやらぬまま残ることになってしまいます。

成人式を終えたばかりの長男が早々と子を為して嫁と三人でアパートから引越してきて更地に家を建てることになり、これでわたしは家付きの娘という名称から放免されて自由になり、新たに嫁が入ってきたことよって、ようやく代替わりすることになったのでした。

正月明けには新築を請けおった業者の人たちと神主がやってきて地鎮祭が行われました。前のほうを建てた時に地鎮祭が行われたどうかわたしの記憶には無いのですが、実際我が家のこととして立ちあってみて、

ずいぶんと感慨深いものがありました。

軽のワンボックスカーに祭壇一式詰めこんでやってきたまだ若そうな男が、たちまちその場で神職の拵えに早変わりし、三段にしつらえられた祭壇には果物や野菜や鱸やお神酒が供えられ、最上段に氏神様の依り代なのか大きな榊の枝葉が広げられ、まず神職の氏神様を招来する呼び声から始まって、以前別の神社で老齢の神職の寂声を聴いて驚嘆したのですが、やはり今目前で聴く若い神職の声も尋常ではなく、氏神様が本当に降臨してくるような気にさせられたのでした。神職は朗々と祈願の祝詞を読みあげた後、参列者全員がそれぞれに用意された榊の枝を神前に奉じました。それからやおら取りだして吹きはじめた笛の音色は拙かったが、それも愛嬌で実に趣きがあつて、また響きわたる声に送られて神様がお帰りになられ、神職の手によつてお神酒が敷地の四隅にまかれ神事が終わると、彼は再び背広姿に変じ、凡庸な三十代の若者に戻っていました。

値段の高いテントを張らなかつた敷地には、長男が立てた四本の細竹に巡らされた注連縄にはさまれて、弊と藁しべが小雪混じりの突風にくるくる回っているのに幻惑されたわたしは、震えながら家を建てるとは

そこに住まう者だけの問題では無いのだと殊勝な気持ちになっていました。

工事現場管理者の永井慎一さんがすーっとわたしの横へ寄ってきて、「古い雪隠はちゃんと埋めときましたので」と囁いたので、わたしも彼の耳に唇が触れそうなほど顔を近づけて、「ありがとうさん」と応えました。

死んだ父専用の手作りのゴットン便所で、北東の鬼門にあたる明かりもない真つ暗な厠で、そんな暗がりを用を足すほうが落ちつけたであろう父の死後、三十年ほど放置された儘だったのでした。

永井さんは人の気をそらさず、押しつけがましいところが無い好人物で、柔らかな声の響きとユーモアに富んだ話しぶりは現場を差配する者としても営業マンとしても申し分なく、建築主にとっては総てに信頼が置け、会社の上司や設計者など、誰もが彼の人柄に通じるものを持ちあわせていました。

「ご主人のお名前、字は違いますが、ぼくと一緒にす」と云って、にこにこ笑いかけてくるのです。

母屋の玄関先にはまだ戸主の表札が掛かっかけていて、彼は慎一、主人は信一でした。

「ああ、それから敷地を均していたら、蛇が二匹出てきましたので、ぼくの家の冬眠箱へ移しておきました。

暖かくなったら野へ放してやりませうのでご安心ください」と存外な心配りを見せてくれました。

夏になるといつも姿を見せていた青大将かカラス蛇だったのでしょうか、わたしの家は東側と北側を幅二メートルほどの浅い川が流れていて、昔はその石垣の間に沢山の蛇が棲んでいました。

母屋も納屋も土蔵もその蛇たちが鼠を食べて護ってくれていたのですが、今年はずいぶん一匹の蛇も出ないだろうと思われました。

わたしはもう一度永井さんの掌を握りしめて、冬眠箱の蛇たちが絡みあつて眠っている姿を想像しました。その後、役所へ提出する書類の関係上、基礎工事が始まるまで正月を挟んで二週間ばかり間がありました。長雨が降ったり小雪が舞う中、永井さんは何かとやってきて、その都度今どんな状況かということを一報告してくれました。

そんな中、歳の暮れも迫ったクリスマスに、サンタクロースの衣装を纏った永井さんが玄関先に立っていて、「雪の降りが悪くて、鹿の到着がおくれました」と頭を下げ、手にはわたしの孫へ渡すプレゼントを持っていたのです。わたしは年甲斐もなく感激して舞いあがり、「何とまあ、貴男つて人は……」と声を詰まら

せていました。両手を胸前で組んで眼を細め、「いえいえ、どうもどうも、こんなことがやってみたくて、やってみたくて」とはにかんだ笑顔で、長靴の底をとんとんと踏んでいる彼を、わたしは愛しい者を睨み殺すような目で凝視しておりました。

正月三箇日があけると早速やってきた永井さんは、「十五日過ぎから基礎を打ちます。その前に地盤固めの業者が来ますので」と説明するのを、「歳明け早々、そんな丁寧に報告に來られなくても」と恐縮するわたしに、「いえいえ、わたくしの仕事は建前が終わればほとんど無くなるんです。それまではせいぜい足を運ばせて頂きますよ」と明るく笑うのでした。

その笑顔が彼を見る最期になってしまいました。何日か姿が見えないと思っていたら、彼の上司の人が見えて、「頭を手術したというのですが、私共も詳しいことはまだ良く分かっていないのですが……」という要領の得ない話だったので、後で永井さんと一緒に働いている二人の同僚に訊いてみると、「どうやら蜘蛛膜下出血で緊急手術をしたらしいんですが、まだ意識は戻っていないようです」と涙目で話をしてくれたのでした。彼等は三人同級生で一緒に入社してから、ずっと組んで仕事をしてきたということでした。

その二日後、永井さんは意識の戻らぬまま身罷ったそうです。享年四十四歳とのことでした。彼はもぎとられたようにあちらの世界へ移っていったのでした。

後には、奥さんと小中高の三人の男のお子さんが遺されました。わたしはせめて無条件で労災の適用がなされる仕事場で斃れてほしかったのでした。彼と彼の死はこちらの心の奥処に刻印され、わたしの夢のなかに現れるような気がして、彼の死を悼むわたしと建ちあがった息子の家が朽ちるまで見守ってくれる気がしました。目蓋の裏に焼きついている彼の笑顔が、そう云ってくれているようでした。

建築基準法による確認済と記された看板には、工事現場管理者氏名と事業主代理人の氏名という箇所に永井さんの氏名が入っていました。その名前は家が完成するまでそのままでしたが、後をひき継ぐことになった上司の東川さんがお通夜や葬殮の段取りを報告に來られました。出来れば契りあおうとまで思っていた男への悼みに炙られて、わたしは長男一家とお通夜に行くことにし、葬儀にはわたしだけが参列することになりました。

「本当に想いがけないことでして、そちら様にはご迷惑をおかけすることになってしまいました……」と云

う東川さんに、「いえいえ、会社にとっても大変な損失でしょうが、ご家族の方にはお慰めの言葉もありませぬ。お気の毒なことです」と受けると、「ありがとうございます。仰るとおり、彼のような営業マンは貴重な存在でした」と返されました。人は皆適所を得て、世にその足跡を遺します。遺し得ぬ者は同じ世に生を享けたあらゆる縁ある者たちのために、また己の孫子のために鬱々として地均しの役割を担うものです。そうした内容の話を、焼香が済んだ後に煌びやかな衣を纏った僧侶がしてくれました。

わたしの父は次男でしたが、家を継ぎました。長男が家を出た為でした。わたしの祖母とその祖母の叔父である直次郎という人と理無い仲になったが為に無理矢理ひき剥がされ、直次郎は北海道へ旅立ったそうですが、後に俠客となり、果ては昔に云う凶状持ちになつて獄死したとのことです。祖母にとつてその叔父は生涯忘れ得ぬ相手となつたのです。それでも百姓としては働き手である婿を迎えぬわけにはいきません。婿に入ったわたしの祖父はわたしの父である自分の長男を、「わしの子でない」と云つては、いつも自宅前を走る北陸本線と七尾線の線路を跨いで、捨てにいったそうです。わたしの母親はその意趣返しを受けて、常々

「みつとんない、頭の悪い女郎や」と罵られ、事ある毎に虐げられたそうです。人が人を殺すのも蔑むのも個人的な経緯とは別に、何百年の間に刷りこまれた不可避の行動パターンによるものならば、任侠道はせめても格好付けであろうと想われます。直次郎さんは同じヤクザを二人ほど殺傷したらしいのですが、わたしの祖母である「ふで」の面影を殺したのでしょうか。わたしは平べったい杓子のような祖母の遺影を見ながら、長じて二人の仲を知つて少なからず驚いたものでした。どこのどんな顔形をした人間にもドラマがあり秘事があるものなのだと教えられたのでした。わたしに飴玉一つくれたことのない叔父は身内から有りつたけの借金をし、悉く踏みたおしました。どんな仕事も巧いかず、最期は自転車のパンク修理を生業としながら五人の子供たちを育てたのでした。その長男はひたすら勉強に励んで司法試験に合格し、地裁の裁判長にまでなりました。叔父は法事等でやつて来た時などに、わたしに向かつて、「お前、悪いことしでかして、わしのあんさの前で判決云いわたされつりよな真似だけはせんとけやな」と大声で喚いたものでした。それでも死ぬ少し前に会つた時には、「一つだけお前に教えといてやろうわい。人間は次の世代に禍根を遺す

さんようにせならんとこいの」と言うたのです。わたしは直次郎さんになった積もりで、「じゃらくせえ、良く云うぜ」と腹で嗤っておりました。ですが運が良いとか悪いとかは、一人の生涯でも三代の因果でも、総じて相殺されてチャラになるのが相場なら、良く出来た話ではありません。

一日置いて通夜となり、その次の日が葬儀となりました。金沢駅の少し北にあるセレモニーホールに着いたのは開式三十分前でした。僅かに残っている駐車スペースへ車を納めて式場のなかへ入っていくと、社長以下社員全員が総出で、通夜の万端に当たっているようでした。通夜も葬殮もおむすびと一緒に、自宅から漂流し、ついには漂泊されてしまった今日の有様です。どこの葬儀場でも身内の悲しみだけが、その漂白剤の中を犬掻きをしながら溺れそうに泳いでおります。

ですが永井家の通夜は違っていました。永井さんの奥さんをはじめ、お子さんたちの様子がやけに明るかったのです。式場の職員の慣れ顔と会社の人たちの深刻な顔付きの中にあつて、一塊になって浮きあがっているような一家の明朗な気配は雨上がりに煙るアジサイの花叢を想わせました。そしてその紫の塊の真ん中に枯れた白珊瑚のような珠が埋まっております。

わたしは思わず、「ああ、永井さんのお母さまなんだわ」と呟いていました。俯いたお顔が永井さんを偲ばせました。その永井さんの顔があちらの世界から覗いて、遺影となつてあちらの世界へ逝つても、こちらへ朗らかな明るさを零し撒いてくれているようでした。

わたしにはご母堂さまがどこかで一人暮らしをなさつておられる気が致しました。奥さんとお子さたちの明朗さは死線を挟んで永井さんとながつていると確信しました。そして中学生の長女とその下の小学生の次男の三人で寄せ書きしたものが式場の入口に掲げられていました。それはまるで野球かサッカーの部員たちの壮行会の応援看板のような趣を呈していました。（お父さん、行つてらっしゃい。僕たちのことは心配しなくていいからね。みんなでちゃんとやるからね。海平）（お父さん、あたしが結婚する時には夢路のバージロードと一緒に歩こうね。友紀乃）（パパ、ママのことはボクが守るからね。隆平）（貴男は最期もサブライズの人だったわね。雲隠れが大好きな人だから、みんなのも有りよね。真紀子）とそこには記されておりました。わたしが座つておられる奥さんやお子さんたちに見えないように、祭壇の遺影にかかるウイंकして向きなおると、ご老母の含み笑いがわたしの目を射貫い

ていました。小さく息を呑んで首を竦める形になっていました。顔を近づけてお悔やみの挨拶をすると、ご老母が、「あたくしが野に放して差しあげますからね」と耳打ちされました。思わず合わせたご老母の目が、銀箱の中に漂よっている翠の玉虫のように見えました。それを機に始まった僧侶の読経の響きは遠い潮騒のほどこにしか届かず、「野に放して差しあげますからね」という言葉が繰り返されし繰り返されし低く揺れくぐもった波動となつて私の脳裏で鳴りつづけておりました。

そのあとは、息子たちに連れられ、夢路を辿る心地の車の中でスーッと魂がぬけたような眠りに落ち、金色の光りが交錯するところを歩いておりました。良く見ると、行けども行けども続く金銘竹の竹藪で、淡い黄金色の薄明かりが暁なのか夕暮れなのかは定かでない、竹の外に目につく樹木など見あたる様子もなく、時折ぱつとぱつと覗く空の蒼さと雲の白さに驚きつづも笹鳴りの音を聴きつづけていると、禽獣の声も様々な自然界の吃音も遠離り、やがてはつきり起ちあがってくる幽玄な弦の調べに誘われ、小川のようにくねる小径を歩いて行くのでした。手首に数珠をかけているのに気付いて、だれかの墓参に行く途中なのか思ったとたん、竹藪の高いところを一匹の真っ黒な蛇が一匹

風邪を切つて飛んで行くのが見え、「もう永井さんのご母堂が野へ放して下さったのか」と考えつつ蛇の蛇行を追いながら先へ進んでいけば、小径が途絶えてふらつき始めた身体を竹に寄りかけて、背を当てて進んでいく内に、誰かの夢の中でわたしが夢見られている感じで竹の海に沈み、いつしか笹鳴りは海鳴りに変じて甲高い女人の嬌声さえ混じり、疲弊しきった五体がふわふわと波間を漂よつて気付けば、そこは竹林を出はずれた山麓の山里の風景が拡がり、白樺の木が墓標のように立ちならんでおり、高いところから鋭い鴨の啼き声が響きわたつていたのでした。

さすれば、木の間隠れに小さな人影が見えたかと思うに一人の老婆が杖にすがつて足を引きずり、藁草履の擦れる音をさせながらゆるゆると近づいてきて、「お出でなされませ。お待ち申し上げておりました。使いのものを向かわしましたほかに、そろそろと思うてお出迎えに参じましてございます」と長く伸びた白髪を首の後ろで縛つた短軀を深々と折りまげたのです。

老婆が踵を返してわたしを促すと、たちまち白樺の林がもとの竹林に戻つて一陣の風が舞いあがり、見あげる笹の覆いが大波となつて絡みあいはげしく荒れくるう様は海底から波上を窺う気配があり、老婆の躰音

も消えてただ笹に鳴る風音だけが耳を聳しているばかりでありました。

その内に、竹を切りはらった跡地に平屋の質素な一軒屋がみえてきて、招じいれられるまま仏間へ通され、お茶のお点前を受けておりました。床の間に一面の平家琵琶が立てかけてあり、それが誰弾くともなく四弦が震え、ひとりでに鳴っております。「生前、主人が弾いていた平家琵琶ですよ」という老婆の声が巫女の呪文のように響きわたって、見えない撥があたりの空気を払って意識が少しずつ押しあげられていくようでした。

やがて老婆の姿がはるか下のほうに遠退いて小っちゃな一点になって我に返ると、未明の薄明かりの中に常の寢床にいる自分がいたのです。自宅に着いたことも自分のベットに入ったことも全く覚えがありませんでした。いまだに消えのこっている弦の響きが不気味で心が落ちつかず、開式には未だよほどの間がある葬儀場へ赴き、まずはご老母に挨拶をと、親類の控え室へ行くと、あの白珊瑚の珠のような髪姿が見当たらないのでした。

ホールのほうへ戻ってみましたが、永井さんの奥さんも子供たちの姿も見当たりません。夢が続いている

感じがしてきて、あの世への渡し守に見えてきた職員を呼びとめて、「あのお、ご遺族の方々はどこらに？」と聞けば、「実は昨夜控え室でお婆様がお亡くなりになられました、わたくし共もこんなことは初めてでございまして、なんとも：」と声をすぼめています。ご老母の遺体は昨夜の内に検死を終え、今は自宅のほうに安置されているとのことでした。わたしは一瞬耳を疑ったのですが、昨夜からずっと現実と夢が一繋がり絡みあって、その幽かに靈気をおびた笹鳴りの分水嶺をわたしとご老母が後になり先になりして、永井さんが弾きならしている弦の響きにのせられて往来しているのではないかと想うのでした。どうしてもご老母の死に顔に掛かっている白布を払い、瞑っている目を指でこじ開け、銀泥の瞳孔を覗いてみたいという欲求をおさえ切れなくなっていました。同時に冬眠箱に眠っている蛇たちのことが無性に気になってきたのでした。

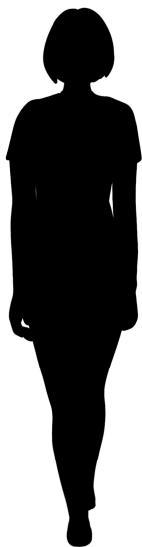
わたしは永井さんの遺影に両掌を合わせ、「貴男のほうからお呼びになったのでしょうか？、それともお母様のほうからでしょうか？」と問いかけていました

遺影の笑顔がこちらへ迫りだしてきて、恥ずかしそうに耀きました。



## 復縁家族

内角秀人



父も死んだ。

最期は呆気ないものだったらしい。薄暗い夕刻、集金帰りの父が運転する車にダンブカーが突っ込んだ。ダンブカーの運転手の居眠りが原因だった。父は病院に運ばれ、私が駆けつけた時にはもう還らぬ人になっていた。目立った外傷がなかったことが救いだっただ。

慌ただしく葬儀が執り行われた。懇意にしている取引業者やお得意さんが多数別れを告げにやって来た。世間慣れしていない私と義明<sup>よしあき</sup>さんはこんな場合どのように対処すればよいか分からず、ただ流されるまま、指示されるがまま弔問客に対応し、頭を下げていた。

ようやくひと段落つき、普通の日常に戻ったのは一カ月後だった。これまで通り、時計店の営業を再開した。父の事故補償金が入るので、あくせく働かねばならないような立場ではなかった。私たちはゆっくり、父を偲びながら、自分たちの生活のペースを取り戻し始めた。

そんなある日の夕食後、洗い物が終わって一息つくうとしていたら、居間にいる義明さんが私を呼んだ。何事かと思っていると、義明さんが畏まって正座している。いつもと様子が違う。私も向き合って座ると、義明さんが口を開いた。

「真凛さん、話したいことがあるんだ…」

私の父と母は、私がまだつかまり立ちすらできない一歳未満の時に協議離婚した。私は母に引き取られて育った。遺族年金をもらっていた祖母も同居していたから、そんなに不自由を感じる生活を送ったわけではなかった。

病院の受付で働く母が父親代わりで、祖母が母親代わりという家族だった。親類縁者にも男性が少なかったので、典型的な女系一族たといえるだろう。

父と母がどうして、そしてまたどのような経緯で離婚したのか、私は聞かされていなかった。こちらから訊こうともしなかった。父はどんな人だろうか。我が家ではその話題を口にするのがタブーになっていた。それでも、男親はいなかったが、母と祖母に大切に育てられて、私は明るく健康的な人間に成長した。何のハズレも感じなかった。友人の家には父親というものがあるのに、うちにはいない。ちよっぴり寂しさを覚えたこともあったけど、母と祖母の前で不満を口にすることはなかった。そうすることは日頃愛情を注いでくれる二人に対しての裏切りではないかとさえ思っている。

た。もつとも、私という人間が生まれたのだから、私にも父親が存在するはずだった。けれど、物心ついた時から、自分の家族は母と祖母しかおらず、それが当たり前前として育った私には、まるで「宇宙人がいる」ということと同じくらい、自分の父親というものが存在するということに実感が湧かなかった。

ただ、父という存在に興味がなかったわけではない。あれは小学三年生の頃だっただろうか。家に私しかいなかった時、何気なく本棚の下の方に平積みしてあったアルバムを見つけた。好奇心旺盛であったその頃の私は、ゆっくりページをめくった。そこには、幼い頃の私がいた。若かりし頃の母と祖母がいた。そして、見知らぬ男性のスナツプ写真も何枚かあった。

誰だろう？ どことなく鼻から口元が私に似ている。もしかして、これが頼子ちゃんや美咲ちゃんが自慢している、お父さん……？

胸をときめかせていたのを、まるで昨日のこのように覚えてる。うちにもお父さんがいたんだ。嬉しく思った。今、どこにいるのだろう？ 何故いつも家にいないのだろう？

写真の中のお父さんは黒縁の眼鏡をかけ、大柄でちよつとふつくらしていた。あまり笑っていなかった。

まだ赤ん坊の私を抱っこしている写真がある。一緒に  
お風呂に入っている写真もあった。

私は自然と笑顔になった。そして、父の所在を母が  
帰宅したら、問い質してみようと思った。

「あのね、ママ……」

「なあに」

「アルバムの男の人、だあれ？」

いつも優しい母だったが、この時ばかりは様子が違  
った。目がつり上がり、頬が引きつっていた。

「誰でもないの。真凛、勝手にアルバムを見ちゃ駄目  
です」

ぴしやりと言ひ聞かせられた。アルバムはいつの間  
にかどこか違うところに隠された。私は母のあんな怖  
い顔をもう二度と見たくなかったので、その日以来そ  
の話題を口にすることはなかった。

三年前、私は商業高校を卒業後、社会人となり、  
携帯電話販売会社に就職した。その年の暮れ、祖母が  
息を引き取った。乳がんだった。寂しさを感じている  
暇もなく、翌年母が急性心不全でこの世を去った。私  
は二十歳の誕生日を迎えたばかりの若さで、身寄りを  
失い、天涯孤独の身になった。と、思っていたが、そ

の葬儀の席上で物心ついて初めて父と会った。叔父が  
連絡してくれたのであった。

父は自分が住む富山県富山市から私が住む大阪市  
東淀川区までやって来た。鮮明な記憶ではなかったが、  
アルバムに貼ってあった写真の男の人を少し老けさせ  
た感じのする人物だった。五十代前半ぐらいで、頭に  
白い物が混じっていた。大柄な人だな、と私は思った。

「この度は……」

父はそう言ったきり、黙り込んだ。悲しみをこらえ  
ていたのか、表情もあまり頭わに示なかった。突然の  
来訪に、私は色々話したいことがあったが、喪主であ  
る手前、父に話しかけることができなかった。胸中複  
雑だった。

場が場だけに、感動の対面というわけではなかった。

その時はお互いの連絡先を交換し、挨拶程度の会話  
を交わしただけで、後日落ち着いたらゆっくり話をし  
ようということになり、父は富山に帰っていった。

二度目の対面は、納骨の後。私が住むアパートの近  
所にある喫茶店で落ち合った。この時も父は口が重た  
いようで、あまり話さなかった。私は自分の近況を報  
告した。

「すまなかったね。お父さんがいなくて、寂しい思いをさせたね」

二言目には、父はそんな言葉を繰り返すばかりだった。

もうそんなことは、どうでもよかった。確かに子供時分の私だったら、どうして母と離婚したのか追及していただろう。だけど私も二十を超え、少しは大人の事情というものが分かる年齢になった。母も物故している。今さらそんなこと追及したところで、どうなるわけもないと思っていた。

そんなことより、私は嬉しかったのだ。生き別れになっていた父と再会することができた。私は一人ぼっちじゃない。血を分けた肉親が生存しているのだ。そして、交流を深めようとしている。そのことに感動していた。

ゆっくり時間をかけて、私と父は話をした。朴訥とした語り口調が人柄を感じさせて、私は父に好感を持った。少し会話が弾み、父は野球好きであることが分かった。私も嫌いじゃなかったの、意気投合した。父は頬を緩ませ、少し饒舌になった。そこで今度プロ野球観戦に行くことを約束した。翌月の半ば、丁度父

の鼻肩チームが大阪にやってくるので、その試合を観に行くことにした。私の名前は、その鼻肩チームから取って付けられたものだそう。私は自分の名前が気に入っていた。

その日は笑顔で別れた。

父と会って、私は納得していたことがあった。それは、私の目に狂いはなかったということだ。

父との再会を果たした前後、私は一人の男性と出会っていた。その頃の私は会社の直営店の主任として働いていた。高校卒業と同時に勤め出したから、勤続一年とちよつと、この業界ではもうベテランの部類に入っていた。男性の名前は上野義明。メーカーからの派遣社員だった。大卒だから、三歳年上。がっちりとしたスポーツマンタイプで、それほどイケメンというわけではないが、爽やかなルックスをしていた。

「ヨリ、彼、どう思う？」

私は小学生時代からの親友である頼子にさりげなく訊いてみた。頼子には義明さんを一度引き合わせていた。

「どうって…、どうってことないけど…」

「そう…」

「もしかして真凛、その目は、恋しちゃった？」

「そうみたい」

丁度母を亡くし、人恋しい時でもあったが、私は彼に心を奪われた。義明さんはごく普通の平凡なサラリーマンだけど、私の心を惹きつける何かがあった。それが何であるか、父と再会してはつきり分かった。

そう、彼は父とよく似ているのだ。

義明さんも私のことを好ましく思ったようだ。頼子の仲介で、私たちはすぐ付き合うようになった。

義明さんはシャイというか、不器用というか、手も握ってこなかった。そんな奥ゆかしいことも彼に対する私のポイントを上げることとなった。

やっぱり、この人なんだな。運命を感じた。私は二度目のデートで、早くも彼との結婚を意識した。人から何と思われようが、それが当然の帰結のように思った。父と野球観戦に行く約束をした日、ドーム球場に彼も同伴してもらうことにした。

「初めまして」

当日、私がそれぞれを紹介した時、二人はぎこちなく挨拶をした。父は、彼は、お互いをどのように思っただろうか。座席は私を真ん中に挟んで、右に父、左

に彼となった。

私は気もそぞろだった。緊張を解くために、ビールを注文することにしたが、父は二年前に痛風を患い、以来アルコールは控えているという。それを聞いた義明さんも固辞し、私一人が飲むわけにもいかず、結局三人とも烏龍茶を飲むことになった。

沈黙が続いた。内野の指定席だったので、外野席にいた時みたいに声を張り上げて応援するわけにもいかない。私は左右の男性に愛想をふりまきながら、チビチビ烏龍茶を飲んでいった。父は相変わらず無口で、義明さんもそれほど口数の多い方ではない。そしてこんな日に限って、試合は大した盛り上がりを見せることなく、淡々と進んでいった。

父は義明さんのことをどう思っているだろうか。いきなり彼氏を連れてきたことに面食らったのではなからうか。横顔をそっと窺う。じつと試合の行方を見守っている。その表情からは心の動きを探り出すことはできない。

義明さんは父をどう思っているだろうか。まだ知り合って間もないのに、父と面会させた。私を重たい女と思っているのではないか。束縛されるのを嫌って、逃げ出すかもしれない。

義明さんには私と父との関係、いきさつを事前に話しておいた。

「そう、大変だったんだね。でもまた会えて、よかったね」

義明さんは労わってくれた。優しい人だ。

挨拶をした後、父と義明さんとの間に会話は成立しなかった。父親と彼氏って、こんなものなのだろうか。私にはよく分からなかった。

一計を案じた。父と義明さんを二人きりにしてみようと思ったのだ。私は七回裏のインニングの合間にトイレに行くと言って、席を立った。果たして、二人はどんな動きを見せるだろうか。会話するだろうか。

私は実際には尿意を催していないのでトイレには行かず、後方の出入り口付近で隠れながら二人の様子を探った。

二人は動かない。所在なさそうだ。ただ座っている。

やがて、父が義明さんに何か話しかけた。義明さんがそれに応じている。二言三言、何かしゃべっている。私はホッとした。何を話しているのか気になるところだが、お互い毛嫌いしたり、いがみ合ったりしたわけではないようなので、胸をなで下ろした。

私は席に戻った。

場の雰囲気は少し打ち解けていた。相変わらず父と義明さんは黙ったままだったけど、緊迫感が薄れたように感じた。

試合が終わった。父の贔負チームが勝った。父の様子を横目で見ると、朗らかな表情をしていた。

ここからが私の腕の見せ所である。

「二次会の用意があるのだけれど、どう？」

「僕はちよつと用事があるから、行けない。残念だけど、ごめんね」

義明さんがやんわり断ってきた。がっかりした。

「私も今日の最終で富山に帰るとしよう」

父が言った。

仕方ない。またの機会にするか。

三人で肩を並べて、最寄りの駅まで歩いた。ここでも無言だった。

梅田の駅で、まず義明さんと別れた。

「まだ最終まで時間があるから、ちよつといいかな？」

義明さんの背中を見送った後、父が切り出した。私たちは駅構内の喫茶店に入った。

二人ともレモンテイを注文し、改まって父と向き合った。父はしゃちほこばっている。何を話そうというのだろうか？

「上野君のことだが…」

父はゆつくり口を開いた。私は緊張した。

「彼とはどんな関係かね？」

ストレートに訊いてきた。武骨な田舎者みたいだ。

「どうって…、パパに紹介したのだから、それなりの関係です」

「つまり…、その…」

「結婚を意識した付き合いです」

私ははっきり言い切った。

「そうか…」

言って、父は咳き込んだ。

「パパはどう思う？ 上野さん、いい人でしょう？」

「実はそのことなんだが…」

父は暗い表情になった。そして、言った。

「私は上野君との結婚には反対だ」

え…。

「どうしてなの？」

私は心の動揺を隠せなかった。てっきり父は賛成し

てくれるものだと思っていた。なぜって、彼は父によく似ているから。娘が自分に似ている男性を好きになることを嬉しく思わないのだろうか。

「理由は今は言えない。いつか話す」

「そんな…」

「上野君との交際は認めない。いいな」

最後は高圧的に言った。父はレモンテイには口を付せず、席を立ち、店を出て行った。私は座ったまま動けなかった。

父がこんなにはっきり意思表示するのは初めてだった。何がいけないのだろうか。義明さんのどこが気に入らないのだろうか。分らない。

父は富山に帰っていった。私は一人、取り残された。

「ふーん」

「ねえ、ヨリ、どう思う？」

私は頼子に相談した。

「お父さん、急な事でテンパったのと違う？」

「どういうこと？」

「折角二十年ぶりに娘と再会できたと思っていたのに、その早々結婚相手を紹介されて、びっくりしたのよ、

きつと」

「そうなのかな」

「やきもちを焼いたのかもね、上野さんに。少し時間を置いたら、どう？ 急いで仕事を仕損じる、よ」

「分かった。ありがとう、そうしてみる」

頼子は名前が示す通り、頼りになる友だった。確かに頼子の言う通りかもしれない。

私は人の気持ちもよく考えず、少し焦り過ぎていたようだ。もう一度心をリセットして、よく考えてみよう。落ち着くのだ。

元通りの日常に戻った。あれから、父とは連絡を取っていないかった。義明さんとは職場で何度も顔を合わせた。が、込み入った話はできなかった。

しばらくして時間ができ、義明さんとデートすることができた。私は父が二人の交際に反対していることを伝えるべきかどうか迷った。

「実は話があるんだ」

映画を観た帰りに寄ったカフェバーで、機先を制するかのように、まず義明さんが口を開いた。いつも口数が少ないのに、珍しいことだった。

何かしら？ 心持ち、身構えた。

「僕たち、付き合うのはやめた方がいいと思うんだ」  
義明さんは言い切った。

えッ、なぜ？ いきなり、急に。私は固まってしまった。

「僕たち、別れよう」

今まで何度か恋愛を経験し、出会いや別れを繰り返してきたが、こんなストレートに別れを告げられたのは初めてだった。そのことが、ぶっきらぼうな義明さんの性格を物語っていた。

「どうしたの？ 私のことが嫌いになったの？」

私は動揺を抑え、平静さを保とうと努力した。引きつった笑みも浮かべる。

「そうじゃない。君のことは今でも好きだ。ただこの前君のお父さんと会ってから、考えに考えて導き出したことさ」

「父ね。この前、父があなたに何か言ったのね」

トイレに行くと言って隠れて二人の様子を窺った時、そのことが脳裏に浮かんた。憤怒した。父が彼に何か良からぬことを言ったに違いない。

「それについては、今は言えない」

彼は言葉を濁した。席を立とうとする。

「ち、ちよつと待ってよ。理由も聞かないで別れることなんてできないわ」

私は必死に引き止めようとした。でも彼はそのまま店を出て行った。私は呆然とその背中を見送ることしかできなかった。

「ねえ、ヨリ、どうしよう」

スマホを握りしめながら、私は頼子に泣きつく。

夜十時。私の部屋。風呂上がり。

「そうねえ。上野さん、どうしちやったのかしら、変ね」

「絶対お父さんよ。何か気に食わないことを言ったんだわ」

「そんな早合点しないで」

「いいや、間違いないと思うわ」

私は義明さんが好きだ。今でも好きだ。このまま別れたくなかった。こんなに男の人を好きになったのは初めてだった。

父は何が気に食わないのだろうか。温厚そうな顔を置いて、本当は気難しい性格なんだ。そんな人間と血のつながりがあるなんて、おぞましく思う。

父の言いなりにはならない。私は決意した。駆け落ちしてでも義明さんと一緒になつてやる。でも当の義明さんも心変わりしている。

どうしてくれるんだ、まったく。私は父への不満を募らせた。娘が自分と似ている男性を好きになる。ごく普通のことだ。父親として、そう言ったことが嬉しくないのだろうか。

私は鬱々とした日々を過ごした。こんな時は何をやっても上手くいかない。仕事をしていてもケアレミスを連発し、上司に怒られる始末。落ち込んでしまう。そんな折、父から電話があった。火曜日の夜だった。

「次の休みはいつだ？」

少し強い口調だった。

金曜日、と私は答えた。

「一緒に行きたいところがある。付き合ってくれ」

行き先を告げず、待ち合わせの時間と場所を決めると、父はそそくさと電話を切った。

一緒に行きたいところって、どこだろう？ 私は父に会って、早くこの前の件の真意を突き止めたいと思った。彼とは絶対別れたくなかった。誰が何と言おうと、父が反対しようとも。その決意のほどを父にぶつ

けてみようと思った。果たして、どんな反応を見せるだろうか。激怒するかもしれない。そうなった時は、そうなるまでだ。腹をくくった。金曜日が待ち遠しかった。

金曜日。待ち合わせの梅田駅に、待ち合わせの時間二時きっかりに、父はやって来た。

「どこ行くの？」

「墓参り」

そう言ったきり、父は黙り込んだ。墓参り……。お盆でもお彼岸でもないこの時期に。しかもこの前母の納骨を終えたばかりだった。不審に思ったが、父について行くことにした。二人で電車を乗り継ぎ、母や祖母が眠るお墓のあるお寺に向かった。何か魂胆があるのだろうかと思った。

お寺に着いた。途中の花屋で季節の花を買った。父は何も言わず、境内をどんどん前に進む。遅れまいと、私も足を速めた。

目指す墓の前に来た。父は花を供え、しゃがんで手を合わせ拜んだ。私も倣った。しばらく拜んだ後、父が私の方を振り向いた。

「真凛、話したいことがある」

きた、と思った。

「この前、上野さんとの結婚について、反対しただろう？ それには理由があるんだ」

「どんな理由？」

「それは……つまり……、君と上野さんは兄妹なんだ」  
えっ！

「パパは実は君のお母さんと結婚する前に別の女性と結婚していてね。その女性との間に子供が一人できた。それが上野さんだ」

そんな……

「上野という苗字を聞いて、もしやと思ったんだが、上野さんの母親の名前を確かめると、やはりそうだった。君と上野さんは腹違いの兄妹なんだ」

「嘘よ、そんなこと……」

私は首を振った。そんなの、私と義明さんを別れさせるためのどっち上げにすぎない。そう思った。

「いや、本当のことなんだ」

背後から声が出た。振り向くと、義明さんが立っていた。いつの間に来たのだろう。仕事は抜けてきたのだろうか。

「この前、大阪ドームでお父さんからその話を聞かさ

れた時は、僕も半信半疑だった。でも、母に確認してみると、お父さんの言う通りだった。僕たちは兄妹なんだ。だから結婚はできない」

私と義明さんが兄妹だなんて、信じられない。けれど、父も義明さんも口裏合わせて冗談を言っているようにも思えない。

私はたじろいでいた。気持ちの整理がつかなかった。

「真凜さん、突然のことで驚いていると思う。僕も最初は信じられなかった。けど、これは事実なんだ。僕たちがお互い惹かれ合うのは必然的なことだったんだ」

私は訴えかける義明さんの目を見つめた。澄んだ色をしている。嘘偽りを述べている者の目ではない。

父も頷いている。私は対応に困った。

「ここで一つ提案なんだが：」

父がおもむろに口を開いた。

「よかつたら、私たち三人、一緒に暮らさないか。これも何かの縁だ。富山で一緒に時計屋をやらないか。

もちろん、強制ではない。君たちが望めばの話だが」

また急な展開に、私は戸惑った。義明さんの顔を見る。

「僕は賛成だ。これを機に、もう一度家族として再生しよう」

私は…、私は…。私はどうしよう。

「返事はゆっくりでいいんだ」

その父の言葉が、私の背中を押した。

「私も富山に行きます。一緒に暮らします」

私は宣言した。覚悟を決めた。

「そうか、ありがとう、真凜」

父の目に光るものがあつた。

「うん、その方がお母さんも喜ぶと思うよ」

こうして、私たちは家族となった。義明さんと私はそれぞれの会社に辞表を出した。私たちが結婚するのではないか、と周りの人は噂していた。私は一々説明するのが面倒だったので、言われるがままにしていた。頼子だけには事情を説明していた。

二人の家族従業員を得て、父は大張り切りだった。

店を改装し、仕入れ先から新たに商品を通常の五倍の量も仕入れた。そのおかげで、父は仕入れ先の慰安旅行として香港に招待された。

店は個人商店だったが、外商にも力を入れ、地域に根付いていた。父が店長で、義明さんが外商担当、私

が経理事務を受け持った。

楽しかった。私たち三人は最初こそぎこちなかったものの、徐々にペースをつかみ、それぞれの生活のリズムを刻んでいった。炊事、洗濯、掃除などの家事は主に私の仕事だったが、父と義明さんは率先して手伝ってくれた。

本当に楽しかった。なのに…。

祖母、母、父。相次いで亡くした。私はもしかしたら崇られているのではないか。お祓いでもしてもらおうか。

そして、私は今、義明さんと向き合っている。話したい事って、何だろうか？

義明さんはじっと私の目を見ている。私も見つめ返した。油断すると、吸い込まれていきそうだ。

「実はね…」

義明さんは重々しく口を開いた。

「僕たちは…、僕たちは、兄妹じゃないんだ。君を欺いていたことは謝る。すべてはお父さんの目論見なんだ」

義明さんの説明によると、大阪ドームで初めて会っ

た時、父は義明さんが私の結婚相手になるだろうと直感したらしい。初見で好印象を持ったそうだった。ただ結婚となると、その相手にふさわしいかどうか不安に思ったそうだった。私がずっと女系家族に育てられて、男の人に免疫がないのではないかと思ったのも不安材料の一つだった。そこで試してみることにした。私と義明さんは兄妹として一緒に一つ屋根の下で暮らし、本当に夫婦として、家族としてやっていけるかどうか確かめてみようとしたらしい。一年間、私たちが無事に過ごすことができれば、その時改めて私に真実を話すつもりだったらしい。

「お父さんは本当に君のことを思っていた。許してくれ」

私は静かに義明さんの言葉を聞いていた。私は知っていた。私と義明さんが兄妹ではないということ。あれは父が香港旅行でパスポートが必要なため、忙しい父の代わりに私が市役所に戸籍謄本を取りに行った時のことだ。義明さんと私が本当に兄妹であるかどうか、父の言葉を疑っていたわけではないけれども、私は確かめてみることにした。父の戸籍謄本と同時に、義明さんの物も申請した。義明さんの出生の欄に父の

名前はなく、全く知らない男の人の名前があった。この時、私は父と義明さんが偽っていることを知った。ただ、だからといって、大騒ぎしたり、どういふことなのか父に問い詰めたりしなかった。何か魂胆があるのだろうかと思っていた。

「知っていたわ」

私は低い声で言った。

えっ、と義明さんは意外そうな顔をした。

「そ、そうか、知っていたのか…」

義明さんは落ち着きなく、キョロキョロとした。

「申し訳ない、申し訳ない」

後はしきりに謝るばかりである。

「いいの」

私は言った。三人で暮らしたここ一年弱で、父の愛情をしっかりと受けとめた。復縁できて本当に良かったと思った。同時に、義明さんの誠実さにも惹かれるものがあった。父のわがままを受け入れたことは凄く感謝している。

「それで、これからのことだけど…」

義明さんは慎重に言葉を選ぶように話す。

「よかったら、これからも一緒に暮らして行かないか。」

兄妹ではなく、その…」

「ええ、いいわ。夫婦としてね」

「本当に、いいのかい？」

「異存はないわ」

私はきっぱりと言った。

「あ、ありがとう。こ、これからもよろしく」

義明さんは少し震えながら、右手を差し出した。私も右手を出し、握った。温かかった。これからは義明さんと一緒に、『新生家族』として生きていく。私はそう心に決めた。

















## 合評会案内

一、日時 二〇二六年 五月一〇日（日）

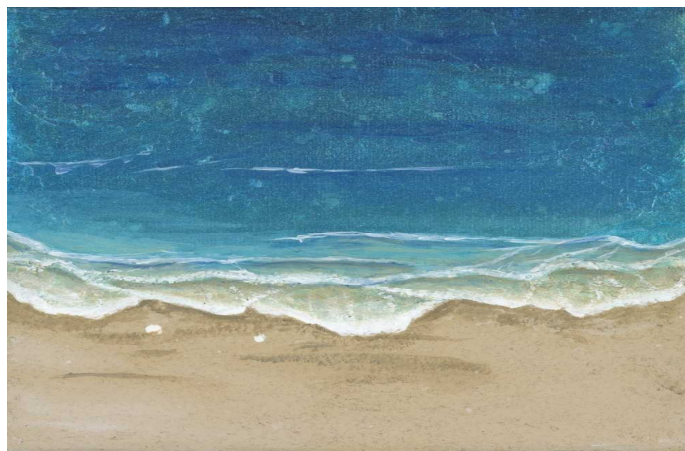
午後二時二十分

二、場所 富山県民会館 六〇八号室

富山市新総曲輪四番一八号

TEL (076) 4321311

読者方々のご出席を歓迎します。



深井了

海は遠くの方で黒ずんでいた。手前は灰緑色になっている。砂浜から百メートルほどのところにテトラの列があり、その前後で一番青い。今日は晴れていたのに、と少し考える。六時十分ぐらいだろう。店に入ったのは六時五分前だった。空はかなり明るさをなくし、薄い灰色になっている。五月の下旬にしては早すぎる。

砂浜はとても貧弱で、ここからはほとんど見えない。二階の総ガラス張りの一層窓際にいるのだが、店の敷地と砂浜の間には背の高い疲れて傾いた草が生えている荒地があるからだ。そこへ今、店の駐車場の端を通って、大きな白い乗用車が乗り入れた。車一台分だけ斜めに草がなぎ倒されて道になっていて、左右にはなく、前に後ろに揺れながら進んでいく。

「おかわりしろよ。かな」

彼女のむこうの席の中学生？ のとても白い頬を見ながら言った。高校生かもしれない。ショートカットにしている、眼の下あたりでほんの少し角ばっているのだが、かえってそれがとても滑らかな印象を与えてくる。透明と言ってもいい。最近、これほど美しい子を見ていない、と考えている。

「ああ、いいけど。悠さん飲まないの？ 悠さん飲ま

なかったら、一本は空けないよ。」

今夜飲みきったのは、イタリア産の白のハーブだ。酸味が強く、からつとしていた。私は車のことを考えて、グラスに半分程飲んだ時、二回ばかり注ぎ足したのだった。

「じゃあ、グラスワインにしよう。赤にする？ 白？」  
「じゃ、今度は赤にする」

手でウェイトレスの子を呼んだ。身長百五五、六。黒のワンピース、丸顔で、黒縁の眼鏡をかけている。髪も染めてなくて、黒いままショートにして軽くカールさせている。オーダーを復唱する時、眼鏡の奥の丸い眼がギョロリと動く。

小さな四角いテーブルの上は、……風サラダ、ジャーマン・ポテトとバジリコとホウレンソウの……、ライスコロッケ、最後に来たボンゴレ風……の Pasta、と、どれも半分ほどずつ手がつけられていっぱいになっている。

「かな、けっこう酒好きだね。お店の時それほど飲まないよな」

「ああ、お店はお仕事だから。でも、わたし、酒好き

よ。今日はどうもおいしいよ」

かなもじゆうぶん美しい。身長は百六十に少し切れる。細い小学生のような体を、今日は黒のパンタロンスーツに、赤いシャツで決めている。両方も、特にシャツは光沢があつて、黒髪を一度束ねて、肩から、小さな胸まで垂らしている。小さな長円形の滑らかな顔の輪郭は、切れ長のやや細い眼のあたりで、少しくぼんでいる。眉が濃く、睫毛も濃い。

店に入ったなりは、オーダーを決めるのに、なまりのある日本語が小さな店の中に響くほどで困ったが、酒に酔つて、おなかもふくれて、静かになっている。最初にビールも飲んだから、ワインのハーフトル一本分ぐらいは飲んでることになる。色白の顔は、赤くなくて、黒ずんでさえ見えて、彼女の不健康な生活がそこに現れているように見える。

「ね、あのおじいさん、死ぬんじゃない？」

見ると、砂漠の端から伸びた小さな突堤によるけながら、老人が歩いている。四角い顔に、けっこう肩巾のある低い体が、足が悪いのか、左右に揺れながら、先端に向かっていく。頭も服も灰色である。ゆっくりしているからか、揺れ方のせいかな、遠景では、古い乾

いた布切れが、風に押されて、海まで運ばれていくように見える。そんな印象をかなは言ったのかもしれない。でも、彼女の口から簡単に死という言葉がでてきたことに小さく驚いている。彼女の生き方、これまでの人生に死の近さを考えてみる。マレーシア、これまでの時、ファミリーで、パリとロンドンへ行ってきたと言っていた。サイト・シーイングよ。今年の二月に来たなりは、英語の勉強だと言って、二人は英語で話をしていた。それ以上の事はあまり知らない。年齢も、本名も聞いたことがない。彼女の生き方は簡単な死に近いところはないこともなさそう。過剰なほどの接客、店のナンバーワンと言うよりかせぎ頭だろう。そのくせ、その金にそれほど頓着なさそう。でも、それ以上はやはり知らない。

「いや、大丈夫だよ。人間、あれほど年いってしまふと、自殺はしないよ。だって、もう二、三年もすれば、どうせ死んじゃうよ。慌てなくてもいいさ」

けっこう言いかげんな答をしている。あの老人は五年以上は生きていそう。それに、消防署の救急隊に勤めていた男の話を聞いたことがあるが、十七万の田舎の市で、週に三、四人の自殺があり、その半分以上

が、病気を苦にした老人だという。

「そうだね。心配いらぬね」

かなは細い腰を曲げて笑った。どうせいいかげんな会話なのだろうが、笑いの中に変に満足なところがあ。私の答えが気に入ったのだろうか、それが彼女の心のどのあたりで落ち着いたのだろうか。

赤のグラスワインが来て、彼女は赤黒くなった顔を斜め上に向けて一気に半分くらい飲んだ。ワイン・レッドの口紅だったろうが、顔色の変化の中で消えている。まだ、先程の満足が続いている。

自分も飲みたい、彼女の酔いに重なりたい気持ちが出た。自分も飲みたい、彼女の酔いに重なりたい気持ちが出た。自分も飲みたい、彼女の酔いに重なりたい気持ちが出た。自分も飲みたい、彼女の酔いに重なりたい気持ちが出た。

かなはタバコを飲み始めた。これで三本目だ。店にいる時は、もっと喫んでいる。ほとんどウイスキーの入っていないウーロン茶割りと交互に喫んでいる。あれだけの量を飲めば、ウーロン茶だって体に良いとはいえないだろう。

「悠さんは煙草喫まないね」

「ああ、スポーツマンだから」

「そうだね」

二人で笑う。きどつて私が言つて、かなが茶化したからだ。

「でも、若い時は、たくさん喫んでいた。一日に一箱半、……だけど、死にかかつて止めたよ」

「どうして」

「まあ、体に合わなかつたんだらうけど、飲みに出て、お酒とタバコを両方とも順番にへビーにやっていると、喘息みたいになつちやつて、息が吸うのも吐くのもできなくなつて……」

喉に掌を当てて、息が詰まる格好をしてみせた。

「そんなの、五回も六回もなるとやめるだらう。とても苦しいんだよ。水を飲むとなおるんだけどね」

「今は大丈夫？」

「ああ、まあ、昔の話だよ。何年前か言うと歳がばれるからよすけどね」

「年？ 歳関係ないよ。マレーシアでは、男の年いって、お金ができてから結婚するよ。かなもあまり若い子好きじゃない」

「いいよ、無理しなくていいよ。国に帰つて若いカッコいい男と結婚しろよ」

「いい。若い男こりごりよ。私、一度だまされた」

「どこで？」

「東京だよ。もうこりごりよ」

東京なら日本人の客か？ あるいはマレーシアから従ってきた男か？ 店にはそんな若い男は出入りはしない。

「そんなこと言わないで。悪い男ばかりじゃないよ。かなは若くて美しいから、その気になればすぐに見つかるつて」

「悠さん、お上手ね。でも、いい。私、悠さんのこと好きよ。優しくて、裏切らないよ。お店でも、ずっと指名してくれる。他のお客、すぐに浮気する。信用できない。でも、悠はいつも私。私うれしいよ」

どこの店へ行つても、最初に横に坐つた子を指名することが多い。めんどくさかつたからもある。

「今度、帰つてきたら、私、悠さんの女になるよ」

「ほんとだよ。今日は？」

「今日でもいいけど、今日は時間ないでしょ」

「そうだな」

「今度、六月十五日、私帰る。七月十五日に帰ってくる。一カ月間待つてる。でも他の女とすると、あそこ切っちゃうよ」

「こわ。浮気なんかしないよ。だいいち、俺はモテんつて」

「違うよ。悠さんモテるよ。優しいもの。でも、悠さんはかななもの。かなはハッピーよ」

「俺もハッピーだよ」

たわいもない話になった。でも、彼女のような子が、自分を、彼女の言葉の通りに好きになつてくれたら、と思つてみる。

しかし、現実性がないからか、思考は力を持たない。和実の、「かなちゃんは、商売上手ながですちゃ」という言葉が浮かんできた。と同時に、かなの煙草を吸う様子を見ていたからか、二年前にこれで死ぬのか、と思つたことを思い出した。

何年ぶりかで、高校の同級の宗田と飲んだ時だった。彼は、私がり引きしてもらつてゐる会社とは、ライバルの、この市に本社のある大手のサッシメーカーの部長をしている。七時位から寿司屋で、二本のビール

の次に、日本酒をかなりあけて、スナックを二、三軒まわつた。

宗田は、高校までは、くりくりとしたいはずらつぱい眼の、どこか坊ちゃん育ちの甘さが見える男だった。しかし、企業に入つてから、その環境のせいだろうが、方言丸出しのがなりたてる、肥つて顔の肉がぶ厚く盛り上がり、細胞というものからほど遠いような表情の顔になり、若い女の子が一番いやがりそうな男になつていた。私も昔は親しくしていたものの、このかわり果てた男とはなかなか気が進まなくて、三年に一度ほどの付き合いになつていたので。この日、彼を誘つたのは、父が死んで、自分の置かれた状況にうまく適合できない苦痛と不安からだったかもしれない。彼は最初の鮪屋から、がなりたて自慢し、大声で笑い、そして、酒を進め、自分は次から次と煙草に火をつけたのだった。私は一軒目から、こんな場を持つたことを後悔していた。鮪屋の次に、私の行きつけのスナックへ行き、それから、彼の行きつけの店へ二軒まわつた。その二軒目だった。地下へ降りて行く通路も、ドアも壁も天井もまつ黒いペンキがごてごて塗つてある店だった。ドアを押した瞬間に、煙草の煙の濃度の高い、

淀んだ空気が私を包んだのだった。お客がいっぱいで、それでもカウンターの端を開けてもらい、水割りを二杯飲んだ時、急にやってきた。息が吸うことも吐くこともできないのだ。痰とも唾ともつかぬ粘着した液体が、喉の奥にはりついて、吸っても吐いても、そこを空気は通ることができないのだった。今までになつたのとは質的に違っていた。そんな時は息が苦しいだけで、水を飲めば、喉のまわりについた粘着物が濃度が薄くなって、しばらくすると息ができるのだった。今度のは餅が喉につかえたのに似ていた。私は立ち上がって、しかし、どうにもできなかった。三十秒ほどが経って、このまま死ぬのか、こんなところか、と困つたのを覚えている。体から、力がなくなりかけていた。その時、ふと人工呼吸のように、できなくても、吸ったり吐いたりする動作を大げさにやってみたら、と思つたのだった。実際やってみると、喉の粘着物がほんの少しずつ前後に動き出したのだった。助かるかもしれないと思つた。二十回ほどくり返した時、粘着物の間に、ほんの少し空洞ができ、そこから息をすることができた。二分は経っていたと思う。さらにまた二十回位したところで、水を飲むことができるだろう

と思ひ、水をもらひ飲んだ。

「何をしとるんじや」

神経が厚い脂肪に包まれて鈍感になりきつた顔の男が、酔つたまま言つた。

「なんでもない」

私は説明するのが嫌になつて坐りなおして、飲み直した。

あの日は、あれでとっても死に近かつたのだろうか、と思つてみる。死ななくてよかつたと思う。あんなところで、あんなふうには死にたくはなかつた。でも、あれが死に近いのなら、死ぬ時も、場所も選ばせてくれないのはよくわかつた。

「いい日だね。暑くも寒くもないよ。今が一番良い季節だよ」

「かな寒い嫌いよ。冬は嫌だよ」

「そうだな。かな。でも、今度来たら、スキー教えたげるよ。日本に来たら、スキーしなくちゃ」

やや興奮して言っている。

「いいよ、かな、寒いのは嫌だから。テニスだったら

いいよ。かなりやったことあるもの」

「でもいいけど」

「悠さんテニスうまいんでしょ。かな、テニスならやりたいよ。スキーは寒いから嫌だよ」

可能性のない話をしている。彼女とデートしたのは、彼女が二月にこちらに来てから、まだ二度目なのだ。

彼女は、月に一、二度店へ行くのだが、その度に、今度食事しようと言ってくる。和実の言う通り、商売上手なのだろう。三月の最初だったか、道にまだ汚れた雪が残っている時に、一度デートした。その時もこの店へ来たのだが、予約が入っているとかで断られ、もう一軒まわったが、そこは席がしまっていて、けっきよく若竹で鮪を食うことになってしまった。

また、かなのむこうの中学生の頬に目が行っている。一緒に笑っているのは父親と母親なのだろう。ただ二人とも、娘の美しさと服装も姿勢も顔付きもまったく違った雰囲気だ。くたびれていて、くすんでいる。娘は薄い青紫の襟の小ぎれいなワンピースを着ている。その前に二人は体を丸め、艶のない灰黒の服を着、眼の光は疲れてくもっている。ハーフのボトルを飲み干す、少し前に、三人は入ってきたのだが、黒緑色の小

さな十年も経っていそうな車から、三人は出てきたのだ。

「悠さん、冷たいよ。いつも仕事仕事。かな電話する。でも、忙しい。次に約束する。ごめん、今度出張。かな寂しいよ」

「悪かったよ。でも、ほんとうに忙しかったんだ。出張にも行つてたの本当だよ」

「かな信じるよ。でも、悠さん、仕事しすぎよ。仕事仕事だめ。たまには遊ぶ。かな悠さんを楽しませてあげるよ」

先週の木曜日と先々週の木曜日、二週とも約束を破つてしまった。先週は出張が入り、先々週は急にお客さんが来たのだ。

「でも、かなも知ってるだろう。今、社長はたいへんなんだよ。日本は不景気なんだから」

「ああ、かな知ってるよ。マレーシアも大変よ。フィリピンも、アジアみんなだよ」

「そうだよ。かなは、クレバーでインテリジェントだね」

かなは確かに利口な子だ。六カ国語だったか、七カ国語話せると言っていた。マレー語、英語、北京語、広東語、日本語、タガログ語……それと、……ハイスクルでは英語を勉強していたという。それだけでなく、けっこういろんなことを知っている。好奇心も強いし、ウィットもある。

「ああ、悠さんは褒めるのうまいね。でも、悪いこと言わないのは、優しいよ」

中学生の顔が瞬間、こちらをむく。大きい眼が、黒黒としていなくて、青く澄んでいるような印象を与える。ずっと私の視線が彼女に魅きつけられたままになつていたからかもしれない。そうではなく、二人の会話に時々英語が入るからかもしれない。

青い透明な眼の色が、私の心臓を小さな音で震えさせたから、というより、今まで見ていた白さに若い生命力が、そこに薄い紅をさしたような色にしている頬の感覚にとても似ているからだろう。私の脳の中に二週間前のとても明るい朝の記憶が甦がえってきた。

明るさを私はまだ眼をつむったままで思っていた。被っている臉の向こうに、寝室の窓から見える空の部屋に満ちている五月の朝の明るさを淡い明るい肌色と

して感じていたのだ。

「もう、死んでもいい」

眼をつむったまま感じている明るさと同じ感覚で言葉がやってきた。だから、幸せな言葉のままに響いた。

「もう、死んでもいい」

念を押すように、何度も繰り返して昇ってきた。しかも、何の脈絡もなくやってきた言葉であるのに、ずっと考え続けてきた結論のように、自分の中でしっくり落ち着いているのだった。言葉がくつがえされる度に、それは私の中にしつぽりとはまりこむ場所に沈み込んでいくのだった。そして、私はその自分の言葉に、その朝の明るさの感覚と同じ感動を感じているのだった。

「もう死んでもいい」

私はもう一度、また親のほうに向いたままになっている中学生の頬を見ながら反芻して見た。その横顔が小さく笑った親に向けられた眼が瞬間、明るい光を放ったのだ。しかし、親たちの顔は、その光とは関係のないようにくすんだ疲れたぶ厚い肉が動かないままであった。濁った眼はどんな反応の光も放たなかった。

「かな、もう一杯どう？」

私はゆっくりりしゃべる。脳の中をあ朝の朝の明るさが大きく占めているからだ。

「サンキュー。レッドね、ベリー、グッド。ティステイングよ」

レッドのrが、かなり巻舌で発音された。英語の響きのせい、中学生の視線が二度三度、こちらに向けられた。その度に、私の胸は震えて、鼓動した。視線は、英語の発音をしたかなにはなく、私に向けられたのだ。

「もう、死んでもいい」

今度は半分ふざけた感じで、私の脳は思考した。その後、こんな女の子となにかになれるのなら、とフアウストとグレートヘンの物語をほんの少し思い出しながら、思考が続いていた。でも、その思考が真実でないのは、ふざけた響きのせいではなく、私はよく知っていた。死んでもいいことの意味をそんなことでごまかしてはいけないのだ。

私は手をあげて、ウェイトレスを呼びよせた。近づいてきて、黒緑の眼鏡の奥の黒い眼玉が、私とかなの

上を二度三度行き来する。

「もう一杯、同じ赤で」

私はかなの前のグラスを指して言った。

「グラスワインの赤ですね」

義務付けられた復唱がかえってくる。

なぜ、死んでもいいのか。旧約の中の人類の祖先達が、百八十年も生き、人生に飽きて死んだことは心に残っている。しかし、自分はまだ五十歳だ。人生に飽きたほど、生きてきたと言うのだろうか。意識が少しずつ覚醒してきて、脳の働きが活発になりながら、まだ眼を閉じたまま考えていた。いや、この時に、思考の底から、そんな思考が軽い嘘であるかのように、意志に満ちた濁った光と薄笑いが私を見ているのを知っていた。和美の眼だった。私を嘲笑っているのだった。

和美とはひと月に二度ずつ、性的な関係で会っている。身長百六三の、三十をいくつか過ぎた、よく発達した肉体をしている。大型店の駐車場で会うと、彼女は車に乗り込んで、食事をしてから、ホテルへ行く。一緒に風呂に入り、射精して帰ってくる。三時間ほどの付き合いだ。月の後半のデートの時、彼女に決まっ

た額を渡す。子供がいて結婚していて、生活できないから助けてくれ、と言うのだ。ありがたい、悠、あんたのおかげで助かつてるのよ、と言う。お互いに、好きだ、と言う時もある。会っている間、互いに好きどうしのようにつきあっている。そんな彼女の眼が私を笑っているのだった。どれだけ体を重ねていても、けつして彼女を愛することのないことを見抜いている笑いなのか。いやそれでは、死んでもいい、にはつながらない。私が彼女から受けている性的満足度を知っている、愛もないのに、と笑っている……：確かに、彼女は性的には、死んでも良いと思わせるほど、私に満足を与えているのかもしれない。

かなは、顔が赤黒いだけでなく、眼にも彼のようなぼんやりとしたところが出てきた。二杯目のグラスワインには唇をつけただけで、あまり減っていない。私は彼女のグラスをとって、自分のに傾けて、半分注いだ。

「オーケーよ。全部飲んでいいよ」

また、中学生が英語に反応したが、ちよつと首が動かなかつただけで、すぐに止まってしまった。私は半分をいっきに喉に入れた。

それでは、お前は、フロイトの説が正しいことを、また『ファウスト』の最後の言葉、全てはバイブリッヒなところへ、が自分にも正しいことを認めるんだな、と思考は自嘲している。

あの朝の二、三日後までも、何回か考えたが、同じ思考経路をたどって、同じ結論に達した。

ただ、心の中では、けつしてそうではなかったのだろう。やはり、あの言葉はくり返され、思い直されていったはずだ。和美との関係だけではない。それは自分の人生がそれだけでないのと同じだと言いつづけているのに似ていた。しかし、思考はそれ以上は進まない。進まない性質の思考だったと言える。

「もつと飲んだらいいよ。悠さん、もつと飲もうよ」  
濃い太い眉に皺を寄せて、かなは言った。

彼女は酔っていて、ほんとうに私と飲みたいと思っていると思わせるような表情だった。今ほど飲んだグラスに半分のワインが胃壁から胸のあたりに広がり、私も少し酔った気分になってきた。彼女とこんなふう  
に飲んでいたいという思いがやってくる。

「ポリスがこわいからやめとくよ」

「悠さん、まじめね。まじめすぎるよ」

「そうかな」

かなも真剣に飲めと言っているわけではなかった。

この後ドライブして、軽いキスぐらいはと、どちらも仕事のように考えているはずだった。

今朝、起きてすぐ考えたことは、今日の約束をキャンセルできる口実だった。でも、すぐに、三度も四度もすっぱかすのはよくない、という考えが浮かんで支配的になり、なんとかそのような時間の使い方をしてみようと思ったのだった。三時半に体があいた。私は大急ぎで、行きつけの喫茶店へ飛ばした。その二階で、メイラーの『The Armies Of The Night』の辞書をくりはじめた。いつもの癖ですぐに眠りに入ったが、二十分後に目が覚めて、かなに電話して、五時の約束を五時十五分にした。そうすれば、五時まで三十分間、辞書をくっておれた。しかし、できることなら、ずっとこのままそうしておりたかった。それに疲れたら、小説でも書いていたかった。今の生活の中で、そんな時間はほとんどもてなかったのだった。英語や独語の辞書をくっていると、とても心が休まるのだった。その後、すぐにやってくる眠りも救いのように心地よかつ

た。互いに義務のように会って、食事に行く。軽く抱きあって、店へ行って酒を飲む。彼女が仕事としてやっていると思うと、こちらにも仕事のように感じてしまう。そんなことより、……いや、そんな比較の問題ではなく、自分にとつては、本に向かえる時間は様々な意味で貴重なのだった。

「悠さん、まじめだから好きよ。今度、かな、悠さんに遊び教えるよ。楽しませてあげるよ」

「楽しみにしてるよ」

「今度七月に帰ってきたら、かな、悠さんの女になるよ。いい？」

「エッチもするのかい？」

「いいよ、ホテルにも行くよ」

「うれしいね。楽しみにしてるよ」

中学生に聞こえてるのではと気にしながら、ふと、彼女は、七月に日本に帰ってきてても、こちらには来ないので、と思いがよぎった。空約束などということなどでなく、彼女達が希望しても、同じ店へ来ることはなかなか難しいようなことを元締めのような存在をあげて、和憲は説明していた。しかし、どうでもよか

った。もし、彼女が戻ってきてても、おそらく私達はホテルへは行かないように思われた。今日は軽くキスして軽く抱き合い、それでいいのだ。それ以上のことを考える事は意味がなさすぎる事だった。

私達の会話に、中学生の子は反応しなかった。父親と母親が話していて、彼女はそれも聞いている様子ではなかった。パスタの後に来たデザートに心を集中しているようだった。

突堤には老人の姿はもうなかった。海ではウォータージェットが二台音をきしませて、あちらこちらに走り抜けていた。やはり、けっしてテトラの列から大きく外海へ出る事はなかった。

五時十五分にかなかに会ったとき、心にはまだいらだちが残り、それが体の内に暑さとして感じられていた。けれど、今、こうして少しのアルコールが入り、海を見ながらの食事をしているうちに、いらだちも熱も消えさっていた。

そういえば、二週間ほど前、二十年来、いや、三十年来、書かなければならない、と思ってきた小説を印刷屋へまわしたのだった。三十年前、私たちが二十一歳の時自殺した男のことだった。自殺した人間はまわ

りに多くいたが、心にずっとひっかかっていたのは、やはり私にいろんな意味で近いところにいたからだろう。とはいえ、小中は一緒に学校から帰る間柄だったとは言え、高校時代は彼は政治サークルに走り、私はガリ勉に埋没していき、ほとんど話すことはなかったのだ。高校卒業後も三度しか会っていない。一度は彼が浪人していた時、彼の家の彼の部屋で、彼が高三の時キャップをしていた政治サークルを離脱した理由を訊こうとすると、彼はそのときつき合っている友達や女の子の話をして逃げたのだった。次は彼が大学に入り、小学校の同窓会をした時で、幹事どうしの打ち合わせ以外に何も話さなかった。最後は彼が大学二年目で、私が三年目で、私たちの大学での闘争が下火になりつつあった時、彼が入院していた結核療養所であった。私はまた彼が政治サークルを離脱した理由を聞こうと思っていたのに対し、闘争に参加している私に対して、彼は「勉強しろ」と命令口調で、しかもかなりいい加減な馬鹿にしたような態度でくりかえしたのだった。高校以来のお互いをほとんど知らないでの議論だったが、延々と三時間やったのだった。次の日電話がかかってきて、マージャンしないか、とか、酒を飲まないか、と、前の日の議論で、はじめて私の存在に気づい

たように誘ってきたのだが、彼の態度にうんざりしていた。私は、東京へ帰るから、と嘘で断ったのだった。暑い夏の日だった。その年の暮れに、彼は吊り橋から自らを投げた。それだけの付き合いであったにもかかわらず、その死に方のせいか、私は彼のことを、そして自分自身の生き方を彼の死という鏡でずっと考えさせられてきたところがあつた。彼が二十一歳で死んで、それから三十年近く経ってしまつていた。その前に二度書いたのだが、不十分で、どこか自分が不純に感じられ、活字にはしなかつた。今度のはそれなりに、自分でじっくり書けたと言う思いに至ることができた。印刷屋に渡したのは、あの朝の二、三日前だったかもしれない。三十年間も気にかかつていたことを書いたのだから「もう、死んでもいい」と言葉が出てきてもいいかもしれない。しかし、私のライフワークでもちろんない。

「疲れてる？」

かなの声にはっとした。ぼんやりしていたのだ。かなは煙草を指にはさんだまま、私の顔をじっと見て笑っている。ワインは私が半分もらった後、ほとんど減っていない。

「もういいかい。出るか」

「そうね」

彼女は時計を見た。十四万のを九万で買えて得たと言つていた。和実に言わせると、彼女はチップなども入れると月に三十万は稼いでいるということだ。六ヶ月で百万以上の貯金を持つて帰り、おみやげも向こうで価値あるものを買つていくのだろうか。

七時少し前なのだろう。ほんの少し浜辺と空が暗くなつてきている。

三十五歳の時同人誌に入ったのだが、その二作目に『病院の五階に住む男』というのを書いた。原稿用紙で九枚だったかで、掌篇だったが、その中で、自分は五十三歳の時に死ぬだろう、と、私に言わせていたつもりでいた。小説の話だが、やはり気になつていて、本当に五十三歳に向けて生きてきたようなところがあつた。死んでもいい、というのではなかつたが、死ぬかもしれない、と言うのでもなかつた。死にたい、というのではもちろんなかつた。ただ、自分が社長になり、毎日の自分では納得できない仕事に忙殺され、肉体的にも精神的にも重苦しいほどの疲れの蓄積を感じる時、五十三歳はなるほどと思える年齢なのだった。

いや、そう思う根底には、社長にならなかつたとしても、自分はエネルギーをそのように使って生きている人間で、五十三歳になれば、自分の内部でエネルギーが枯渇しまうのだ、と言い続ける意識が存在しているのだった。そして、そのエネルギーが疲労の蓄積に変わっていく様を、自分は黙って見守っている。焦りも恐れもしない。どんな対策も立てず、じつと見つめているのだった。

ところが、去年の今頃だったと思う。ふと、その十数年前の同人誌を手にして読んでみると、そこには、いかなる死と言う言葉もないのだった。なんだ、思い込みか、でも、自分の中で進行している理論は変わっているわけではないな、と思っていた。

お盆過ぎだった。同人の大林から電話があつて、県の協会誌に五十枚ほどのを乗せてくれないか、ということだった。税金で出ている、出筆料がいらぬから嬉しい話だったが、五十枚はどうもここ数年とても書きにくくなつていて、電話を受けた時既に、机の曳き出しに眠っているのを引つ張り出して、それを送ろうと考えていたのだった。いくつか長さの上で見合ったものが出てきた。十年以上も前の『最後の狂気』とい

うのを手にした時は、ああ、こんなのも書いていたのだな、という思いがやってきた。私は夢を見ていた、ではじまる文章で、その次に、私は今まで狂気を生きてきたが、今三十七歳で、私はあと十五年で死ぬことを知っている。それは私が平常冷めている時に、自分の中に持ち続けている生命感覚で、ときたのだった。

……発見したことに、特別意味はなかつた。どこかに書いているだろうとは思っていたし、自分が抱いて生きてきたものが、どこに書いてあつても、例え書いてなくても、変わることはないことだつたように思えたからだ。しかし、『最後の狂気』として書かれていることは面白かつた。狂気とは、私が述べているとおり、生きていることの意味を、つまり死や無よりも、価値のあるものとして見つめ続けるように生きることであつた。そのように生きてきて、私は五十二歳の時で生命力を失つてしまふのだった。

「酔つた？」

少しよろけていた。浜辺や、店の中が暗くなつた気が一瞬した。

「いや、大丈夫。だつて酔つてないよ。ぜんぜん飲んでないもの」

「ならいいけど。疲れてるよ、そちら」

「ああ」

でも、実際、よろけた後、海も空も暗くなつたに違  
いなかつた。太陽が黒い大きな雲とか、山のむこうに  
入り込んだのだ。

レジには白い服を着た細い、銀縁の尖つた眼鏡をか  
けている女の子が立つた。七千少しだった。

「あ、金がない」

財布の中には三千円と硬貨しかなかつた。

「あ、かな持つてるよ。出すよ」

早い激しい反応だった。前々回、店へ行った時、時  
間が来て、延長してくれと頼んだ時、もう金がないか  
ら、と言うとチップにもらつた一万円を出して、これ  
でいてと言つたのがよぎつた。その時は、振り切つて  
きたが、エレベーターの中で、和実はやはり、「彼女は  
ほんまに商売上手やわ」と言った。

「大丈夫、こちらにあるから」

社長になつてからは、バックの内ポケットに用心の十  
万円は持つて歩いてゐる。

「ごめん、こちらにあるよ」

私は内ポケットから、二つに折り曲がつて、束にな  
つてゐる十枚の札の中から一枚を取り出して支払つた。

「金がなくなつたら、いつでも金出すよ」

「ああ、ありがとう。ごめんな、金を持つていない社  
長で」

ドアを押しながら言った。

「お金なんか関係ないよ。少しなら、かなが持つてる  
よ」

「そうだな、かなは金持ちだな」

「違う、そうじゃないよ」

「ああ、ごめん、ごめん」

遮るように言つて外へ出た。その瞬間、もう一度、  
空が暗くなつた気がした。

ハンドルを握つて、車を動かし出した時、叔父の死  
に顔が浮かんできた。彼は二年半前、父の一周忌の一  
週間後に死んだ。前の晩まで元気で、次の朝死んでい  
た。いとこの夫と私とで、彼の死骸と彼が書斎兼寢室  
にしていた前二階の四畳半から、狭い階段を引きずる  
ようにして下ろした。多くの死体がそうなるのだろう

が、口が開き、舌の根元の方が太く息を塞ぐように見えていた。そのせいで、私は自分が息を詰まらせて死んだ時も、こんなのだろうかと思ってしまった。

叔父の死に顔の像の下の方から、自分が確かに狂気を生きてきたな、という思いがやってきた。生きていくことの価値、死や無以上の意味を持つように生きることに、それは確かに苦おしいことに違いなかった。今、今日、自分にはそうでない生き方が目の前に現れてきそうな気になっている。自分の幼なかつた時、高校時代に、生の意味を生きようと決心する前の、あの一回一回のなんでもない生き方が見えてきているに違いなかった。その原因がそうであるかのように、あの中学生の白い顔が浮かんできた。

「ね」

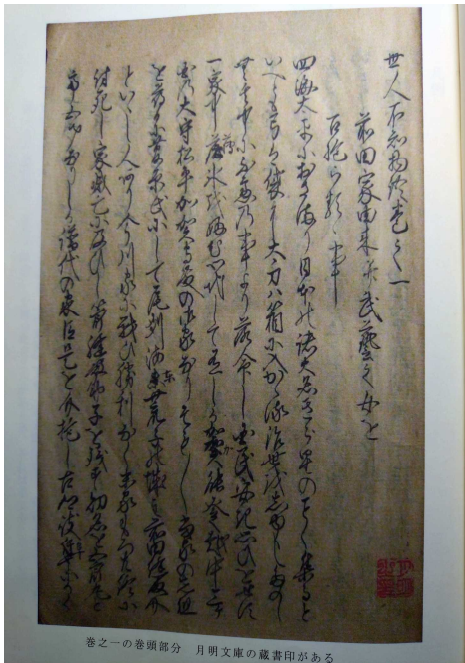
「ん？」

かなが私のチェンジレバーの上に手を置いてきた。もう一度、世界が暗くなった気がした。

# 加賀金城魔界伝説 (資料編)

## 加賀騒動記 世人不知物語 口語訳

池田 良治



はじめに

加賀騒動の実録体小説の最初期のものに『見語大鵬撰』、『野狐物語』、『越路加賀美』がある。そのなかでも『見語大鵬撰』は江戸時代の実録体小説隆盛期を通してみても、もっとも優れた作品であるといえよう。

鳶魚はその著『加賀騒動』で『見語大鵬撰』を指して、「金沢に天下の実録体小説に一進境を与えるほどの手筆のあったことは驚くべきで、明治以来、加州から小説文豪の続出するのも下地のあることと存じます」と感嘆して語っている。

『見語大鵬撰』の小説の結構の巧みさ、筋の自然でかつドラマ性のある運び、まさに大衆娯楽小説の始祖であるといつていいだろう。しかもこの時代に深く人間の悪に迫る作品となっている。『禁書目録』に記載され梓に上すことができなかった時代に、貸本屋でひそかに写され読み継がれてきた。江戸時代の隠れたベストセラール小説である。

この『見語大鵬撰』を粉本にしてたくさんの歌舞伎、浄瑠璃、講談の台本が書かれ、下つては時代小説家たちが史実を調べ上げて、伝蔵善玉説で多くの小説を書いた。しかし、いまだにこの『見語大鵬撰』を凌ぐ加

賀騷動に関する文芸作品は書かれていないのではないだろうか。それほどにこの作品の質は高い。

いままた、ここに『見語大鵬撰』の異本として『世人不知物語』を紹介できることは歎びである。鳶魚のいう加州の文豪の輩出する所以であるとされた『見語大鵬撰』の世界が、さらに豊富になるからである。巻末に『見語大鵬撰』と『世人不知物語』の違いについて若干触れた。『世人不知物語』は文芸的にも『見語大鵬撰』同様素晴らしい作品である。

『源氏物語』は時代を代表する作家たちによってそれぞれに個性的な口語訳が試みられ、それぞれにたくさん読者がいるように、『見語大鵬撰』もすでに青山克彌先生によって（『加賀騷動』教育社新書一九八一年）の口語訳があるが、また少し違った本文での口語訳もあっていいとかんがえる。なんといつてもこの『見語大鵬撰』は郷土の誇るべき文芸作品であるし、また作者は加賀藩の下級武士ではないかという説が有力で、作者もまた郷土の出身である可能性が高いからである。本稿はできるだけ原文の雰囲気を残しつつ、一般読者に読みやすいように工夫した。くわしい語句の注釈は割愛したが、まずご一読され内容の面白さを堪能していただければ幸いである。

## 世人不知物語

作者不詳

海内かいだいはしづかに治まり日本では諸大名が闇夜の綺羅星きらように犇ひしめきあっているが、弓は弓袋に刀は箱に収まっている。この太平の世を言祝ことほいでいるなかに、藩主が命を落とし不安になり、ご一家中が薄氷を踏むお気持ちになったのは、加賀、能登、越中三カ国を領する松平加賀守殿のお家であった。

さて加賀殿の御先祖を尋ねるに、もとは藤原氏の出自であって、尾州海東郡の城主前田縫之介から始まる。彼は今川家との戦いに敗れ一族が滅亡した。縫之介の子が一人残った。幼名を五郎丸といつて当歳五才であった。年来の家来がお世話役となり、家来の故郷の岐阜に隠れ、土民と一緒に成長した。青年になると名を又左衛門と改めた。紙屑かみくず買かいをして口を糊のりしていたが、さすがは城主の血筋生まれついて武芸を好み、武士として身を立てることを心に誓ってしばしば岐阜の城下に出て世の動きを伺うかがっていた。

一方豊臣秀吉はその頃はまだ木下藤吉郎といったが、遠州横須賀の浪人松下嘉兵衛のところでは中間奉公をしてきたが、この頃そこをよして岐阜へ出た。そして岐

臯城主織田信長公のお側にお仕えした。信長公の馬の口取りの中間奉公をしていたのである。藤吉郎は又左衛門の紙屑屋へ度々買物に來た。そんなことから二人はだんだんと仲良くなつていった。後にはどんな用事でも氣安く頼む間柄となつた。又左衛門は藤吉郎のことを心の底から、(只ものじゃない。きつと偉くなる人物に違ひない)と思つた。

親友の藤吉郎がいまだに妻もなくぶらぶらしていたので、又左衛門は嫁の世話をすることにした。又左衛門の親戚におみなどという天性美しく、氣立てのよい娘があつた。又左衛門が媒酌となり、又左衛門の家で藤吉郎とおみなの祝言の宴を催した。又左衛門は貧乏所帯で、銚子、盃などはもとよりのない。でも婚禮のまねごとというばかりに、焼き鮎の肴、信樂の茶碗、徳利を出した。藤吉郎はこれらを見て手を叩いて笑つた。又左衛門は馬鹿にされたと思ひ、不機嫌になつた。「さては藤吉郎、貴様、茶碗徳利の欠けているのを笑いなさるか。実はな、この徳利はな、先日京の清水でもとめた由緒ある代物だ。じゃがな、わしが粗略に扱つたゆえにこのように割れたのじゃ」

これを聞いた藤吉郎は、「いやいやいや、まったくお道具をけなして笑つたの

ではない。実はこの焼き物、わしが流浪している時、しばらく江州信樂の瀬戸師のところに行ったことがあつた。その時見よう見まねで焼き物を作つた。わしがこしらえた焼き物はみな清水の茶碗屋へ売つてしまつたが、それ、そのうちのひとつが回り巡つて貴殿の手に入つたはまことに不思議じゃ。まさしくわしが作つた物じゃ。そなたとの縁が深ければこのような不思議にも出会うと思ひ、可笑しくなつたのじゃ」

と話したので、又左衛門もともに手を叩いて笑い、この欠けた茶碗徳利でめでたく婚禮の宴を催した。

さて藤吉郎はほどなく羽柴筑前守となり、織田信長公が亡くなつた後の天下を治め、関白、後には太閤秀吉となつた。妻のおみも大政所となつて京都に住んだ。本當に昔も今も珍しいほどの出世である。

紙屑屋又左衛門は前田又左衛門利家と名乗り、織田家の老臣柴田勝家の推挽で、信長公に仕えることになつたが、明智光秀の叛乱によつて信長公が死去なさつた後は、柴田勝家の配下となつた。そして北国で勝家とともに秀吉と戦つた。この戦いで柴田勝家は滅び、又左衛門は加州金沢城に逃げ籠もることとなつた。

秀吉の軍勢はすぐさま加賀金沢城に押し寄せた。前田利家を滅ぼすことは容易いけれど、昔の誼みを思い

出しなさって軍兵を留め置いて、秀吉一人城の前に来た。秀吉は大声を上げて、

「又左又左、藤吉郎一人で参ったぞ。早く出てきて対面あれ」

と叫びなさったので、城門の番人はこれを聞き、利家に伝えた。

すぐさま又左衛門は藤吉郎と対面した。

(さては昔の誼みを思い、わたくしに会いに来たものじやろう)

利家ははじめ藤吉郎に恥辱を与えようと思った。だが顔を見合させたとき、秀吉の威容に打たれた。思わず二間ばかり飛び退り土に両手を突いた。「はっ」と蹲る。

利家は秀吉の天性備わる威勢に気押されて、なかなか頭を上げられない。ようやくのことで頭を上げると、「これは珍しきご来訪、ご健勝のご様子、大慶に存じます」

とやつとこれだけのことを言うことができた。秀吉は豪快に笑う。

「本当にわしと貴殿とは中間と商人の頃から昵懇であったな。この度は貴殿は柴田勝家に組みなされ今はわしの敵であるけれど、昔からの誼みが忘れられない。」

今日そちと会うためにこうして一人でやつて参った。しかしわしに敵対する心底なら立ち上がって、ほれ、わしの首を打ちなされい」

と恐れる気色もなく言い放つ。利家は蹲踞平伏した。心中思うには、

(秀吉は賤しい身分のときからただ者でないと思つていが、わしが彼の威光に懼れて自然と頭が下がるのは、これはつまり秀吉に備わつた武將の器量というものか。あの剛勇で知られた柴田勝家も秀吉の戦に負けてしまった今となつては、わしはもう敵対できるはずがない。それにしても敵の籠もる城門へたつたひとりであるとはあつばれな勇氣じゃ。恐るべき男じゃ)

と降参して配下となつた。利家と秀吉はこの成り行きをともに悦んだ。

利家はその後加賀、能登、越中の三ヶ国、百十九万二千石を賜つて、位は従二位大納言まで昇進して大老職となつた。徳川家康公と肩を並べる出世は、ひとえに秀吉公の力によるものである。

さて、それから年月が遙かに過ぎた慶長三年八月、秀吉が病となつた。いまだ嫡子の秀頼公は幼く、天下のまつりごととは家康公と利家公に託された。その利家公も病に伏し、もはや余命幾ばくもないという時、利

家公は総領の利長、次男の利常兄弟を枕元へ招いた。

「わしはつくづくかんがえてみた。秀吉公亡き後の世の成り行きをかんがえてみるに、後継者の秀頼公はあまりに幼い。よって天下の政道は関東の家康とわたしに預けられることになるだろう。国々の諸大名はみな関東の威勢に恐れて風に靡く草木のようだ。わし亡き後はそちたちはこれに抗しようもあるまい。お前たちも関東に与し、すみやかに三方国を差し出し、家康に無二の忠誠を尽くせ」

息子たちはこの言いつけを守った。おかげで子孫は繁盛して今に至り、百二十万石が何事もなく無事で、諸大名の上座として君臨できた。

さて前田又左衛門より六代目、前田若狭守二位宰相吉徳はご幼少から武芸を好み、とりわけ馬術に熱心であった。お子達には男子五人ご息女五人があつたが、みな武芸を好みなされた。姫君様方もまるで男のように武芸の稽古をした。姫様方へも殿様から「馬術を習へ」といふご命令があり、殿はお城の奥庭に乗馬場を拵えさせた。また姫様方のために馬術指導のできる女がもとめられた。江戸湯島天神の門前の笠原武左衛門という卜伝流の劍術指南の浪人の娘が馬術の達人と聞きすぐに召し抱え、ご息女方の馬術指南役となつたの

である。この関係から武左衛門には加賀藩より五人扶持が下され、お出入りの身分となつた。

吉徳公の第一の姫君は梅の方といつて芸州広島城主松平安芸守の御嫡子伊予守殿へご婚礼があつた。桜田に火があつてそこら中が騒動になつた時、この梅の方は馬に乗つて華やかな火事場装束でお現れになつた。馬上一散に加賀上屋敷へ向かう姿は勇ましく、道中諸人はこの姿を見て、

「あつばれ、馬術の名人だわい」

と感じあつたことである。このことでわかるように、いずれの姫様方も馬に上手にお乗りなつたことは、世間の人がよく知つていることである。

小笠原武左衛門の娘は、女の身にも関わらず馬術に達していたので召し抱えられた。熱心に勤め次第に出世して、今は中老までになつた。前田家の御一門、親戚筋にもお出入りを許された。女の身では誠に珍しいばかりの立身であつた。

加賀石川郡久安村といふところに、百姓長兵衛といふものがあつた。若い頃から鉄砲が好きで、野を駆け回り鹿や狼を撃つ腕前は本職の獵師も及ばなかつた。吉徳公の足軽頭の中山治平太といふ者が、長兵衛の鉄砲の名人であることを聞きつけて物頭に知らせた。さ

つそく足輕に召し抱えられた。

あるとき吉徳公の鹿狩りの時、長兵衛は拝謁を許され殿の面前で見事大鹿を撃ち取った。そのとき子鹿が二匹飛んで出た。お側の人々が、

「それそれ、子鹿も撃ち取れ」

と声をかけ命令したが、長兵衛が言うには、

「それについてはお許しください」

と辞退した。そのうち子鹿はどこかへ逃げてしまつて、行方がわからなくなつた。吉徳公はたいそう不審にお思いになり、近習寺尾甚右衛門に、

「そのわけを尋ねてみよ」

と仰せつけられたので、寺尾甚右衛門は長兵衛に向かつて、

「その方、どうして子鹿を撃たなかつたのか」

と尋ねた。長兵衛が答えるには、

「ご不審のことはごもつとも存じますが、いったい鳥類、畜類は親を殺す時は子の命を助け、子を殺す時は親の命を助けるものと、親などからいつも言い聞かせられたものです。いかにも子親ともに殺すのは、木でたとえますと根を断ち、葉を枯らすに等しい所行です。わたくしは若い時より特に殺生を好みまずすけれども、これまでこのように心掛けてきました。みな先祖

代々の教えでござります」

吉徳公はこれを篤とお聞きなさつて、

「賤しい身分に似合わぬ心底である。畜生に親子の恩愛を思うとは殊勝である。褒美を取らせよ」

と白銀をくださった。なおも御感の余り、

「あの者に子はなきか」

とお尋ねになつた。

「当年十三になります息子がひとりおります」

と申し上げると、吉徳公はそれからすぐにご帰城になつて、長兵衛の倅を召し出され、大槻長玄と名乗らせ、お茶坊主として勤めさせた。

その明くる年の秋、長兵衛は病死したので、長玄は孤児となつた。そのため吉徳公は長玄をいつそう不憫にお思いになり、昼夜お側にて召し使われたところとだ。ところでこの大槻長玄は生まれつき機知に富み、頭の回転が速く、吉徳公の御心に叶つた。また奉公のひまひまに習字、学問、武芸にまで精を出し勉めた。まったく一心になつて励むので、学んだところは人に勝れていた。吉徳公をはじめ諸役人もかれの才能あることを感心した。長玄は十七歳になつた。長玄は来し方行く末をつらつら考える。

（俺の主君加賀守殿もその先祖を遡れば賤しい身分で

ある。それが運に恵まれて今や百万石余りの大名となつている。だいたい国々諸国の大名の中でも、西に島津、東に伊達、北に前田と天下と呼ばれているが、うらやましいかぎりだ。本当に男として生まれて、立身出世を望まないものがあるか。だけれども今の吉徳公の安定した世となつてみれば、ご一家中の家の格式が鞏固きようことなつていて、人に勝れた出世というものは難しい。まして俺は賤しい百姓の小倅こせがれであつて、たとえどのように出世するといつてもたかだか百石か二百石。限度の知れた立身だ。だけれども心に思い詰めて願えばどのような大望も成就しないということはない。俺も人が驚く出世がしてみたい)

と深く思い詰めた。これが長玄の悪心の発端であつた。誠に恐ろしいのは人の心である。

そういうわけで長玄は益々奉公大切に勤め、表向きは忠臣と見せかけ、内心は我が身の出世だけを願ひ、吉徳公をはじめ周りの人々にも迎合げいごうするようにしたので、太守はもちろん諸役人も年に似合わずよく気のつく長玄を重宝した。

その年も六月になつた。毎年の土用干しといつて、蔵の中の御宝物、召領具足を入れる箱、書物、道具類等さまざまの品をお側の人々やその役の人々が毎日順

番に出して虫干しする。薬草類を干した後には毒薬の類を一通り干すことになつていた。この毒薬は大名家では野心を差し挟むものがあるかも知れず、政道を邪魔立てするものを除くために必要なもの。この毒薬を扱うには真鍮しんちゆうの箸、または鉄てつがねにて打ち返し打ち返し陽にあて風を入れる。

この日長玄は当番で御次の間に控えていた。今日の虫干しが毒薬と聞き、長玄はぜひ一見致したいと御手医者いしやくの横井玄春に頼みこんだ。玄春も退屈だったので長玄が来たのを幸い、  
「ちよつとここに居てくれ」

と長玄を置いて、自分は次の間へ一服しに出て行つた。

長玄はその隙に毒薬のうち斑猫はんみょうを少し盗み取つた。誰も知るものはなかった。毒薬の毒に当たらぬようにするには海獣うにかおるの一角の骨でなければ防ぐことができない。長玄は親の長兵衛が拝領した一角の香箱を懐に用意していた。そのため毒薬に当たることがなかった。長玄はこの毒薬を使って立身の手がかりにしようと思ひ、日夜さまざまに工夫していたが、とくに思いつかず時節を伺うかがつていた。

ある時長玄は新しき椀で食事した時に、滾たぎつた汁が

漆に滲み込み、ちんちんと鳴り泡立つのをじっと見ていた。

(本当に毒薬を椀に入れる時は、このように泡立つものと聞き及んでいる。新しき椀ならば熱い汁が椀に滲み込み泡立つ。きっと毒薬を入れたように見えるに違いない)

と、しばらく睨んで、

(よし、ひとつ思いついた)

となにやらニンマリして、例の毒薬を懐中にして御殿へ出仕した。どのような悪事をしようというのだろうか、恐ろしいことである。

時に元文二年十二月二十五日、前田若狭守吉徳は、歳暮の御祝儀として御殿で酒宴を催した。譜代の老臣西尾隼人、前田圖書、要人半田主膳、千福久太夫、品川主殿、菊池十六郎、前田将監、青木新兵衛をはじめとして、いずれも歴々の諸氏が吉徳公の御前へ詰め、それぞれが御祝儀を申しあげた。吉徳公は御機嫌良く座は和やかであった。

その日は麦の御膳を召し上げる予定だったので、お台所ではその用意をしていた。お料理人、御膳番は料理の品々の吟味をし、御膳はすぐ出せるようにできあがっていた。伺いの上小姓間宮藤十郎が配膳役で、御

次の間ではお側坊主の大槻長玄がご給仕役として控えていた。

いつものように御膳を<sup>あらた</sup>検め差し出す。見ると今日の御祝儀の椀類はすべて新しい。麦飯とすまし汁である。汁は滾<sup>たぎ</sup>ったのを入れたので椀はちんちんと鳴って、たいそう泡立っている。長玄はお椀の蓋<sup>ふた</sup>を<sup>あらた</sup>検めるふりをして、こっそり手に持った毒薬をお汁の中に入れた。そしてたいそう驚いた顔色で、配膳役間宮藤十郎に向かって、

「どうしたことか、藤十郎殿、この御膳はなんとも奇妙でございます。むやみに殿様に差し上げるわけには参りませぬぞ。これはお汁の中に毒が入っているのを見えます。総じて食物に毒が入っているものはその色が変わり、泡立つものとかねがね聞き及んでおります。お検めの上、殿に差し上げてください。いや、これは一大事でございます」

と大声で申しあげるので藤十郎が驚いて、「なっ、なにを言う。この御膳部は御膳番、毒味役の者どもが検めた上でお出ししたものです。御膳に毒など入っている筈もない」

と言って、すぐに御膳番、お台所役人を呼び出したが、その時御前に詰めていた青木新兵衛が聞きつけ、

「長玄の大声、何事」

と御次の間に出てきて、事情を聞いた。

「それは誠に一大事。早々に厳しく詮議を致さなければなるまい」

「そうこうしているうちに吉徳公のお耳に届く。諸役人が御次の間へ来て、次々に様子を聞いていく。その誰もがたいそう驚く。すぐに大評議が始まったのはまことに無理からぬことであつた。

その日の御膳番は依田清右衛門、毒味役原田次郎兵衛、料理人江島甚太夫、御配膳部間宮藤十郎であつた。かれら全員が言葉揃えて、

「今日の御膳はわれわれ当番で、吟味に吟味したうえりもありません。まったくもって少しの怪しいところもありません。にも関わらずこの茶坊主の長玄めが粗忽なることを言い出し、われらがあらぬ疑いを受け、なんとも慮外千万に思っております」

と申し上げると、長玄が進み出て、

「いかにも各々方がお検めのうえ、差し出された御膳であつてみれば、粗忽なることはあるまいと思われますけれども、お汁がもつてのほかに泡立ちますゆえ、万一のこともあつてはならぬと存じまして申しあげた次第でございます」

と言うと、藤十郎は長玄をはつたと睨めつけ、

「熱いものが泡立つのは総じて器物が新しいからで、いつでも新しいものは泡立つもの。それをどうして怪しむか。今日の御膳はわたくし吟味に吟味を致して殿に差し上げた御膳です。察することさらわれらの手落ちを指弾しようとする企み、そうでなければ若年のその方が身として要らざる差し出口、われわれにとつて容易ならぬこと、このまま等閑にはできません」と言う。

毒味役の原田次郎兵衛が言うには、

「拙者御膳の調味を致しましたが、少しもいつもと変わったところはありませぬ。そうであるのに長玄に一大事と疑いをかけられた上はいずれにしてもこの御膳、殿に差し上げるわけには参りませぬ。よつてここにてわれわれがお料理を食べて御覧に入れます。ついでには御膳に毒がなかつたあかつきには、長玄の言い分によつてわれわれの一命に関わることですので、彼をわれわれに下し置かれますようお願いあげます」

と一同に申しあげる。

役人共もこれを聞き、願いの筋はもつともである。まさしく長玄が粗忽と見える。気の毒ながらこの通り御前へ言上に及んだところ、吉徳がお聞きになって、

「いちがいに役人共の落ち度とも、また長玄があやまちとも決しがたい。しかしながら役人共の願いの筋もつとものである。こうなった以上望み通りに御膳を食べさせ、その後どのようにでも致したが好かるう」

とおっしゃるので、四人の者共は畏まった。

役人の立ち会いの下、お茶の間に四人は召し集められ、御膳が下された。

四人はみな悦び、殿の御前の汁を少しずつ分けてほかの汁に混ぜ、それぞれの麦飯に打ちかけ、坪に入った煮物、皿に盛った料理、焼き物、向付けの膾なまずき、香のものに至るまでことごとく食べた。

「身に余る有り難き仕合わせ、これというのも長玄殿の差し出口のお陰じゃ。近頃かたじけ忝かたじけい。この次は長玄殿へわれわれがお料理を一品ずつ作ろうぞ」

と四人は嘲笑あざわらって残らず食べてしまった。

しばらく経つとあら不思議や。四人の者共の顔色俄にわかに変じて、五体を震わし苦しみ乱れて、悶もだえ廻まわる。

「ああ、苦し」

と見ているうちに血を吐き、みな狂い死ぬような格好で死んでしまった。四人の有様を見る者はみな身の毛がよだつ思いがした。立ち会いの諸役人ももつての

ほかのことと驚き、

「ああ、これは一大事だ」

とすぐにこの有様を殿様に言上した。吉徳公はお驚きになり、急いで吟味を申しつけなされた。諸役人はお台所を出て、御膳係の役人六人を高たか手て小こ手に縛り上げ尋問に及んだ。しかしこの悪事が長玄が仕業とは誰一人知る者はなく、吉徳公を始め諸役人は、

「長玄の眼力は見事であった」

と感じ入った。

その時橋本左京は、

「御前にも先ほどの騒動に紛れて、お食事を召し上がっておられぬ。きつと空腹でおありだろう。早々に御膳を仕立てて差し上げよ」

と急いで非番の御膳番を呼び出そうとすると、長玄が申し上げるには、

「このような一大事の折でございます。各々方もお気づきになられぬか。お台所の湯釜にもきつと毒気があるに違いない」

と言ったので、皆々納得して、

「もつともなことだ」

と同意した。

「まことにこのような折のことであるから、そのよう

なこともあるやもしれぬ。お台所では料理は作らないでおこう。お茶の間にて作ることにしよう」

と右の趣おもむきでお伺いを立てると、吉徳公がおっしゃるには、

「不愉快な折であるから正式な料理を申しつけるに及ばない。近習の者共自身に拵しらえさせ、粥でも苦しゅうない」

と仰せになる。

その時長玄が進み出て、

「このような時はどんな器にも毒気があるやもしれません。御次の間の鐘子かねすにお湯が滾たぎつておりますので、これにてお粥を炊いて差し上げましょう」

と申し上げると、吉徳公はこのほかご機嫌も直り、  
「その方よく気がついた。そのとおりに致せ」  
とおっしゃる。

長玄をはじめ近習の人々は、白米を取り寄せ、お庭の井戸の水で清め、鐘子にて白粥を炊き茶の湯のお茶碗に粥を盛って差し上げた。

その後役人を召し寄せて、吉徳公が仰せになることには、

「今日のことは、長玄が気がつかなかつたら、予の命はなかつた。これはなまなか下役人の仕業ではあるま

い。きつと張本人というものがいるに違いない。きつと吟味致せ」

即刻お国元へ馬を走らせ、急を知らせた。

さて長玄については希代なる働き、主君の命を助け申し上げたため、褒美として新たに知行地五百石を下され、元服させ近習格になされ、名を改めて大槻伝藏とした。伝藏は宿願が少し成就したと内心悦び、ますます悪巧みをめぐらした。そうしているうちに江戸表の事件が早馬で国元へ知らされた。金沢のお城では前田土佐守、横山大和守、本多安芸守、前田対馬守、長九郎左衛門、前田修理、奥村内記、村井主膳。玉井市正、奥村小源太、本多頼母、前田大学をはじめとして、年寄、番頭そのほか譜代の諸士われもわれもと登城して評議があつた。

「世間ではこのような類の事件は、国家転覆を企てようとする曲者の仕業である。まさにお家の大事はここにあるといつてもよい」

と言つて、いずれの方も頭を傾け思案するが、意見はばらばらでまとまらない。横山大和守が進み出て、「ご書面の趣をかんがえてみるに、殿を毒殺しようと企んだ者はなかなかもつてひととおりの者ではない。きつと国を掠かすめ取るうとするものであろう。察するに

張本人は江戸表に在るに決まつておる。もつともこのような悪事を計画する曲者であつてみればそう簡単に馬脚を顕すことはないだろう。だからといつてこの一大事に当たつて荏苒と国元に在るのでは心許ない。一刻も早く江戸表へ参上して吟味致そうではないか」と申し上げる。

一同もつとも同意し、

「早々に出府しよう」

と申し上げた。

前田土佐守が、

「各々方のご評定はもつともだけれども、このような折は国元がとりわけ大切である。ことに曲者は必ずしも江戸表にばかりいるとも決められない。してみればわれわれがお城をあけて江戸表へ出れば、国元の手薄となつたところの隙をつかれ、いかなる謀略もあるかわからない。二つ目には各々方もご存知の通り、主君の代替わりかまたは大礼の時といえども、われわれのうち三四人のほかは出府しない。そうであるのに今大勢で江戸表に出れば、何事があつたかと世間の注目を惹きかえつてよろしくない。今回は事件を穩便にすませ、国元の用心を専らとし江戸表へは二人がいき悪党を押しつぶし、国元の安全をかんがえるのが上策とい

うものじや」

と理非明白に申し上げるので、いずれも土佐守の意見に賛成した。

では誰が江戸に下ろうかということの評定になった。「加賀藩の七手組の大將のうちから一人、年寄の中から一人、くじで決めたらどうだろう」

これに定まつて、各々方がくじを引いた。七手組のうちから玉井市正、年寄は奥村内記がくじに負けた。兩人は密かに仕度して急ぎ江戸表へ下つた。

さて江戸屋敷では御膳係の者共をさまざまな拷問にかけ厳しく詮議していた。しかし大槻伝蔵の仕業であるから、御膳係をいくら拷問してももとより彼らが知っていることではないから取り調べは進まない。しかしこの者以外に取り調べの手掛かりというものが無い。だからひたすら、

「こいつらが下手人なのだろう」

と日々に責め立てたので、精も根も尽きて三人は牢死した。また残りの三人も半死半生のところへ、国元からまた玉井、奥村が下つてきた。まず兩人は吉徳公のご無事を賀し申し上げ、それから江戸家老そのほかと会合して評定に及んだ。手掛かりを尋ねても、少しもこれだという証拠も出てこないで、いずれにして

もお台所の詮議をするほかない。だからまた三人の者が引き出され、厳しく拷問された。もともと下地から疲れ果てていたからとうとう死んでしまった。それでいよいよ手掛かりがなくなり諸役人のやる事がなくなり、ただご一家中お互い疑りあっていた。特に若殿佐渡守は親子といっても吉徳公の後継者ゆえ、人々の疑いを恐れなされたということだ。

また吉徳公もこの毒殺未遂事件以降しきりに人をお疑いなさって、

(譜代の家来といつてもかえって大禄のものは油断がない。出自は賤しいといつても忠誠の者がよい)

とお思いになる。

程なくその年も明けて正月十一日の御具足開きの御祝儀の日となった。この日は公儀より諸大名に至るまで諸士、役人の役替の初めであるから、吉徳公はその前夜玉井市正を御所へお呼び寄せになつてご相談になる。

「旧冬歳暮の祝儀の酒盛の折、たくさんの家来がわが前に伺候していたが誰一人膳部を檢める者なく、われはすんでのところで毒入りの膳部を食べるところであった。その折忠臣伝蔵の誠が天に通じ、曲者の悪事を見出しわれの危うきを救うたことは、ひとえに先祖中

納言殿の御時に木村源五兵衛という者が乱心して、中納言殿の御枕元にある鑓を突き申したところを、品川主殿の先祖の茂左衛門が寝ずの番にて詰めていたのがすぐに馳せ来て源五兵衛を組みとめ、中納言のお命を助け申し上げた。茂左衛門はこの大功により年寄役となされ、五千石を下された。さてこの度の伝蔵の働きはおさおさ茂左衛門に劣らない。よつて旧冬新地五百石与えたが、また明日の祝儀に千石の加増を申しつけ、側用人に取り立てようと思うが、どうか」

その時市正も伝蔵の働き、平日の勤め方も申し分ない由を聞いていたので、「その儀でしたら、思召次第に遊ばされたらよろしいでしょう」とご承引申し上げた。これよつて翌日具足開きの祝儀の席上で、大槻伝蔵は御前へ召し出され千石のご加増の上、お側用人を仰せつけられた。百姓出身の大槻伝蔵が都合千五百石の高禄の人となつたのであるから、加賀藩士たちはみな仰天した。

かくして大槻伝蔵は幼年のときより立身を心がけ、うわべはご奉公に励み、内心には悪巧みを廻らして毒薬を盗み取り密かに御膳に入れ、さも自分が見つけたようにした。四人の御膳係の役人等は毒が入っているとは夢にも知らず、あのような悲惨な最期を遂げたの

であった。伝蔵が悪事と知らず一応の検めもなく御膳を食べ即死した。そのほかのお台所の役人六人も厳しい拷問にあつて、ついにみんな責め殺されてしまった。まったく取り調べの手掛かりというものがなくなつた。伝蔵の謀略であるとは少しも疑う者がない。それで思ひのままに出世して側用人にまでなりあがつた。もう呆れて言う言葉もみつからない。

ある時吉徳公が伝蔵に向かつておつしやるには、「その方が見出した毒薬の張本人はいまだわからぬ。わしは日夜心が落ち着かぬ。油断なく詮議するといつても、これといつて疑わしい者もない。そなたどう思う」

とご下問があつたので、伝蔵が謹んで申し上げる。「恐れながらこの件については諸役人の吟味が行き届かなかつたと存じます。と申しますのは、当の御膳係の四人の者は、拙者に悪事を見出され、もはや逃れぬところと覚悟を決め、毒を食らい果てましたものと見えます。また残り六人の者も牢舎に入れ置き厳しい拷問にかけず、柔らかに吟味なされば、身分の軽い者共ですから、手掛かりとなる白状も出たと思われますところ、入れ替わり立ち替わり唯むやみに厳しい拷問にかけて、一人の残りもなく責め殺しましたのは今とな

つて思えばますます詮議の手掛かりを失い、全くもつて行き届かなかつたなされ方でございました。また我が家は諸大名に勝れた大家でありますので、ご譜代歴々方の忠勤怠りなしと申せども、誠に人の心はわからないものですから、どのような野心があるやもしれません。でも少しの心配もいりません。賤しい出自ではありませんけれど、このわたくしめがご奉公いたします。ただ何事もわたくしにお任せ下さい」

と申し上げる。吉徳公はこれをお聞きになり、「その方言うことはもつともなことである。これからは詮議もすべてお前に申しつけるから、よきにはからつてくれ」

と仰せになる。伝蔵は畏まつて、「まずはお国元より下つた玉井、奥村の兩人は大切な咎人を責め殺しましたのは第一の失敗でございますから、早々にお国元に返し籠居をお命じになり、また江戸役人も取り調べがまことに不首尾、これも閉門仰せられてはいかがでしょう。殿にはご家中の評議での意見、重要な噂などをお聞き下さい。これらはみな詮議の手掛かりです。思いも寄らぬ所から下手人がわかるでしょう」

と弁舌を駆使して讒言した。

吉徳公はますます疑心暗鬼に囚われ、伝蔵の申すことを理の当然とおかんがえになり、ひととおりのお慥かめもなく、伝蔵の言うとおりに翌日大目付をもつて、「玉井、奥村兩人がこの度の吟味の致されよう不届きである。早々に帰国して屹度籠居を申しつける」

と仰せつけられたので、兩人はたいそう恐れ畏まり、すぐごと帰国して謹んで閉じこもつた。

さて江戸の役人の品川主殿このほか年寄兩人、下役十人らは獄死した三人の取り扱いが不首尾により、厳しく閉門を仰せつけられた。まことにもつて道理の通らない世の中となり、これによって伝蔵はますます君寵を恣にし、今は上を見ぬ驚の勢いでご家中に威を振るつた。

前田若狭守吉徳公は生まれつきの性格が猛々しくいらつしやつて、殊に酒と女を恣になさつた。それに引き替えご嫡子佐渡守様は文学を好みなさつて、お姉婿の松平伊勢守（これは安芸守殿のご嫡子である）は学問に達しなさつていたのでたいそう昵懇にしていても会つていた。その安芸守殿のご家中に谷崎主殿という二千石を領して年寄役を勤めている者があつた。

彼は博覧強記にしているいろいろな方面に豊かに才能を備えていたので、若殿伊勢守の師範となり昼夜お側を離

れず道を論じ教え申し上げたので、ご家中はもちろん他家の門弟も多くあつた。

ある時、加賀守殿の若殿佐渡守がお出ましの折、伊賀守殿が主殿を召し出され、書物のお尋ねがあつてお盃を賜つた。ことのほかご懇意の思し召しであつた。佐渡守も主殿の器量をお感じになられ、もつたいないばかりのお言葉などがあつた。主殿も主君と加賀殿は親戚筋なので、身に余る光栄と思ひいろいろ大切にもてなし申し上げた。

このことが縁で主殿はたびたび加賀殿の屋敷にも出入りするようになり、終日佐渡守殿のお話相手となり、主殿は毎度いろいろな文学の話を申し上げた。

ところが吉徳公は文学に甚だ疎くていらつしやる故に、佐渡守殿が学問をお好みなさることをたいそう変わつてお思ひになつて、常々おつしやるには、「だいたい武家の大将たるものは公家と違い武道を専らとするのを第一とする。それになんぞやなま若き身で要らざる学問だ」

と仰せになつて、ご自分は弓馬にばかり関心をお寄せになつてゐる。

ちようどその頃国元から馬が二匹江戸表へ着いた。それで吉徳公は佐渡守殿をお招きになり、

「立派な馬であるな。一匹はわが乗り替え馬とするが、一匹は佐渡守へやろう」

と仰せになった。佐渡守殿はありがたく頂戴する旨を述べた後、

「しからば黒い馬を拝領致しましょう」

とすぐに庭の馬場でお乗りになった。普通の速さから、駆け足に至るまで繰り返し責め付けなされたので、さしもの荒馬も白泡を噛んで嘶いなくありさまである。

吉徳公ははなはだ機嫌よく、

「さてさて、馬術にも勝れていると見える。われも一鞭むち乗らん」

と言つて、鹿毛かげの馬の逞たくましいのにお乗りになった。その時、

「御婿伊勢守殿よりお使者として谷崎主殿参上」

と取次の侍が申し上げるので、吉徳公はお聞きになり、

「親戚よりの使者じゃ、苦しゅうない、通せ」

とおっしゃる。すぐに谷崎主殿が来た。

「手前主人伊勢守鷹狩にて得ました鴟、明日調味致します。お父子様ともにご来駕らいがくださるようにとのことでございます」

招待の使者である。

お父子ともにかたじけな忝い旨を返答あつて、その後吉徳公がおっしゃるには、

「その方は博学の聞こえ高い。佐渡守ともたびたび文学の話を致すと言うことだが、わしは若年よりはなだ無骨に生まれついて、書物などは手に触れたことがない。太平の世に生まれて戦乱を忘れないと言うがこれすなわち治国第一、よつて弓馬の道においては諸大名のなかでは恐れる人はいない」

と仰せになると、主殿は、「はっ」と平伏して、

「武門にては弓馬の道が第一です。昔から文武の二つは日月の如くとあります。若殿佐渡守様にはご学問にもお心を寄せなさつておられ、お年頃になれば誠に武を備え、文にも通じたご名将とおなりなさることは疑いありません」

と申し上げる。

吉徳公は主殿の言葉の端々はしはしが耳に障さわられ、ご不興ふきようのご様子。

「その方は学問を好み専らもつぱとしていたのであれば武芸の道は心得はなかるうが、わが馬芸一見せよ」

と縁先にお立ち出でなさつて、彼の鹿毛の馬を引き寄せ、

「どうであろう主殿、この馬はよき馬か、悪き馬か。

学者の意見を聞きたい」

とどうせ馬のことなどわからないだろうと嘲りなさる。主殿はじつくりと鹿毛の馬を見た。

「この馬は乗り手に崇る相があります。お乗りなさってはいけません。災いは近くにありません。お家の家来衆にも下し置かれますのもよろしくありません。大変な災難に遭うでしょう。早々にお国元に返し山野に放ち、お捨て下さい」

と申し上げるので、吉徳公はどのみち主殿の言うことはあてにならないとお思ひになるけれども、不穩なことが起こったばかりなので気にかかった。

「われも幼少より馬を愛していろいろの悪馬の類も数多く見知っている。しかしこの馬に限ってどこにも文句のつけようがない。乗り手に崇るとは何を理由に申すのだ。一々子細を聞きたい」

とおっしゃる。主殿が申し上げるには、

「この馬は悪身鹿毛です。額に少し白い点があります。特に眼中に変気が現れており、少しのことに驚きます。わたしの言葉をご採用になり早々にお国元へやっってください。拙者のためにも主人筋のご一家にどうして間違ったことを申し上げましょうぞ」

と言って、主殿は帰った。

佐渡守殿には主殿の言葉をお聞き捨てにはなりがたく、吉徳公に向かいなさって、

「この馬早々に国元へお返しください」

と仰せになる。吉徳公も「もつとも」とお思ひになつたが、余りに惜しい馬であるから、近習の馬役蟹江宗左衛門にお預けになつた。宗左衛門は馬術の達人である上に、この馬を預かり手ずから湯洗ひし色々世話をしたので類いまれな名馬となつた。吉徳公は御覽になつて、

「どうしてこの馬が人を崇ろうぞ。われが乗り替えにしよう」

とおっしゃるのを、佐渡守殿が強く反対したので、吉徳公も不承不承この馬を宗左衛門へ下し置かれた。

宗左衛門はたいそう悦んで家来の口取りの手もかけず、自ら撫でさすり愛した。

ある時本郷の屋敷よりみなで品川辺まで遠乗りをした。帰ってきて見ると、この馬は少しも疲れた様子がない。宗左衛門はいつもの通り盥に湯をもつてこさせて馬すそをして、雑巾にて馬の全身を拭きながら、

「さてさて名馬かな。今日数多の遠乗りの中にもこの馬に続く馬はなかつた。天晴れな逸物だわい」

と言って、手の平で馬の尻を叩いた。これまでかっ

て驚きもしなかつた馬だのに、どのようなことだろうか。尻を叩いた瞬間、驚いてひどく跳ね上がって、宗左衛門の胸板を蹴破けやぶつた。どうして支えがあるうか、「うん」とばかりに反り返って、そのまま息が絶えてしまった。

宗左衛門の家来どもがこれを見て狼狽うろたえ騒いだ。一家一門を呼び集め、さまざまに治療したけれども、甲斐なく死んでしまった。

さて谷崎主殿の言葉の通り、馬が乗り手に祟たたつたことは不思議であるとなんて思い当たつた。

このようにして蟹江宗左衛門は馬のために死んだ。跡継ぎの子もなかつたので、家は断絶した。この悪馬は一門が集まり、ずたずたに斬り殺し宗左衛門に手向けられた。

さて、佐渡守は、「主殿のこのたびの明言は昔の長治公にも勝っている」とたいそう信仰なさつて、いよいよ親しみなさつた。

吉徳公もはじめは主殿が言葉あざわらを嘲笑つたが、今は思い当たりなさり、

「誠に乗り手に祟たたつたとは我も危ないところだった。これというの前々からわが国を盗み取ろうとしている曲者が、このような悪馬を送つたものかもしれな

い」

とかんがえ、お国元の馬役人に閉門を仰せつけなされた。「いかにも主殿は格別の学者である。わが家来の中にも数多の学者がいるが、なかなかこれほどのことを言い当てるものはいない」

とご感心なさつているところに、佐渡守殿から安芸守殿に談判して、主殿をもらい受け我が家来にした旨相談があつた。吉徳公ももつともなこととお思ひになつた。

「いかにもその方が望みならば、婿伊勢守方へいってやつて主殿を召し抱えることにしよう。当時主殿は二千石と聞いている。こちらへ来たら五千石与えよう」

というお父子の物語を伝蔵が御次の間で聞いた。伝蔵が思うには、

（今加賀藩のご一家中の面々、忠臣、義臣が多くいるといつても、俺が一時の主君のお心を疑心暗鬼に塗り固めたので恐れることはない。しかし主殿が当家へ召し抱えられ佐渡守殿の執権ともなつたら、主殿は勝れている器量であるから俺の内心を見透かして、どのような妨げになるやもしれぬ。なんとかこれを妨害しよう）

とそれから色々と計略をかんがえた。

知らせが届いたので、両家の悦びは並大抵でない。谷崎主殿は奥方のご懐妊の墓目役を引き受けていたので、佐渡守殿もしばらく主殿お望みの件は延引となつた。伝蔵はたいそう悦び、なんとかしてこの機会を利用して主殿を亡き者にしようと、いろいろと悪巧みを廻らした。

ところで奥方はほどなく月満ちて安産なされ、御女子がご誕生になられた。その折安芸守殿はご在国であつたので、日々早馬にて芸州広島へ注進がある。加賀守からも広島へお悦びの使者が立てられる。しかし奥方は産後のお氣病が日々重らせなされて、伊勢守殿は申し上げるに及ばず、加賀お父子をはじめとして、両家のご家中の人々も手に汗握る思いであつた。御手医師、その他江戸中の名医が術を尽くして介抱し、また仏神への祈祷もあつたが、効果は一向に現れなかつた。加賀殿のお屋敷からは毎日見舞いの使者として、彼の大槻伝蔵が霞ヶ関のお屋敷へ詰め、また加州の手医師八木春宣がご容体を伺い、吉徳公へ申し上げる。墓目役の谷崎主殿は心を悩まし、茶食を忘れ昼夜お側に詰め介抱に努めた。

奥方は神無月の昼頃危篤となられ、ついに十五日の明け方にご逝去なされた。お側の女中方の嘆き悲しむ

声は殿中に響いても哀れなことはいよいよもない。さて大槻伝蔵は朝六つ時より霞ヶ関のお屋敷に詰めていたが、奥方ご逝去と聞くと同時に、加賀本郷屋敷へ早馬でとつて返し、主君の御前へ出るよりも先、いそぎ早飛脚を仕立てて、芸州広島へ奥方死去を知らせた。それから御前へ参上して姫君ご養生叶わず、ついに逝去と申し上げれば、吉徳公は特にお父子の間柄、嘆き悲しむことはこの上もない。

総じてこのような貴人、高家の死去は重きことであるから猥りに披露はしない。表方は知つていても知らぬようにするのが普通である。ところが伝蔵はお里よりの使者であつたから、奥方付の局頭が死去を知らせた。伝蔵は聞くとたちどころに帰つて広島へ早飛脚を立てた。これでもつて谷崎主殿を罪に落とそうと悪事を廻らせたのだと後には思い合わせられた。

一方谷崎主殿はこの度の粉骨の介抱の甲斐もなく、奥方ご死去を嘆きながらも、伊勢守殿へお知らせ申し上げ、またご一家へもお知らせした。それは十五日の暮れ方のことであつた。その夜書状を認め、明くる十六日の未明にお国元へ早飛脚を立てた。

かくて野辺の営みがあつて、ご菩提所青松寺へのご葬送も済んだ。加賀殿よりは西尾隼人を代参して、ご

香奠白銀五百枚が使わされた。

さて松平安芸守殿はご在国であつて、広島のお城にいらつしやつたが、江戸表屋敷よりの飛脚到来し、伊勢守殿奥方安産にて女子ご誕生の旨注進あれば、安芸守殿をはじめご一家中たいそう悦び、賑々しく浮かれているところへ、此度は奥方様産後のご大病の知らせが追々届き、安芸守殿はたいそう驚きなさりお国元の名医長沢良全を急ぎ下されたが、いよいよ大病が重らせになるご様子が次々と早飛脚で届くので、ご名代として国家老浅野権太夫に江戸表へ参上せよと仰せつけになる。

この権太夫は千五百石を領ずるといつても、先祖より裕福なことはたとえようもない。およそ持っている金は何千両あるかしかない。伽羅人參の類を大量に所持しており、西国一の資産家であつた。この度の江戸表伊勢守奥方の病氣見舞いについては、自身の献上品に最高級の高麗人參を五十斤持つて下つた。

道中にて加賀の早馬と出会い奥方死去と聞き、たいそう驚き力を落としもはや江戸表に参着しても無益であると思ひ、加賀の飛脚と一緒に浅野権太夫は飛脚を同道して立ち返る。帰つて奥方死去の報を申し上げた。家老中に披露してみれば、十五日の朝の死去と

記してある。安芸守殿ははなはだお怒りになり、

「このようない大事の知らせを加賀殿よりの飛脚が早く到着し、肝腎のわれらが屋敷よりの知らせが延引するは不屈きの至りである。とくに加州のてまえ面目ない。主殿は重役とはいえ、かような際事務万端取り仕切る用掛の役であるから、このような不調法では江戸表の政道も甚だ心許ない。これでは病中の奥方の看病もきつと手ばかりなものである。早々に役目を解いて国元に呼び戻し懲らしめてやろう」

ともつてのほかのご立腹である。

さて主殿の父将監は七十余にして五十人扶持を賜り隠居していた。主殿の父将監へさつそく使者が立てられた。

「その方は若年より功あつた故、倅主殿を年寄役に申しつけて江戸表へ遣わしたところ、この度このようない致し方、殿ははなはだ不屈きとお思ひになり屹度お答め仰せつけられるものである。またその方に関しては隠居の身分といひ老年であるから、倅の罪にかかわらず身分はこれまでのままとする。殿の内々の意向を仰せ渡す」

とのことである。

父将監はこれを承り有り難くお受け致し使者を帰し

て後、家子郎等の谷沢喜兵衛を呼び出した。

「お前も知っているとおり、倅主殿は幼少より文武両道にすぐれ、一家中においても恥ずかしくない器量、いつもわたしは生まれまさらだと心嬉しく思っていた。しかしこの度の江戸表の飛脚延引につき、安芸守殿のお怒りは激しい。どのようなお咎めがあるやもしれぬ。よってなまなか学者と呼ばれる者がお咎めを受けて、おめおめ生きながらえて恥を晒すより、潔く切腹したほうがよい。もつとも介錯かいしゃくとしてお前を江戸表に遣わすから道中急ぎ着いたらすぐに主殿を切腹させよ。しかしよくよくかんがえてみるにこの度加賀殿の飛脚、当方の飛脚より早く着いたのはなんとも合点がいかぬ。これはなにか事情があるようだけれども今更悔やんでも仕方ない。ただお前は一刻も早く江戸表へ急げ」と書状を認めて喜兵衛に渡した。谷沢喜兵衛は主命を無視するわけにもいかず、涙ながらに国元を立ち江戸表へ下った。

さてまた安芸守殿からは主殿お咎めの趣を江戸屋敷へ寺脇勝左衛門方へ仰せやられた。

国元でも奥方のご法事が十七日間昼夜行われた。

松平安芸守殿のご立腹については江戸表では知らなかった。伊勢守殿は谷崎主殿を御前へ召し出されて仰

せになるには、

「今度の奥方のことは今更悔やんでも仕方ない。その方数日の忠勤ご苦勞であった。しばらく休息して疲れを養うがよい」

といて、白銀三十枚下された。伊勢守殿は師を敬う礼儀を尽くしなされた。谷崎主殿はありがたき旨お受け申し上げて退出した。

主殿が家に帰ると、国元より谷沢喜兵衛が萎しおれたような有様で到着し、父将監の書状を差し出して涙ながらに平伏するばかり。主殿は、「父の方になにか異変があったか」と驚き、早速書状の封を切つて一瞥すると、「去る十五日奥方様ご死去の注進の一件で不調法である」と、安芸守殿はこのほか立腹である。よって厳しきお咎めがあるから、一刻も早く切腹いたせ。介錯かいしゃくとして喜兵衛を差し下した」といふ文面である。主殿は書状を見終わり、喜兵衛に向かつて尋ねる。

「十六日に江戸を出した飛脚の遅滞は知らない。わたくしが延引の不調法とは覚えがない。なんとも納得できぬ。国元の様子はどうか」

喜兵衛は答えて、

「加賀守殿よりの飛脚がお屋敷より早く到着致しまし

たので、安芸守殿はたいそうご立腹遊ばされました。殿様がいうのにはこのような粗末なことでは加州への仰せ訳も立ち難く、きつと病中の奥方の介抱もよろしくなかつたであろう、役目に不似合い不届きである、よつて処罰するとのことです。大旦那様へ使者が参りまして拙者にかように仰せ付けになつたのです。もう訳がわからず夢中で下つて参りました。なにとぞ事情があることとごさいましようから、ご切腹には及びません。常日頃お心正しき御身ですから、このようなことでお命をお捨てなさるのはあまりといえぱおいたわしく存じます。このように申し上げるわたくしの心はもう本当に夢路を辿る気持ちにして、やつとこのことでこれまで参上しました」

と涙を落とす。主殿もよくよく聞いて、「お前の心遣い過分に思うぞ。わしがこの度の失敗というのは、加賀の飛脚にこちらの飛脚が遅かつたというお咎めか。さてさて思いもかけぬことだ。奥方のご死去の披露は十五日暮れ方のこと。加賀殿は十六日に立てられるべき飛脚を十五日に立てたようだ。何分にも早まつた処置。納得できない」

とさすがの主殿もかへるけれども、伝蔵の悪事とは気づかなかつた。俯うつむいていた喜兵衛は顔を上げて

頻りに申し開きを薦めるが、主殿はなかなか承知しない。

「急なことを申すものだ。わしの主人安芸守殿は一旦言い出したら言葉を変へることはなさらない気性。そのうえ父より切腹せよといつて来たのだから、いままら言い訳をしてなんにならう。『主殿は命惜しさに言い訳をする』などと世間に後ろ指をさされることは必定。残念の至りである。また二つには私が理を申し開くときは主君の非を世間に顕すことになるも道理、そうなればたとえ命が助かつて不忠者の悪名は逃れることはできない。殿に差し上げているこの命、殿からのお咎めもないうちに切腹するはかえつて君に對し無礼。殿からの正式のお沙汰を待つて快く死ぬのが臣たる者の道である」

と覚悟を決めて、主君よりの使者が来るのを今か今かと待つていた。

こうしてお国元より伊勢守殿のところへ書状が到来した。

「主殿、この度の不調法不届きにつき役儀を召し上げる。早々に帰国せよ。罪状につきては此方にて屹度申しつける」

とのことである。伊勢守殿は書簡を御覧になつてた

いそう驚かれたが、父のお指図を仕方なくお思いになり、

「後日の申し開きでなんとかなるだろう。まず一旦は主殿に申し渡そう」

と大目付村井庄左衛門そのほか役人立ち合いにて、番頭寺尾勝左衛門が承り、さっそく主殿の屋敷へ赴いた。

「主殿、この度の不調法不届きにつき、役儀を召し上げる。早々に帰国せよ」

との書状を読み上げた。

主殿は畏まりて、「委細恐れ入りましてでございます」とお受けいたして、勝左衛門に向かつて、

「これは言い訳ではございません。一つのはなしの漸です。この度の奥方ご逝去のご披露は十五日の暮れ方のことで、月番のご老中へお届け申し上げました。ご家門方へもお知らせ申し上げました。翌日の十六日の朝に国元へ飛脚を立てましたのは、延引ではありません。詳しく言うとなとえご病死と決まりましたも、一時二時はご様子を見合わせて公儀へお届けするべきではありませんか。たとえご逝去の知らせが一日半日早いと言ってお国元と江戸との道のりをかながえれば、たいした違いはありません。それはさておきただ合点がいかない

のは十五日に飛脚を立てられた加賀守殿のほうです。そちらがおおきな間違いです。たとえ内々のことはともかく表向きの披露は十五日の暮れ方でございますから、これを待たないで飛脚を立てたのは不調法ではないでしょうか。だからといって他家のことですから、とやかく言う筋合いのものでもありません。しかしこれはわたくしの料簡での上は如何様咎を受けようとも、いささかも恨み申し上げるものではありません。いずれにしましても忠義の道理ほど大切なものはありません」

と申し上げると、勝左衛門はこれを聞き、

「おつしやるところはもつと尤もと存じます。けれども主命でございますので、是非もないことでございます。ますますお心を静かに国元への出立の準備をなされ、追つての沙汰をお待ちになるのがよろしいでしょう。拙者役目済みしましたので、お暇いたします」

と勝左衛門は御殿へ帰っていった。

それから主殿は喜兵衛を呼び出し、国元父将監へ詳しく遺言状を認め、また喜兵衛に国光の刀に金百両を添えて形見として残した。

諸事万端残りなく言い置いて湯を使って身を清め、年月慣れ親しんだ妻は弟谷崎精八郎方へ世話頼むとの

一通を残し、ひとり立って仏間へ入り心静かに覚悟を究め、惜しい三十八歳を一期として腹一文字に掻き切り返す刀で喉笛を切り潔く果てた。

さて寺尾勝左衛門は主殿方より立ち返り、主殿の嘶を伊勢守殿へ申し上げた。伊勢守殿はお聞きなさって、「そのような事情か。すぐに主殿の帰国をやめさせ、一応国元へ申しやりその上でなんとかできるだろう」と思案なさつているところへ、「主殿切腹」と知らせが来た。伊勢守殿をはじめとして、ご家中たいそう惜しみなさったけれどもはや仕方ない。主殿は表向きは病死と披露された。

安芸守殿にも後から主殿の申し訳をお聞きになり、たいそう悔やみなさつた。

「主殿のことはわしが行き届かなかつた。可哀想な死を遂げさせた。一生の不覚じや」と落涙なさつたということである。

その後主殿の弟谷崎精八郎へ家督を相違なく下され、谷崎の家は今も繁盛している。

さて谷崎主殿の切腹の事は隠そうとしても隠れなく、大槻伝蔵は伝え聞きたいそう悦び、  
(俺が謀略成就したからには、ご一家中では恐いものなしじや)

と一人ほくそ笑んでいた。

それからは太守吉徳公へ酒色を勧め、数多あまたの美女を御前へ差し出した。吉徳公は生来淫色いんしよくを好みなさる殿様であつたから、とても機嫌がよかつた。数多の美女のなかではお菊、お貞がとくに寵愛が深く、ご在府の時分は御殿に伴い、在国の時はお供としてお城に侍べらすほどのお気に入りようであつた。

さて二人の女のうち、お貞というのは大槻伝蔵が取り持つた妾なので、御前には伝蔵の都合のいいように万端拵こしらえ取りなした。それゆえ吉徳公はお貞、伝蔵の思うがままであつた。

ところでお菊、お貞の二人は同月に懐妊したが、お貞は去年ご参府のときより病気で、お国三元に留まつた。お菊は御供して江戸屋敷に赴いた。

二人には御手医師がつき大切に介抱されたので、二人とも神仏に祈つた甲斐あつてもに安産した。お貞の方はお国にて四月二日に御男子をお産みになつた。すぐに江戸屋敷に注進した。この時江戸屋敷でもお菊の方が四月六日に御男子をお産みになつた。さつそく公儀へお届けした。その後お国元からの注進でお貞の方が当月二日に御男子ご平産とあつたが、もはやお菊の方が産んだ子を公儀にお届けしてしまつた後だつた

ので、三男として届け出た。だいたい大名の国元で生まれて後継者は公儀へのお届けが遅れがちになるのが通例であった。それで三男におなりなされたのだ。伝蔵が臙膺ひいさまにしているお貞が生んだ御子は先に生まれなされたのだけれども、次になった。お貞は深く残念に思った。

伝蔵はお貞の方と心を合わせ、この度生まれれた御男子のご誕生の祝儀として、お貞の親の笠神明の禰宜ねぎの鏑木民部に七十人扶持を下されるように手配した。お貞もこの恩を忝かたじけなく思つて、伝蔵のことをいろいろ取り持ちしたのである。ただでさえお気に入り伝蔵であるので、たいした奉公もないのに、また新たに千石のご加増があつて、都合二千五百石となり、その勢いはまことに朝日のように、ご一家中の侍どもも恐れ敬つた。けれども心あるものは理由のない立身、出世よろしくない、吉徳公に諫め申し上げようとする。伝蔵はそのような気配のほの見える者どもを、なんやかやと難癖をつけ、いろいろと讒言ざんげんし、閉門籠居としたので、いよいよみな媚びへつらうようになった。

だけれども元来下郎より出世した伝蔵、大祿だいろくの歴々方は侮あなどるように見えた。それを察して吉徳公はお気に入り、

「家老村井主膳の妹を伝蔵の妻にやつてはどうか」

と仰せがあつた。村井主膳は御意であるから畏まつてお受けして退出した。主膳はわが家に帰り妹を呼び出して、

「今日御前においてこのような御意があつた。日を定めて伝蔵方へ送ろう。ただし先祖より代々わが家は七手の大将として、年寄より以下の家柄の縁組話はない。いわんや伝蔵は足軽の倅より立身した氏うぢもなき者である。才知のあるゆえだろう。当時は側用人を勤めている。たとえ小身者という理由で聳にとつてはいけないというものではないが、彼の場合心中なにかんがえているかわからぬ。将来どのようなことをかすかわからない。その時になつて縁者になつておれば、善悪とも逃れることができない。こういうわけで不承知であるけれども、主命であるから無視することはできない。一旦は承知と申し上げた。しかし善悪とも夫に従うのが女であるから、ああ困つたことになつたものだ。でも格別の縁組であるから、断るわけにはいかんだ。嫁入り先で軽はずみな行いをして、なんとか縁されるようにしてくれないか」

と言うと、妹はこれを聞いて、

「お兄様はさてさて思いも寄らぬ迷惑な仰せを引き受

けてきたものですね。だいたい女というものは身分が高かろうが、賤しかろうが一度嫁する時は、善悪ともに夫に任せ、その心に従うのは当たり前のことです。それなのにわざと身を持ち崩し、放埒ほうちやうに致して離縁されるとは、だれが方便で演技していると思いませんか、かえってわたしが不義の悪名の噂うわさが立ち世間に笑われます。とても悲しいことです。何卒なにとぞこの縁組はよしてください」

と言う。兄主膳はこれを聞いて、

「まことにその通りだ。だけれどもいまも言い聞かせたように、主命であるから仕方ないのだ。殿のご命令に従わなければそれもまた一家の一大事なのだ。といつても心よからぬ伝蔵と縁者となつても、わが家の一大事ともなろう。でも仕方がない。家の大事には代えがたい。妹よ。身を捨てて伝蔵方へいつてくれ」

と言うので、妹も家の大事を思つて、しぶしぶ納得した。主膳はさつそく妹を伝蔵方へ遣わした。

伝蔵のほうも主膳が日頃血筋がよいのを自慢しているご仁だから、縁者となるのは面倒なことだと思つていた。これからもっと立身して主膳なぞ見下してやろうと内心思つていたところなので、嬉しくはないけれども、殿の申しつけだから断れない。とにかく婚礼を

取り結んだ。主膳の妹は婚礼の晩から、急な病氣といつて一間に引き籠もり、里から召し連れてきた腰元衆とともに、琴、三味線を弾かせて高笑いしてどんちゃん騒ぎをする。不埒なる身持ちであるから伝蔵もさんざんだと思ひ、三日目に里の主膳へ使者を立てた。

「乱心のご様子であるので、離別致します」

と送つてやると、主膳は待ち儲けていたことなので悦び、すぐ妹を引き取つた。

伝蔵は内心たいそう怒り、

（当時ご一家中において俺に出会つて挨拶せぬものは一人もいない。それなのに主膳は俺が出自の賤しいのを侮りあなだ、このように企んだのは無念千万。よしよし今に思ひ知らせてやろう）

とさつそく御前へ参上した。

「この度主命をもつて主膳妹と縁組み致しましたところ、主膳めは拙者の出自を侮り妹に言い含め、さまざまの乱痴氣騒ぎを致し、もう仕方なく離縁致しました。でも私は下郎より大禄に罷りまかなりましたのは、これすべて殿の御恩であります。御前のおめがねに叶つて立身を仰せつけられましたものを主膳が侮りますのは、ひとえに君の御目を侮りあなだ申し上げるのと同じです。これは私をもつて君を軽んじ申し上げるのも同然です。

わたくしはお暇をいただいて、これから山林に籠もり世捨て人と姿を変え、君のご武運長久をお祈り申し上げたいと思います」

と両眼に涙を浮かべ、いかにも本当めかして申し上げると、吉徳公はお聞きなさつて、たいそうご立腹の顔色で、

「その方が申すところ尤もであると思う。どうしてこれしきのことで世捨て人になることがある。主膳はわれをあざむく不忠者である。折をもつてきつと懲らしめるつもりだ。またその方へは、我が一類より縁組を世話しよう」

と、急に前田修理を御前へお呼び寄せになつておっしゃるには、

「伝蔵のことは世にも希な忠臣であるから、我が取り立てて召し使っている。だいたい系図を正すといつても、下賤の身から高家となつたものは数知れない。近頃では豊臣秀吉公が百姓より関白まで昇つた希なる立身であつた。これはそのものの器量によるのだ。伝蔵の器量は昔の歴々の方にも劣らない。どうだろう、その方の娘と伝蔵と娶せてはどうか。婚礼の費用は我が台所より賄わせることにする」

と、こうおっしゃつた。

前田修理という人物は一万五千石余りを領する家柄といい禄といい、伝蔵など智に取るはずの人ではないのだが、第一軽薄の人で臆病至極の生まれつきなので、伝蔵の当時の威勢に恐れたのであろう。「委細畏れ入りました」と承知して退出した。それから吉日を選んで、賑々しく飾り立て、伝蔵方へ娘を寄越した。

吉徳公の費用であるので、豪華な諸道具の仕度で、目出度い婚礼も済んだ。

その折吉徳公より引き出物として千石下され、表面きはともかく内々は吉徳公の御贄同然の扱ひであつた。誠に前代未聞のことであつた。ご譜代の忠臣等は吉徳公を色々と諫め申し上げるけれども、まったくご採用なさることはなく、かえつて忠言がお耳にお障りになつて、あるいは閉門、籠居をお申しつけなさるので、忠臣の者は絶え、不忠臣の者は目を追つて勢い盛んに増殖する。かなしいことだ。君は伝蔵の正体を知らないのだ。かえつて伝蔵を内蔵介と改名し、側用人、家老役と兼務を仰せつけなさる。伝蔵の勢いますます盛んになつて、飛ぶ鳥も落とすばかりであつた。

さて大槻内蔵介は家老役、お側用人兼役となつたので、藩政のすべてを握り、田舎の手代のうちからおのれに従う者を用い、奉行、代官と立身させ恩を売つて

味方とした。

その中で吉田宅右衛門というのは、内蔵介が取りなして手代より改作奉行となった者で、内蔵介に恩を感じ心を通わせていた。

石川郡村井与三左衛門は、ご領内の大庄屋である。内蔵介は与三左衛門と結託して利鞆りざやがあがるように便宜を図らせたので、内蔵介はとりわけ暮らし向きがよろしく、ご家中随一の金持ちとなった。

近年加賀地方は大凶作で、百姓どもが一同に集まり、年貢の免除を大庄屋与三左衛門まで訴えた。与三左衛門は百姓の難儀にも知らぬ顔、改作奉行の吉田宅右衛門と示し合わせていっこうに年貢を宥免ゆうめんしない。あろうことかかえって厳しく取り立てる。百姓どもはこれを怒り、「われわれの願いの筋を上へ知らせずに、かえって取り立てを厳しくするとは、これみな与三左衛門がかんがえである。よしよし。こうなったからには君寵あらたかな出頭の大槻内蔵介へ訴え出よう」

と村々の口利きの百姓二十人ばかりが願書を認めた。大槻内蔵介の外出の折を見て直訴しようとする。ところが内蔵介はこの度国元の犀川橋というところ、八町四方の下屋敷を下された。築山は珍木や名草を植え、泉水には犀川の自然の水を堰入れ、三階の物

見から国中が見晴らせた。また多くの美女を呼び寄せ、酒色の愉しみに耽ふけった。まことに奢せり栄える内蔵介の屋敷は喜見城ともいつてよい。

あるとき内蔵介はお城よりこの下屋敷への帰り道で、待っていた百姓ども二十人ばかりと出会った。百姓らは願書を駕籠へ投げ入れた。内蔵介は願書を一見して百姓どもに向かい、

「お前たちの願いの趣旨はもつともである。追々沙汰するから、手荒なことをするでないぞ」

と申し渡して屋敷に帰り、すぐに吉田宅右衛門を呼び出し、先の願書を見せ、

「ほかの家老どもにこのような直訴状が渡ったなら、『役人の不届きである』と詮議が及ぶだろう。ことによるとその方困ったことになるぞ。少しぐらいゆるめてやれ。ことの起ころぬようよしなに処置しろ」

と申しつけた。宅右衛門は、「畏れ入ります」とそれから大庄屋与三左衛門のところへ行って、この願書を見せて相談すると、与三左衛門は元来不敵の曲者で、自身の権威に任せて、

「さて、憎き百姓の奴らめ、何程のことがあろう。この件は拙者にお任せあれ。宅右衛門様、よろしく取り計らいましょう」

とこともなげに請け合う。

与三左衛門は直訴した百姓どもを呼び寄せ、目を怒らし、

「直訴というものは天下のご禁制であることは知つていよう。ことにわしは庄屋であるから不満があれば何度でも願ひ出るべきなのに、一度の願ひが取り上げられぬからと言つて、あろうことが直訴に及ぶとは不届千万、よつて厳しく詮議する」

と言ひ渡し、二十人の百姓どもみな与三左衛門の居宅の裏長屋に押し込め、一人も宿へ帰さない。百姓どもを閉じ込めて牢屋同然にしたので、ほかの百姓どもはみな驚いてさまざまに訴えるけれども、与三左衛門は少しも聞き入れない。その上見せしめのためといつて食事もはかばかしく与えず、数日監禁したので、村々の百姓どもは怒り騒ぎ、数百人の徒党を組み監禁されてゐる者を助けようと、夜になつて与三左衛門宅へどつと押し寄せた。手に手に鋤、鉞、斧、鉞などを引き投げ引き投げ、無二無三に門口に殺到し打ち崩し、家内にどつと乱れ入った。四方八方の戸障子に至るまで片端より打ち壊していく。

「与三左衛門はどこじや。どこにおる。きやつを逃がすな。打ち殺せ」

と声々に呼ばわつて尋ねたので、与三左衛門をはじめ家内の者はたいそう狼狽え騒いで、ほうほうの躰で逃げ散った。誰もいなくなつた家を一揆のものは散々に打ち壊して、監禁されていた二十人の子どもを救出して、介抱の者をつけて家々に帰した。それからまた家財道具まで残らず打ち壊した。けれども人は一人も殺さなかつた。

百姓どもは大声を上げ、嬉しや嬉し日頃の恨みは晴れたりと言ひ合ひ、声を合せてどつと笑い、どこともなく消えていった。

このようにして与三左衛門は命からがら逃げ出して、役所へことの次第を訴えた。

役人は吟味の上、さつそく与三左衛門を案内者として村へどつと返した。村々へ捕手の役人が大勢向かつたので、百姓どもは、

「与三左衛門がくるぞ」

とどこかしこから五十人、三十人ずつかたまり出てきた。

「与三左衛門を逃がすな」

と言うより早く追いかけて取り巻き、ついに与三左衛門を打ち殺してしまつた。

捕手の者共はこれを見て、

「不届き千万なる百姓ども、一人もあまさず捕らえろ」

と向かったけれども、数の多い百姓どもはものともせず、てんでの得物えもので捕手に打って掛かり、散々に打ち薙ぎ伏せるので、捕手どもも打ち負けて武器を取られ疵きずを受けて、さんざんな躰ていで逃げ帰った。

それから国中の大騒動となり、百姓共が一揆を起しお城に押し寄せるとの噂が立ち、ご城下の男女はたいそう驚き今にも合戦が始まるかと、家財道具を運び出し巷ちまたに彷徨さまよっていた。人々は小児を抱き老人の手を引いて東西に走り南北に逃げ、もつてのほかの大騒動となった。藩の諸士はみな登城してにわかには評定が始まった。

こうして石川郡の百姓どもの訴えが聞き入れられないのに憤慨して大庄屋与三左衛門を取り巻き、家をこごとく破壊してその後捕手の役人に手向かいしたことにより事件が起こり、加賀の国の大騒動となった。さまざまな風説が流れ、諸士はみな登城した。

吉徳公が在国であったから、さっそく殿の御出席があった評定が始まった。本多阿波守が申し上げることには、

「そもそも当地の人氣ははなはだ強勇であつて、とも

すれば百姓は一揆を起こしたことです。京都將軍の御代には富樫氏が代々国主であつたが、そのころの富樫次郎政親は武勇の聞こえ高く、將軍家三好松永が危うき難を救つて、美名を顕あした。しかし当家の一向宗の門徒等、本願寺・高田の家宗の浅深についての宗論しゅうろんのことがあつて、国主富樫政親の支配が道理に背くということになつて、須崎和泉入道慶字というものを大将として、国中の一揆を糾合し国主富樫の城に押し寄せた。富樫はよく戦つたが、小勢であつたからついに打ち負け、一族三十余人同時に自害しついに家が絶えてしまつた。

それから一揆が国中に広がり近国までも波及していったのを、佐久間玄蕃げんぱが知勇を振るつてようやく鎮めたことである。しかしややもすれば百姓一揆が起こり、度々の難儀に及んだ。

しかしながらご当家の先祖前田利家公、この国を統治なさつてからは、今に至るまでこのようなことはない。この度の百姓どもの一揆は等閑にはできない。人数を差し向けて百姓を召し捕り、お仕置きを仰せつけられるべきです」

と申し上げれば、前田土佐守これを聞いて、

「誠に『蟻の一穴より堤は崩れる』と昔から言いま

すけれども、それは乱世の時分のことです。この度の騒動は下の訴えを上へ通じないことに百姓が憤って起こしたことで、強欲な大庄屋を恨みてのことです。まったくお上に齒向かつてのことではありません。また捕手に手向かいましたのは、大庄屋がついていたからです。いまた人数を差し向け百姓を召し捕らんとすれば、土民たちなどが何万人も集まってもすこしも恐れることはないけれども、相手も必死になつて手向かいすればこちらでも多く出ましよう。それでは国政の妨げとなります。それよりも不埒な奉行役人を戒めなされば、一揆は自然と静かになりましよう」

と申し上げると、元来勇猛短慮の吉徳公でありますから、土佐守の言葉をご採用ならず、

「その方のかんがえは手ぬるい。国主より差し向けた役人に手向かいたは反逆罪である。すぐに召し捕りて一々首を並べなければ、国主の威光が薄いのに似ている。早々に騎馬武者を差し向け片端より百姓を踏み殺し、それで手に余るならば飛び道具で皆殺しにせよ」

とたいそうお怒りになる。

その時末座にいた大槻内蔵介が進み出て、

「わたくし如きが鳥澁がましいとは存じますが、申し

上げます。これくらいでご人数を差し向けられることはいかがでございましょう。まず暫く差し控えられるのがよいでしょう。でもこのまま関知しないというのも、君のご威光が薄いとみられます。でありますから拙者一人が百姓どものところへ参りまして、善悪の詮議を致しましよう」

と申し上げる。

同じことでもお気に入り内蔵介が申し上げると、吉徳公は機嫌が直り、すぐにご採用なされて、

「その方に申しつけるから。良きようにはからえ」

と仰せられて、御殿の奥深くにお帰りになった。これで評議の大勢の諸士はそれぞれ退出した。

大槻内蔵介は仰せを受け、帰って着物を麻のものに替え、家来の若党二人と草履取りひとり同伴つて村方へ急いだ。

一揆の百姓たちはお城から討手が来るといふ噂があったので、

「とても逃れられない命、ひと働きして、侍どもを呆れさせよう」

と物持ちの百姓は、先祖代々から伝えられた具足、鍔、長刀などを持ちだしてきて、今や遅しと討手の到着するのを待っていた。そこへ大槻内蔵介は供人二三

人を連れるだけで、日常の平服で現れたのである。内蔵介が百姓どもに向かつて言う、

「お前たちの腹の立つ事情はよく分かる。まずまず静かにしてわたしの考えを謹んで聞いてくれないか」

ともの柔らかに言うので、百姓どもはこれを聞いて、拍子抜けして齒向かう気もなくなつてしまつた。みな

「はっ」と平伏した。内蔵介がまた言うには、

「汝らの願いの趣旨はわたしが聞き届けた上で、年貢宥免ゆうめんの沙汰さたも申しつけよう。下役人並びに庄屋の処置が悪かつたから、このような騒動になつた。よつてお前どもの願いの通り役人どもをきつと処罰しよう。しかしその方たちは一旦お上に対して手向かいした以上取り調べのため入牢させないわけにはいかない。そうでなければお上のご政道がないようである。だけれども命に関してはこの内蔵介が責任を持つ。いずれが首謀者であるともいえないから、みなでくじを引いてくれないか。一ヶ村から三人ずつ出しなさい」

百姓どもも内蔵介の道理のある言葉に従い、

「なるほどそのようにすればまるく収まるのか」

と納得して、一ヶ村より三人宛、都合八ヶ村で二十四人くじで選び出した。

内蔵介は、

「これは一応大法を犯した咎人とかにんであるから」

と言つて、「縄を打て」と言つて、二十四人をことごとく縛り上げて、それぞれの村の者に縄を持たせて、内蔵介は手も汚さずして、二十四人を生け捕りにして、悠々とお城に立ち返つた。それから彼の二十四人は残らず牢に入れられた。

また改作奉行の宅右衛門は追放され、その手代三人にも暇が出された。でもこれは表向きであり、内情は内蔵介が金子を渡して、人しれず匿かくまつていたということである。

この二十四人の百姓どもはご法度の徒党を結び、そのうえ役人に齒向かい、大庄屋を打ち殺した張本人と云うことで、残らず死罪となつた。村の面々はたいそう驚いたが、役人もお咎めを受けていることだから、文句も言えず、そのまま済んでしまつた。国中の騒動もこうしてすべて鎮まつた。

この度の騒動がさしたる問題も起きず鎮まつたのは、これすべて内蔵介の抜群の働きであつたと吉徳公はたいそう褒め、また二千石ご加増になつた。それで都合五千五百石となつて、年寄の上座に仰せつけられ、しかも側用人も兼務しているので昼夜御前へ召し出された。夜中も何時もなく奥のご酒宴のお相手ともなる。

殿のご寵愛のめざましいことは喩えようもないくらいである。しかし内蔵介は家中の批判を思つて、お殿の内に休憩の部屋を拝領し、折々ここへ泊まったので奥へ出入りするのを知るものはなかった。

だけれども、吉徳公はますます内蔵介をお気に入りなさつて政道のすべてを彼に任せ、吉徳公はいつも内蔵介がなくてはならないと言つていた。昼は終日政務に、夜はご酒宴をともしなさる。

数多の美女を集め戯れなさいているなかに、最近京都より召し抱えた舞子の花野という女に殿のお気持ちがお移りになり、わけてもその腹に御男子がお産まれましたので、いよいよご寵愛深く、お部屋様となりました。一方お貞の方は近頃はご寵愛が薄くなつたけれども、ご三男の実母であるから、一家中において重んじられてはいる。お貞の方はつらつらかんがえてみるに、

「わたしの産んだ吉徳公の御子は本当はご次男であるのに、お国と江戸とが遠いために、公儀へのお届けが遅くなつたので、三日後に産まれたお菊の方の御子が次男となつてしまつた。また近頃京都より召し抱えなかつた花野はことのほか吉徳公に気に入られ、また御男子を出生しお部屋格になり、ご一家中の敬う様子は

自分を越えている。殿にもしもの事があつた場合、次代の後継者にわれが産んだ勢之助を捨てさせるものか。きつと世に出そう」

と悩み苦しんでいたが、どうしたことかなにかいい思案が浮かんだものか、内蔵介を呼び出して、

「自分は昔から、そなたの世話で、このようない身分になり、また若様まで儲けることができ悦んでおりました。また公儀の届けが遅れたため、勢之助はほんとうはご次男でありながらもご三男になつてしまいました。それだけでなく、最近花野がお部屋格となりお産みなさつた子の威勢強く、勢之助はあれどもないような有様です。どうかわたくしの心の内を推し量つてくださいませ」

と涙を流しながら言う。内蔵介はこれを聞いて、  
「いかにもご尤もなる仰せです。しかしながら勢之助様はご三男といつても、いろいろな事情によつてはお家をご相続できないということがあります。またほかの大名へ養子としてお出になられても吉徳公のおかんがえ次第で数万石の大名とおなりなさることは容易なことです。わたくしがこうしておりますから、すこしも心配はいりません。将来をあてにしていらつしやい」

と申し上げる。もともと邪よこしまな心をもっていたお貞の方殿はこの言葉を聞いて心の中で、

(なるほど三男、四男であつても、家督を継ぐ大名がたくさんあるのか。なんとかしてわが子にこの家を相続させたい。それについては自分ひとりの力では無理だ。当時一番の権勢といい、頭の働きといい内蔵介以外にわたしの味方にするべきものは他にいない。心を打ち明けて頼んでみようと思う。ちよつと待て、大事のことだから、かんがえないと、どうしよう)

と思つたが、とつさの思案を廻らし、内蔵介の傍かたわらにすり寄り、

「お前様へわたしの命を懸けて、お頼みしたいことがあります。お聞き入れてくださいますか」

と言う。内蔵介は、

「これは改まつて、どうなされました。お貞殿のお頼みならなんなりと、ええもちろん、どんなことでも承りましょう」

と申し上げると、その時お貞殿は、

「さつそくのご承知、忝かたじけなく存じます。ではお頼みの筋を申し上げます。なにとぞ勢之助をそなたの実の子とお思いになり、またわたくしを実の妻とおもってくださいまし」

と申すので、思いがけないことであるから、さすがの内蔵介もぎよつとした。しばらくかんがえて、おのが心中を察し、

(さては勢之助殿のことを願つて、俺を味方にしようという下心だろう。これは俺にも好都合だ。もう前々からの望みがある。よしこれからは勢之助殿を楯にとつて、俺の出世を成就させよう)

とかんがえつつ、目の前のお貞の方を見ると、まことに美しき風情である。内蔵介は心迷つた。

「慥たじかにお頼みの筋、ご承知致しました。何事もよい折を見合わせて、お互いに心底を明かしましょう」と示しあつた。

それから二人は深く言い交わし、人知れず忍び会う仲となつた。そして悪事を計画した。

さて吉徳公はこのようなことは夢にも思わず、ただもう内蔵介のことを忠臣とお思いなさつて、奥御殿はもちろん女中方の部屋々も内蔵介ただ一人はいつでも自由に入りが許された。

その年も六月下旬になり。七月の江戸への参府さんぷが近づいてきた。お貞は内蔵介を密かに招いて申し上げるには、

「わたくしは吉徳公のご側室とは名ばかりで、今はも

うお前様の妻も同然であるから、いまさら思っていることを隠すこともない。前に申し交わした通り、勢之助を当家の跡目にする方便はないものか。近くご参府であるから、お前様も一緒に江戸へいらつしやるのでしよう。またわたくしは加賀国に残ることになります。来年でないともうお目にかかれませんか。江戸表へおいでになつてもよろしく手蔓てづるを廻めぐらしなさつて下さい」

と申し上げるので内蔵介は頷うなづいて、

「少しも心配なさることはない。これほどの大事、なかなか急にはなりません。いまは極力宿望のあるそぶりを悟られぬようにお心懸けることが大事です」

と申し含ませて、その夜は人目を忍んで睦まじく言い交わして帰った。

さて七月になつたので、吉徳公はご参府のため内蔵介を御供にして、江戸表へ下りなされたが、内蔵介は昼夜ともに大望成就の企てばかりかんがえていた。

ところで内蔵介は江戸、国元にも味方にした強欲不敵の者が二百人ほどいた。その中でも川勝平次右衛門、香川又左衛門、平野助太夫、矢島為右衛門、小野沢勝八、杉山善太夫、戸沢五郎、中高市助、青山佐吉、早水喜惣太これらはみな、四、五百石取りで奉行役に取り立てた者で、何れも剛勇ごうゆうの曲者で、一方の大將分で

あつた。

ことに内蔵介はうわべはそれほどでもないが、内実は裕福で、武勇の者とさへ聞けば、過分の金銀を惜しまず召し抱えたり、自分の近習や若党にして召し使ひ、家内には勇力無双の一芸に達した浪人数十人を抱えていた。

これは大老前田、横山、本多の人数よりも多く、このようなことはご一家中の耳目を驚かせたとはいえ、内蔵介は吉徳公はもちろん若殿佐渡守にもよく気に入られ、信用なさつていことなので、誰一人非難する者がいかなかった。

内蔵介大望成就の計画を進めるために、公儀の儒者林大学頭殿ご門弟の岩永甚蔵というものが博学の評判が高かつたので、佐渡守殿へ召し抱えるように推薦した。佐渡守殿はとくに学問をお好みなさるから、たいそうお悦びなさつて、さつそく吉徳公へお伺いを立て三百石にて召し抱えなさる。この岩永甚蔵はことに悪智慧の働く者で、表向きは若殿のご師範となつて賢人ぶつてゐるけれども、内心は邪悪な性格であつて、大槻の回し者であつた。書物の講義の際には政道の新法などをお勧め申し上げ、常々若殿へ申し上げるには、「お家の家臣のうちをよくよく見ると、誠の忠臣とい

えるのは、内蔵介一人でありますな」

などと褒め、

「漢の高祖は韓信を拜して大将となさった。また太宗は髭を切り除世に贈った。国家を治めるに臣下を敬いなさることが大切であります。これが賢君の道であります。このようなことはいまさら申し上げずともご存知でありましょうが」

と折りに触れ内蔵介を持ち上げ申し上げる。佐渡守殿も学者の言葉なので、まったく信じなされた。内蔵介の勢いは朝日の昇るようであった。

さて光陰矢の如くしてその年も暮れ、明くる年の七月になった。吉徳公は一年のご在府期間を過ぎましたので交代のお暇を仰せ出され、七月初め江戸表をご出立することに決まった。吉徳公は内蔵介を御前へ召し出されておっしゃるには、

「わしは子どもがたくさんいる。五人の男子の内、菊が腹に産まれた亀治郎は次男なので、佐渡守の控えとする。またお貞が産んだ三男勢之助をはじめ残り二人の弟は、小禄を与えて家来にしようと思う」

内蔵介はこれを聞いて、慌てて申し上げるには、  
「御意の趣、ごもつともとは存じますが、弟君も正しく殿のお種でございます。さすれば、お分地か、ご養

子に外へやられること格別でございますが、ご家来となされるのは若君様方の御心をかんがえれば、ご無念とお思いになられるでしょう。そうなりますとお家の一大事でありませう。じっくりとご考慮くださいませ」

と申し上げれば、吉徳公はお笑いになって、

「先祖中納言は次男淡路守利次へ、十万石を分地なさり、また三男飛騨守利常へ、七万石を与えなされたことは、家の飾りとしてはよろしいけれど、領地が減じて今では百二万石余りとなってしまった。これをまた分地すれば、百万石以下となってしまい、普通の大名国となってしまう。これはかえって子孫のためによくはない。よってこの度帰国したら、家老どもと相談してこのように決定しよう」

と仰せになるので、内蔵介もどうしようもなく、  
「ご道理でございます」と申し上げ、御前を退出した。そしてつくづく思うには、

（この度のご入国で家老達とこの件でご相談され決定されれば、勢之助はご家来となって、俺の大望の妨げとなるのは疑いようがない。企みを急いで、吉徳公を失い、次に佐渡守殿と次男亀治郎を毒でもって殺し、勢之助を跡目に立てよう。それから俺は第一の執権職となつて政道を心のままに動かし、威勢を加賀、江戸

に振るって、機会を待つてこの前田家に乗っ取ってやろう。それはもう一寸四方のものを取るように簡単なことだ。とにかく吉徳公を殺すには、毒薬に及ぶものはない)

と思うけれど、

(朝夕の御膳は俺が検めるものを殿に差し上げるのであるから、食事に毒があれば、俺自身の申し訳が立ちにくい。だから毒薬を使うことはできないが、なにか工夫をして、他の手段をもつて殺すことにしよう)

と思う。そうこうしているうちに、はやくも江戸表を出発するということになった。すぐに道中となった。内蔵介も焦つてどうにかして道の途中で吉徳公を暗殺しようと思ひ、以前から召し抱えていた忍びの達人五十嵐十郎というものに申しつけ、毎夜ご本陣を伺つてくれるけれども、警護が厳しくてなかなか近づけない。そこでかんがえを変え、(いかに不慮の事故でないかと、俺に詮議が及び、かえつて難しいことになるだろう)と策略を廻らす。

太守は以前から馬をことのほか好みなさつて、道中もだいたい馬で通行なさる。内蔵介はひとつの悪事を思ひついた。鳥井又助という水練の達人で、大力無双の曲者がいた。これと呼び出し密かに言い含めた。又

助が言うには、

「吉徳公が川を越えなさるのは船か、守護させて蓮台でお渡しになるか。船と蓮台であるならどうしようもないが、もし馬でお渡しなさるならば、わたしが水中に隠れ短刀でもつて馬の足に疵きずをつけるなら、どのような名馬でも驚いて跳ね上がる。そうすれば殿は水のなかに落ちなさる。その隙にわたくしは水を潜つて逃げます」

というと、内蔵介はたいそう悦んで、「では、よろしく頼む」と示し合せて、その翌日より内蔵介は乗り物をやめて、馬に乗つて御供をする。吉徳公は、「そちも馬好きになつたか」

と仰せになつて、いよいよ馬上にて道中を通行なさる。天竜川では引き船にお乗りになり、また大川は清水ゆえ蓮台に乗られて越しなさる。それから日数が積もつて、吉徳公一行は無事越路の筑摩川にお着きになつた。

この節はこの頃の長雨でここの川が満水して、とりわけ筑摩川の水嵩が増していた。内蔵介はここが好機なところと思つて、彼の又助に合図した。

又助は川岸の柳の影に隠れ、吉徳公が川へお入りになるのを今か今かと待つていた。

さて内蔵助は馬に乗って川岸に乗り寄せ、

「これはこれは、夥おびただしき大水ですな。この川を馬ではとても渡すことはできませんまい。川越えの者達に仰せつけられて、蓮台にてお越えになるのがよいでしょう。たとえいかなる馬術の名人でも、たやすくは渡せない」

と申し上げると、吉徳公はお笑いになって、

「なにほどのことがあるうか。われに続いてみな乗り込め」

と仰せになるので、内蔵介をはじめ、御供の面々は重ね重ねお止め申し上げるけれども、吉徳公は全くお聞きにならず、もう川岸に馬を乗り付けなされた。その時磯松三郎左衛門が進み出て、

「然らば拙者がお先を行います。水を試みましょうぞ」

と一散に乗り入れるので、吉徳公も続いて乗り込みなされる。次々と御側の人々、六七人が馬で渡した。

御側の人々は吉徳公より半町ほど遅れた。吉徳公はじめ何れも馬の足が立たないように見えたので、川岸に隠れていた又助は、よい時分と水中を潜り、吉徳公のお乗りになつてお馬の後足を捉とらえて、短刀でもつて二箇所ほど刺し通した。馬は驚き跳ね上がり、横

様に倒れ、水の流れにしたがつて川下へ流れた。

吉徳公は川中へ落ち、浮かんたり沈んだりして流れなされる。御供の人々はその驚いて泳げる者も泳げない者もみな、川に飛び込んで殿を助け申し上げようとする。

なかにも磯松三郎左衛門は力も水練も勝れた者だから、吉徳公の腰を抱えて差し上げ、向こう岸に着いた。内蔵介も馬にてやつと川を越え吉徳公のお側へ近寄りご様子を伺いみるに、ひどく弱り水を相当お呑みになつている。その上ご自身のお刀の柄にて胸をしたたかに打ちなされたので、はなはだお苦しみなされる。それで御供の人々にはわかに狼狽うろたえ騒いで、手に汗を握つた。この時三人のご近習も流され、行き方知れずになつた。

さて、御手医師がお薬を尽くして、さまざま治療なさつた。吉徳公はその日の暮れ頃によく意識を回復した。内蔵介が乗物に付き添つて道を静かに運ばせ、金沢の御城に入れなされた。

在国の諸士は残らず登城して見守り、医術を尽くしたが、終にご療治の甲斐なくご逝去なされた。

ご家中領民も闇夜に灯火を失うようであった。さてご公儀へお届けとして、本多阿波守長九郎左衛門、

その他年寄三人、内蔵介も殿のご病状を申し上げるため同じく江戸表へ下った。

また江戸屋敷ではお国よりの飛脚日々注進が届く。

佐渡守殿をはじめご一家中たいそう心を痛めた。程なくご死去の早打ちが来るとすぐあとに、本多、長、大槻等が到着した。詳しく殿のご様子を佐渡守殿へ申し上げる。それからご老中へのお届けの御使者とご家督願書をご公儀へ差し上げ、指図をお待ちなさるところに、ほどなくお悔やみの上使が来て、佐渡守殿へ御家督相違なく仰せつけられた。この知らせは国元へ届けられた。御代替であるから、お国元から家老、年寄が次々と江戸に下りご家督首尾よく済まし、ご祝儀を述べる。それから家老中が將軍家のお礼としてお目見え致すことになっていた。

大槻内蔵介は家老格と先だつて將軍の耳に達していたので、この度家老中本多、横山などと一緒に將軍家へお目見えした。このことが国元へ聞こえると、前田土佐守はたいそう驚いて、

「諸大名の家臣で將軍家へお目見え致すことは決してできるものではない。国主の家老といっても、国の代替わり時よりほかはあるものではない。当家はご三家格の家柄であるから、家老職までは年のお礼を申し上

げる。これはまったく先祖のご武功によるものである。さて、この度の大槻内蔵介は何程の勲功があったのか。といって、將軍家へお目見え致すことになったのか。言語道断のことである。内蔵介如きが將軍家へお目見えとあつては、先祖の戦功、譜代のわれわれはなんの面目にご奉公をしようぞ。これは誠に当家の一大事である」

といつて、心を痛め同役重臣を密かに集め相談するが、面々内蔵介の今の権勢に恐れたのであろうか、かれこれ評定がさだまらない。それで土佐守はたいそう悩んだけれども、自分一人でこの状況をひっくりかえすことはできないと、まず時節を待つて挽回ばんかいしようとして、その座を立ち病氣ということにして引き籠もつてしまつた。

先代の太守吉徳公はご家督をご長男宗辰公へ相違なく仰せつけられ、四位中將に昇進なさつて、先君のご逝去が内蔵介の謀略とは全然ご存知なかつたので、内蔵介を二代の太守に仕えさせ、加増かぞへせよとの裁断があつた。内蔵介は家中上下の思惑を慮おもんばかつて佐渡守殿に向かつて申し上げるには、

「君はこの度ご家督を相続なさいましたけれども、私  
はなんのご奉公もありません。このような者にご加増

なさいましたなら、ご譜代の家臣から嫉妬を受け、かえって災いの種となります。ご辞退申し上げます。また御代も替わりましたので、もはや御側役を解任下されたく、この上は外方からご奉仕させていただきますならば有り難き仕合わせに存じます」

と申し上げると、太守はいよいよ賞賛して三人の老臣になんの相談もなく、内蔵介にまた千石の加増を下された。今までのものと合わせると、六千五百石となった。

さて内蔵介はこの度の將軍家へのお目見えで、諸大名の煌びやかなご様子を見えます悪心が膨らんだもつと出世して加賀藩を奪い取ろうという心が起こった。誠に前代未聞の悪人である。

内蔵介はどうにかして太守宗辰公を毒殺しようといろいろ企みを廻らすけれど、ご近習に村田半助、大山田五郎という大力無双の忠臣が昼夜お側を守護して警戒しているのです、内蔵介もなかなか手が出せない。

毒殺計画は一大事であるから、時節を見合わせていた。内蔵介は家老格であるから、やたらと御膳部へ立ち寄ることもできない。御膳はすべて村田半助と大山田五郎の兩人の役目であり、ますます内蔵介の悪事も届き難い。それで一味の悪党のなかから人を選んで、

小見山文左衛門という者を町人に拵え謀略を言い含め、手蔓を使ってお出入りの魚屋の下男にして朝夕屋敷のお台所に入り込ませておいた。

そんなとき村田半助が病気になって、しばらく引き籠もった。内蔵介も病気と偽って引込んでいたが、かの魚屋に潜入させておいた小見山文左衛門を密かに招き、少しの間みそかごとを言い含ませた。

小見山文左衛門はいつもの通り早朝から屋敷へご用の魚を持参し品々を調理して、知らぬふりをして井戸に立ち寄り、内蔵介から渡された毒薬を井戸の中へ入れ、またそしらぬふりで帰った。

その日の夕御膳を仕立てて当日の御膳番が毒味して、何の変わったところがなかったのです、御膳を差し出した。宗辰公は何心もなく召し上がった。

さて黄昏の時分、御膳番の毒味役がひどく苦しむので、詰めている御手医師をお台所へ呼んで診させたところ驚いて、

「これはひどい食あたりで、なかなか治療はできない」とい

るところへ、宗辰公もにわかにご気分が勝れなさらない。ご近習の人々は立ち騒ぎ、すぐに医師横井之春、八木春益をはじめ数多の御手医師が御脈を診な

さるが、みな「ひどい食あたりです」と申し上げるばかり。さっそく諸役人が立ち合つて、お薬をいろいろ差し上げるが、次第に重篤になられた。諸士の面々は非常に驚いて、公儀の御手医師橘宗仙院、半井法印、武田法眼をはじめ数多の名医を呼び寄せた。名医は追々集まつてきていろいろお薬を差し上げるが、これまた効き目はなかつた。そのなかで、当時江戸一番と評判の井上俊良が窺うかがひ診して、

「殿のお病気はまさしく毒薬を召し上がりなさつたもの、もはや回復の見込みはありません」

という。まもなく宗辰は「くわっ」と血を大量に吐いて、終にお亡くなりになつた。

このようなところへ内蔵介は病中であるのに、長髪のままで屋敷に駆けつけ、大変驚いた様子で怒りの顔色でお側用人を呼び、それから段々に取り調べお台所の役人にまで詮議した。

そうこうしているうちに、御膳番の毒味役、料理人をはじめ小役人、下部どもあわせて二十三人が枕を並べて、みな血を吐いて死んでしまった。内蔵介は心中悦んで、

(さて毒薬はよく効いた)

と思つて、それから早馬の使者を立て、ご一門方を

招いた。

みな驚きなさつて、すぐにお出ましになつたが、松平出雲守(これは安芸守殿のご嫡子である)、松平相模守殿、酒井左衛門尉、南部信濃守殿、松平造酒之丞殿、前田大和守殿がご出座になつた。諸役人を残らず召し出されてご評議がある。そのとき松平相模守殿がおっしゃるには、

「宗辰中将がお亡くなりになつたことについて、変事として取り扱われることはお家のためによくない。この詮議は追つてのことにして、まず公儀へ急病の届けをするのがよい。ご息もないから、急いで舎弟達の中から一人、ご養子願いを出さなくてはなるまい」

また、松平出雲守殿が進み出しておっしゃるには、

「相模守殿の仰せのように中将殿跡目について弟君達が多くある。兄弟中いづれが太守を継ぐべき器量だろうか。なにかご遺言でもあるか」

とお尋ねなされた。家老本多、横山は言葉を揃えて、「急病のことでありますので、そのようなものはありません」

と申し上げると、ご一門方も重ねてご相談あつて、「家臣の面々も知つていることがあるならば、遠慮なく申せ。われわれは一門であるといつても、平生のこ

とはなにも知らない」

と仰せになるので、ご遺言状もないことなので、一同返答できずに黙っていた。

内蔵介の一味で香川又野丞が内蔵介に目配せして、進み出た。

「非常の時ですから、恐れながら身分の上下の差別なくかんがえるところを申し上げます。殿様は常にご学問をお好みなさり、人心を察するお方でした。ご兄弟の若様達いずれも愚かではないけれども、とりわけご三男の勢之助様の御事を、あれは生来孝心があつて、礼儀も深く、とくに器量が勝れていて、将来が頼もしく思う、とかねがねおっしゃっておられましたことは、拙者どもよく承知いたしておりましたことでございます。もつとも遺言状がないといつても、勢之助様へ跡目をお譲りになりたくお思いになつておられたように存じます」

と遠慮もなく申し上げると、内蔵介が進み出て、「又之丞殿の仰せはご尤もなことであるけれども、道理に反している。もつともその器を選んで大将にするということはあるが、それは特別な場合、跡継ぎの御男子がいまだいないゆえ、ご在国の時は仮養子にご次男亀次郎殿を但馬守殿に任官なさいました。このよう

ですから跡目は論ずることはない。跡目をお継ぎなさるのは亀次郎殿です」

と申し上げれば、ご一家をはじめ家臣の面々も「ご尤も」と同意し、評議も済んだ。

さつそく公儀への宗辰中将との急病によつて、次男但馬守亀次郎を養子にしたいと願ひ受理された。上使として堀田相模守殿がお出ましになつて、家督相違なく、次男但馬守亀次郎殿へと仰せつけられた。これでご一家方ならびにご家中の面々もありがたき旨お受け申し上げ、首尾よく上使はご出立になつた。その後またご一家がご参会あつた。御跡目滞りなく済み、宗辰公のご病氣届けも滞りなく済んだ。その後変事の詮議があるべきだといつて、評議があつた。ご逝去の折、お台所で死んだもの二十三人、そのほかご近習二人、お茶坊主三人（これは料理は食べなかつたが、お台所のお茶を呑んだため、夜に入つて血を吐き同じように変死した）。これはただごとではない。まつたくお台所は毒だらけといえよう。みんな舌を巻き身の毛が弥立よたつ思ひがした。

さて但馬守殿の御膳は中将殿御実母浄珠院の御殿で女中達が拵え差し上げようということになり、表ではお茶さえ召し上がらない。この度のことはどのような

者の仕業か、いかなる謀略とも全くわからない。だから詮議もどうしてよいかわからず、ご一家の松平伊勢守殿がおっしゃるには、

「この度の中将殿の御家督については、内蔵介が申す内容が衆にすぐれていた。この詮議を内蔵介に申しつけてはどうか」

ということ、内蔵介に吟味役を仰せつけられた。

内蔵介は「畏まりました」とそれより茶の間、お台所、御膳部等、その他の器物、御膳部一々検分して思案に余る様子で諸役人を集め評定して、

「この度の大変にあたりさまさまに詮議してきたが、一向に埒があかない。こういう場合はもしかしたら、儒者岩永甚蔵に格別の思案があるかもしれない。甚蔵に尋ねてみよう」

という、諸役人は「いいかんがえだ」と賛成して、さつそく儒者の甚蔵を呼び出し、これまでの経緯を知らせた。この甚蔵は中将殿の学問のご師範なので、ご講釈か佐渡守殿のご質問がない以上は用のない身だから、このような大変といっても詰所でぶらぶらしていた。諸役人の招きに従って入ってきて右の次第を聞いて台所へ行き、様子を詳しく見てしばらくかんがえていた。一味だから前から知っていることなのに学知を

絞ったようなふうで役人向かって言うには、

「わたくし熟々とかんがえますに、食物に入っていた毒ならば、なかなかこのように大勢が死ぬものではありません。これはきつと水のなかに毒が入っていたのでしよう。御膳井戸の水を汲み上げて調べてみない」

言うところに従って、板橋お屋敷の牢の死罪の咎人を二人引き出して、かの井戸の水を吞ませてみた。甚蔵がいった通り、はたして半日ほどたつて血を吐いて死んだ。役人はこれを見て、はたしてこの井戸に毒があつて大勢死んだものだろう、このことをご一家に申し上げると驚きなさつて、「井戸の中に毒気があるとは信じられない」とまたまたご参会あつて、評定になった。甚蔵が申し上げるには、

「地中に毒気があることは昔から和漢にその例が多いことです。よくよくかんがえますところ地中のなかの毒気が井戸の水へ滲み出たものではないかと思われませう」

と故事を引いて弁舌を振るって申し上げるので、ご一家方をはじめ諸役人中も『なるほど』と納得する。これにて評議も済んだ。

しかし思慮分別のある人は不審は晴れないと思うけ

れども、口を閉じ差し控えた。

その後お台所の諸道具を残らず打ち砕き、かの井戸は埋めて平地としたことである。誠に内蔵介が悪逆が段々と成就する。内蔵介はあともうひとり太守を毒殺するばかりだといって、悦び勇むのはなんとも言いようがない。

このような江戸表の一大事を早打ちで、国元へ注進があつた。ご一家中たいそう驚き上を下への大騒ぎとなつた。それで大老並びに年寄の評定がはじまつたなかに、前田土佐守は近頃病氣と称して引き籠もつていたけれども、今度の変事の注進を聞くと同時に、早馬で金沢城の大手先までただひとりで乗りつけた。登城し諸士に向かつて言うには、

「先君吉徳公の御時危うきことがあつたが、内蔵介がこれを見出した。またこの度の宗辰公の御変死の様子から正しく当家に野心を抱く曲者があるのだろう。かくなるうえは不肖わたくしが江戸表へ参上して今回の事件を糾明しましょう。しかし国元のことでも大事でございまして、各々気をつけて夜昼油断なくお城を堅め守護しなさい」

と申し渡し、前田対馬守、同じく大学横山蔵人を伴い江戸表へ急いだ。

まもなく本郷の屋敷に到着して、当太守少将重瀧公へお目見えを済ませ、先君のご逝去をお悔やみ申し上げ、それより内蔵介を始め江戸詰の諸役人に会合して、この度の次第をなお詳しく聞いた。

「先君吉徳公を毒殺申し上げんとすると、内蔵介がこれを見出し、ご難儀を救い申し上げた。またこの度の宗辰公のご逝去なさいましたことは、毒害に決まつておる。その仔細は地中に毒気あるといつても、清水の急に毒水となることは聞いたことがない。このように言えばなにやら甚蔵殿の言葉を貶すようだけれども、各々もご存じの通り御膳用の井戸は特別に注意して、吟味に吟味をして地中水底に井戸の輪を入れたのだから地中に毒気あつても、そう簡単にこのような科があるとも思われない。もつとも他より毒が入り込むようなことはあり得ない。まったく大事を企む曲者の仕業に相違ない」

内蔵介は土佐守の言葉に心中驚いたけれども、顔色も変えず、

「あつぱれな土佐守殿。お言葉はまた格別でございませぬ。一々に領けることでは間に合いません。この詮議まなかわたくしのかんがえでは間に合いません。よつて内々吟味いたすといつてもこれぞという慥かな手がか

りというものがないのです」

と挨拶に及んだ。

さて一ご家中の者は土佐守が出府なさったのを幸いとお思ひになつて、ご会合をして土佐守におつしやるには、

「但馬守殿はご若年であり、大切にしなければならぬ、それにつけて内蔵介は諸事抜け目ない者であるから、但馬守殿の側に置いて、江戸詰として公儀表内外ともに内蔵介に任せよう」

と面々がおつしやつた。これを聞いて土佐守は心中思うには、

（内蔵介は下郎よりこのように立身出世して、二代の君に出頭してご一門方にまで重用されることはなまなか一通りのことでない。悪知恵が勝れている。彼の胸中を怪しく思っていたが、主君のおかんがえを憚<sup>はば</sup>つて、いままで遠慮していたが、正しく大事を謀<sup>はか</sup>る張本人は内蔵介以外にはかんがえられない。この上はたとえ彼がどのような謀略を廻らし、悪事を計画してもわたしは江戸にいるうちは決して好きなようにはさせない。まず彼の威勢を挫き、国元に遣わして、その上で心静かに悪事を見出し、ご主君の仇を報い申し上げよう）

と思つて、ご一門方へ申し上げるには、

「ご主君但馬守殿の為をお思ひなされ、段々お心を陳べられたのは誠に有難き仕合せなことです。しかしながら主君はご若年であります。江戸詰の付き人はわたくしが出府以前から選んで、この度同道してきました横山蔵人というもので、万事抜かりない老臣であります。これを君に付けさせます。また内蔵介は長々の勤勞、ことに家老格の者でございましてので国元にて休息いたさせます。わたくしは不肖でございしますが、人を選びますのはわたくしの職務でございします。決して輕はずみなことを申し上げません」

と憚<sup>はば</sup>ることもなく申し上げる。「誠に大家の老臣である」と、ご一門方も兎も角もよきように取りはからつてくれと、それぞれ屋敷に帰つた。

それから土佐守のかんがえで横山蔵人を江戸詰として、但馬守殿を守護させる。この横山というのは当家の譜代、武勇智謀兼備の武士である。土佐守のお目がねに叶つて吟味役となつて、尚も悪人が主君の側に絡まっているかもしれないと思ひこの度国元より人を呼び寄せ、今までの側近、近習その他お茶坊主に至るまですべて国元に遣つて引き替えた。これらはみな土佐守のかんがえである。

このように内蔵介は長々の勤勞御苦勞につき休息せよということ、この度国元へ帰ることになった。内蔵介は二君を殺し、

（この上は国を手に入れ、勢之助に家督を継がせ、わが威勢をご一家中に振るい、あわよくば藩政をおのが手に入れるのだ）

と意気込んでいたところに、太守のご近習としておいた一味のままで残らず国詰とされ、さしもの内蔵介も予想していたことと違つてたいそう驚いた。

（さてはかねての悪事が露頭したか）

と思つたが、またかんがえを廻らし、

（もし俺の悪事が露頭したのなら、こんな中途半端な処置ではあるまい。となれば土佐守の一存だろう。よしよしそれといつても慥かな証拠がないうちは、恐れることはない。ことにここ数年俺は江戸詰で將軍家にもお目見えお目通りして、ご老中、若年寄に至るまで懇意にしている。その俺をなんの証拠もなく勝手気ままに罪にするならば、かえつて土佐守を始め俺に敵対する奴らをごごとく反逆人として訴えてやろう。そのことはなにより厄介だと思つてはるはずだ）

とかんがえ、密かに一味どもを招いて言うには、

「この度俺をはじめ、お前たちまで国詰となつたこと

は、すべて土佐守の処置である。しかし俺はこんなこともあるだろうと前もつてかんがえてある。奥女中早瀬の局というものを俺が腹心として江戸屋敷においてある。この早瀬という者は女であるが、素敵に男勝りでなまなか事を仕損じるものではない。だから俺は味方と頼みこうこの謀事を申しつけてあるのだ」

と物語つた。われわれが国元において、ことが行われれば、人がこれに気づいたところでわれわれ以外のものの仕業となろう。一味の悪党はこれを聞いて、たいそう悦び勇んだ。「先生の企みの深謀遠慮のことはわれわれには及び難いです」と言つて、威勢よく立ち上がった。それぞれ我が家に帰つていった。

この度内蔵介が仲間と頼んだ早瀬という女は、先君吉徳公の御代に召し抱えなされた姫君方の馬術の師範として置きなされた者である。早瀬の父は湯島天神の門前で浪人していた小笠原武左衛門というものである。娘のために父も五人扶持を下された。

しばらく経つて武左衛門は病死してしまつた。二男紀十郎は早瀬の弟である。父の後を継いで劍術指南となつた。武芸のことはよく知らない癖に、血氣ばかり盛んな身持ちの良くない者で、あまりに不行跡であつたため次第に門弟も見放して、武芸教授の収入もなく

なり、ただ加賀守殿より下される五人扶持のみで生活していた。また時折姉に無心して騒ぎを起こしていた。

ある時日頃の恨みの右内に出喰わした。紀十郎は先立つての意趣を述べて討ち果たそうとしたが、右内は相手にならず、湯島天神の社内へ逃げた。紀十郎は勝ちに乗って、「おのれ逃すまいぞ」と追っかけたが、折柄湯島天神は開帳の祭りで参詣の男女で混み合っていた。「やれ喧嘩だ」と驚き、参詣人が立ち騒ぐので、紀十郎は右内を見失った。あちこち捜しあぐねていたところに、加賀殿の足軽三人連れに出会った。ご開帳の参詣の帰りで休んでいた茶屋から外へ出たところだった。紀十郎はこれを見て、衣類羽織がよく似ていて、とくに暮れ時だったので右内と見間違えた。後ろから右の肩先を袈裟懸けに三寸ばかり斬りつけた。連れの二人が驚いて、すぐに紀十郎を取り押さえ、刀を奪い取った。

紀十郎は自分の斬りつけた者の顔をよくよく見れば、人違いだったので、仰天して酒の酔いも冷めた。言葉もしどろもどろに挨拶して逃げようとしたが、取り押さえられた。加賀屋敷へ人が走った。横目役その他大勢が来た。紀十郎と怪我人を引き取って屋敷へ連れて帰り、段々詮議していたところ、人違いの者を斬りつ

けたことがわかった。足軽はどうとう死んでしまった。それで加賀殿は公儀へ訴え出て、浪人紀十郎をもらい受け板橋にて打首にした。

姉の早瀬は中老までになって加賀屋敷に仕えていたが、弟紀十郎の不届きに吉徳公は「ご立腹なさり、

「紀十郎のことは、加賀藩より扶持を遣っているものであるからこちらでも家来も同然であるのに、手前の屋敷の者を斬るとは、人違いとはいいいながら不届千萬である。よって姉早瀬も暇を遣わす」と仰せになった。

この時内蔵介が申し上げるには、

「親兄弟とはいいいながら、善悪は同じではありません。ことに早瀬は志は堅固で本当に男勝りですが、忠義な女です。その上姫君様方のご師範であります。何卒なにとぞ、ご憐憫ください。なんといいましても女でありますから、何卒なにとぞご赦免しやめんくださいますように」

とひたすら願ひ申し上げます。

お気に入りの内蔵介が言うことなのでこの度はお許しが出了た。

早瀬を御前にお呼び寄せになって、

「お前の弟の不届きについて、その方にも暇を出すのが本当のところであるが、内蔵介がかずかず願ひあげ

る所につき許して遣わす。これからも心してつとめるように」

と仰せ渡される。

早瀬は有難くお受け申し上げ、退出した。

それから早瀬は内蔵介の情を深く感じて、身に染みて有難いと思った。内蔵介はかんがえるところがあつて、早瀬に恩を着せた。

早瀬には末の弟に吉之助というのがいた。吉之助は十一歳になつていたので、親兄弟がなくて立ち寄る方もなくすこしの縁故もなく過ごしていたのを探しだして、内蔵介が世話をして早瀬方に引き取らせ、若殿方の茶坊主にした。

そして若殿佐渡守が家督を継いだ時に、早瀬は女中頭に立身し、弟は二百石下されてご近習となり、名も小笠原武左衛門と名乗り奉公した。

これすべて内蔵介の取りなしであるから、早瀬兄弟は内蔵介のためであるならば、一命を捨てても惜しくはないと常々思つていた。このようにして兄弟ともに悪事の一味となつた。

ある時内蔵介は早瀬を弟武左衛門の家へ呼んで言うには、

「この大望が成就した暁には武左衛門に五千石遣わし、

年寄役としよう。何事も勢之助様の御代となつたならば、お前たちは兄弟ともに上もなき立身を保証しよう」

といつて勧めるので、早瀬兄弟はもうなんの疑念も差し挟まず同心したのである。

内蔵介は早瀬は男勝りとはいへ女、心の定まらないこともあるうかとかんがえた。密かにお貞の方へ飛脚を立てて早瀬が一身のことを詳しく書き送つた。お貞の方より自筆の依頼状の一通を取り寄せ、内蔵介もこれに添え書きして早瀬へ渡した。「なんにせよ、太守を毒殺してくれ」と頼んだ。早瀬はさつそくこれを承諾して、どうにかして太守を毒殺申し上げようといろいろと工夫して、時節が到来するのを待つていた。まことに恐ろしいことである。

このようにして面々江戸を出発して、加州へ赴いた。そのなかでも内蔵介はまえまえから公儀へ付け届けもよろしくやつていたので、ご老中様方をはじめその他お役人方からたくさんのご進物が届けられた。ご一家中の人々はその夥しい品々に驚いた。

このようにして内蔵介は同中もことに人数を少なくして、ひそかに名聞を離れたさも実直な様子でお国入りした。屋敷に着いてからも、式目で決められた登城

のほかはいっこうに外出しなかった。昼は屋敷にばかり引き籠って憂き世を離れたようにみせかけ、夜になると一味の悪党を密かに集めて会合した。

内蔵介はどうして知っていたのだろうか。太守のご宝蔵に忍びの者を入れて加賀藩の代々の宝物五品を盗み取り、家の穴蔵へ入れて置いた。この穴蔵から抜けて道を手へおいたという。

さて加州少将は兄宗辰公のご家督をお継ぎなさつて、お家柄であるのですぐに中将に任官になった。前田土佐守が取り計らいで、横山蔵人は江戸詰の重役となつて万事心を配っている。また国元から来た人々も忠臣無二のものであるけれども少しも油断できないので、浄珠院殿（これは先代宗辰公の実母である）にご依頼して、奥において御膳部等そのほか召し上がるものはすべて拵えさせ、そこで殿が召し上がることになった。

しかし横山蔵人は常に案ずるには、

「主君を毒殺するほどの曲者であれば、奥女中のうちにも一味のものが潜んでいるやもしれない。だとすると殿の御膳部を万事女中任せにするのも心配だ」

と思つて内々浄珠院殿へこのことを申し上げると、浄珠院殿がおっしゃるには、

「そなたの心配はごもつともなことです。しかしなが

らこれまで御膳部を仕立てさせた者は、みな幼少よりわたしが側で召し使つてきたものばかりです。少しも気遣いはいらなれないと思ひますが、しかし太守も段々にご成長なさることなので、いつまでも奥で御膳を差し上げますことはできません。これからはこれまで通り諸事に気を配つて注意すれば、めつたなこともないでしょう」

といつて、これまで通りに、表の御殿で御膳部を召し上がられることになった。

さて早瀬は内蔵介と同心して機会を伺つていたが、都合の良い折はなく、どうにかして太守を毒殺しようといふ心を尽くしていたが機会はなかった。

ことにこの頃は表御殿で御膳を召し上がることになったのでいよいよもつてお側に近づき難くなつて、どうしたらよからうと昼夜工夫をしていた。

さて当太守重瀨公しげひろはご若年であるとはいひながら、心が広く情け深く度量が大きいことは御父君にも勝つていらつしやたので、賢老智臣はたいへん悦びいよいよ大切にお守り申し上げる。

かくして太守が初めてお国元へ入部の時節となつた。お国元へ入ると、勢之助お貞方へも初めてのご対面があつたが、その格式は臣下と同じであつた。それか

らご領地の名所をみなでご覧になった。その後お鷹狩の御催しがあつた。勢之助殿をはじめお二人の弟君（これは花野がお産みなさつた方である）を同道してお出かけになるといふことでご用意をした。すでに殿のお鷹狩を見物しようとご城下の男女が山のように集まつてきていた。また奥女中方も見物したが、太守には数両の輿にお供のものが煌びやかなご出立の衣装で付き従う。一方勢之助殿にはまことに少ない人数で、しかも遙かに後からみすばらしい恰好でご出立になった。お貞の方はこの様子を見物して、心にやるせなく、

「さてもさても口惜しいことかな。同年とは言いながら、太守より先に生まれ、弟に国を取られ、臣下同然の有様、甲斐もない身の上や」

と涙を流して見ていたが、それからなんとかして謀略をもつて密かに内蔵介と内通しようとするけれども、これまでと違い奥の出入りも難しくなつて、ことにこの時期の噂も憚られ、いろいろと人に知られないように手紙を送つたけれども、

「急にはどうしようもない。特に国元では毒殺に成功しても、その詮議がうるさいからどうだろう」

という返事である。仕方なくまず時節到来を待つことにした。

ある時お貞の方は勢之助に向かつて言うには、

「先頃のお鷹狩の時、太守には家老、側用人、物頭そのほか数百人の御供でありましたが、御身にはやつと二十人ばかりの供廻りで、余所のみる目もおいたわしい。たとえ賤しきわたくしが腹より産まれたといつてもお種は正しく先君吉徳公です。さぞや口惜しくお思ひになつてゐるでしょう。ご心中を推し量り申し上げます」

とわが子でありながら主君に言うようにして、涙を流して申し上げる。勢之助殿はこれをお聞きなさつて、「これは思いも寄らぬことを言うのですね。われは吉徳公の子であるといつても、末子であります。ですから家臣同然にお扱いなされるのは、さらさら恨む理由がありません。太守は兄弟の誼みをおかんがえになつて初めての鷹狩にわたくしをお召し連れになり、その場でわたくしを慰撫なされました。このようなお優しいお心がありましようか。たとえ兄であるにせよ、弟であるにせよ、太守となつたからにはわれのためには父です。ですから仮初めにもそのようなことをおかんがえになつてはいけません。そこもと女ですから、そのような心得違いもあるのでしょうか。これからは万事慎んで、ちよつとしたことでも太守を粗末に思わず

お大切におかんがえください。召使いの者の聞くとこ  
ろも憚はばられます。早々にお部屋に帰りなさい」

と厳しく意見された。お貞の方はどうしようもなく  
て、とりわけ不機嫌になつて自分の部屋へ戻つた。

勢之助殿は生来真面目で、義理に篤いご性格であり、  
いつもご家中はもちろん農民に至るまで、少しの無礼  
があつても咎め立てなされない。ひとえに人徳を施し  
なざるから諸人は悦んだという。また武芸はご兄弟中  
も勝れなさり何一つご不足のないご器量の方であつた。

このようにしてその年も過ぎて、宝暦二年七月太  
重しげ熙ひろ卿には江戸ご参勤あつて、ご隠居浄珠院をはじめ、  
ご実母お菊の方へもご対面がある。賑々しくご祝儀が  
あつていいようもない。

ここで早瀬の局はこの機会を幸いと心を配つたけれ  
ども、太守はいっこうに御奥にて御膳を召し上げらな  
い。

頃は八月十五日夜、名月の御寿嘉例であるからとい  
つて、家老、要人、物頭をはじめ御前へ出仕しご祝儀  
があつた。それから夜もすがらの御酒宴である。十六  
日の夜はご隠居浄珠院の御殿へご入御あつて、ご酒宴  
があつたが、御膳部すべては御表の御膳番より仕立て  
て差し出し、ご給仕の時お手廻りの女中に毒味させた。

ご配膳はお菊の方自身が差し上げなざる。しかし早  
瀬は今宵決行しようと思つて、早朝から心がけていた  
が、人目を見合わせお茶の間へ入り、茶釜の中へ用意  
してきた毒薬を入れた。そしてなにくわぬ顔でその場  
を立ち去つた。

早夜に入つた頃で太守はご自身でお茶の間にお出ま  
しになつた。浄珠院殿をはさっそく太守の召し上がり  
なざるお茶を、お手廻りの女中に毒味させた。

先ほどより毒は煎じ詰められていたので、女中は  
「うん」と言つたまま、すぐに悶絶してしまつた。浄  
珠院殿をはじめ女中方はたいそう驚きなさつてすぐに  
横山蔵人を呼び寄せ、当番のお医者が駆け付けいろい  
ろと治療をしたが、女中はすぐに死んでしまつた。無  
残なありさまであつた。

蔵人はこれを見て、さてさて浄珠院がお気づきなさ  
らなかつたら殿様の御身は危うかつた。きつと吟味致  
そうと言つてそれから今宵のご酒宴を中止して、奥女  
中を残らず一間へ押し込めた。入口に捕手の役人を廻  
しその日茶の間へ入つた女中、お茶を仕立てた女中ま  
でいろいろ呼び出して糾問した。女中は言うことが同  
じである。訴人に申しつけてお茶の間へ来た女中を吟  
味していると、早瀬の局がお茶の間へ入つたのを見て

いたものがあつた。蔵人はさつそく早瀬を呼び出して言うには、

「そこもとは先刻お茶の間へ来られたということだが、そこでなにか怪しいことはなかつたか」

と尋ねると、

「わたくしは女中の支配を致しておりますので、お茶の間にも誰かおられるかと、戸口の襖から覗きましたところ、先ほどのお毒味致した二人の女中がお茶を仕立てておりました。さして怪しき様子も見受けられませんでした。いかにも女中のうちのものでないと近寄り難いお茶の間で起こったことですから、女中方を残らず厳しく詮議すれば犯人は知れましょう。わたくしも女中を監督する身分の者ですから、及ばずながらご協力致しましょう」

と申し上げる。その時蔵人はしばらくかんがえて、

「そこもとは大奥の女中頭ではないか。君のご簾れんちゆう中をはじめ、おめかけ、その他大勢の女中方を預かる身分である。この御殿はご隠居浄珠院の支配のうちであればそれがなんの御用で今宵お茶の間の詮議、納得できない。誰に頼まれてそのような世話を致したのだ。なんとも疑わしい。女中頭といつても容赦はしない。それ者ども」

声をかければ、捕手の二人が左右より「捕った」と言つて、早瀬の手を取り引き立てようとする。「これは無礼なり」とうちか襦か襦かをひらりと脱ぐより早く、後ろへ引き下がつて身をひねり隙間につけ込む。あつという間に捕手の役人を膝下しづかに敷いて身動きさせない。手も思うようにさせない。早瀬は怒れる気色である。

「殿のお目がねに叶つて当役を勤めている。わたしが言うことはそのまま太守のおかんがえである。詮議については女といつても容赦はしない。身に覚えがあるから手向かいするのであるう。さもなければ要らざる働き」

とひどく叱りつけ、そのまま召し捕つた。その他の女中六人を縛しばめ、一間に入れ置く。役人に命令して女中の部屋々を搜索する。所持の道具はもちろん長持、たんす箆す箆すに至るまでその他箱、手道具までいろいろに調べてみると、早瀬の部屋から黒塗りの箱が一つ出てきた。その箱を検めるとしつかり封をしたものがある。二月堂のお守りと書きつけてある。蔵人が封を開けてみると、なるほど二月堂のお守りであるが、そのまた中にまた封をしたものがある。これを開いて一目見るなり、「さてさて、これでもはや詮議は要らない」

と蔵人は書き付けを懐中にして、急ぎ御前へ参上し

て密かに申し上げる。それから早瀬一人を残し他の女中の縛めを解き、

「このことは極力隠密のことである」

と口止めして家来に諸事を申しつけて、それからお国元へ早飛脚を立てる。また江戸屋敷で詮議をすれば、世上に洩れ人の噂にもなるからと、早瀬を乗物に入れ、齒を全部抜いて大勢で取り囲み、目立たないようにお国元へ送った。早瀬は宿々に着いても一切食事をしない。そこで重湯を口にねじ込み、無理に流し込んだということだ。

このようにして江戸屋敷の早打ちが国元へ到着した。土佐守は書状を開いてみて、

「さて、わしが推察していたことは間違いなかった。悪逆の張本人が分かった。太守がご難を逃れたのは天の助け、ありがたいと悦ばしいことだ」

と書状を押し戴き天を拝し地を拝み、悦び勇んだのも無理がない。

それからすぐに登城して譜代の諸士を呼び集める。

右の通りのことを申し聞かせ、物頭二人、足軽二百人、捕手五十人を評定所のうしろに廻して置いて内蔵介方へ横目役石野作十郎を使いとしてやる。

「今日江戸表より殿様急病と連絡がきた。よって家老

中、年寄密談の上ご家中へ披露したいので登城せよ」と申し送れば内蔵介はこれを聞いて、(さてはかねてのことが成就した)とたいそう悦んで、「委細畏まりました」と答えてすぐに登城した。

大廊下から伺候の間へ行こうとしたところに、両側から西尾左衛門、乗木左内が組みついてきた。この二人は金沢でもよく知られた力持ちで、しかも武芸の達人であった。かれらはそのような役ではないのだけれど選ばれてここで内蔵介を待ち受けていた。左右より「御意でござります」と声をかけて、内蔵介を引き据えた。

思いがけないことであつたので、さすがの内蔵介もはつと仰天した。大力の者に引き据えられてはどうしようもない。また殿のご命令でもあるので背くことはできないけれど仔細を一通り伺いたいと言えは、

「なんの仔細か分かりませんが、江戸表より殿の御命令で禁籠せよとのことですよ」

と言つて、そのまま内蔵介は刀の大小をもぎ取られて、高手小手に縛られ坊主部屋へ押し込められた。番人を多くつけられた。また内蔵介の供の侍共も侍所へ廻されて、残らず召し取られた。それから内蔵介の屋敷へ使いを立てて、侍の身分のものは五人、七人ずつ

呼び出されて一々に召し取られた。足輕は内蔵介の屋敷の外を固め、飛び道具でもって取り囲んだ。抵抗するならば討ち取ろうという勢いに、さすがの内蔵介の荒くれ者も、お上のご威光に恐れ畏まった。女中共も一カ所に集めて押し込められた。それから家財道具もみな調べたところ、思った通り一味の者共の蓄えていたたくさんの武器が出て来た。

さて土佐守は大広間へ諸士を集めて言うには、  
「このたびは江戸表より早打ちの注進がきたわけは、先立って申し聞かせた通りである。その張本人が分かつた」  
と言うなり、懐中から一通の書状を取り出した。

「この度お茶の中へ毒を入れた者は、早瀬の局である。してその張本人はお貞の方と聞いていいが、悪事を勧めたのは内蔵介と判明した。その証拠がここにある」と書状に曰く、

「一先だつて頼みました件、その方の働きで大望成就した暁には、弟武左衛門に五千石下されるように取りはからいしましょう。またその方は立身は望み次第である。後日の為にこの一件を認めます。

年号 貞 印 早瀬の局殿

右の通り仰せつけますから、油断なく忠勤せよ。内蔵

介 印

これを見て人々はたいそう驚き、さてはお貞、内蔵介と二人が企むことであるけれども、また勢之助殿も同意なさっているかわからない。またご家中にも一味のものがどれくらいいるかわからない。みな驚き騒ぐ。土佐守はこれを聞いて、

「まあまあ、静まりなさい。あまり驚くことではない。張本人の内蔵介始め家来はすでに召し捕つてあることだから心配ない」

というところへ、大目付が来て内蔵介の連判状を密かに渡した。土佐守はこれを見てたいそう悦んだ。それから家老、要人、年寄中と評議して秘密裏に会議をした。身に覚えのない者まで心も空になったということだ。その頃江戸表でも早瀬の弟の小笠原武左衛門が召し捕られ、国元の早瀬は禁獄となった。

さて金沢のお城では、前田土佐守が諸士を集めて、たびたび評定をした。弟君勢之助殿に対しても厳しい意見が出た。

「この時に限らず先代からの悪事はすべてお貞殿と内蔵介の両人の仕業であるといつても、勢之助殿を藩の太守につけようとしたことから起こつたこと。たとえ太守の兄弟といつても、この度の一件では捨てて置く

わけにはいかない。しばらく籠居なさるべきだ」

この一件を長九郎左衛門をもって勢之助殿に申し上げた。勢之助殿は初めてこのことを聞き、たいそう驚きなさってしばらく返答もできない。ややしばらくあつておっしゃるには、

「さてもさても思ひも寄らぬことである。まったくそのような悪心はないといつても、内蔵介が実母を勧めしでかしたこと。お貞は女心に浅ましさにわれを世に出さんと、一筋に思い込み、加担してこのようなことになつたのだ。まことに非道なことである。やむを得ないことであつた。したがつてわれは切腹するのは容易いけれど、本心に反逆心があつたから驚いて自害したので世に批判されるのも残念である。なにとぞ本心に一物もないことを太守をはじめ家中のものにもよくよく申し開きがしたい」

九郎左衛門は「心中を察して、  
「ご尤もな仰せではございます。天道は明らかです。やがて仰せ訳も立つ時が来ましよう。しかしながらひとまず、ご籠居なさつてください」

と言つて、小立野石川町天徳院の塀外に座敷牢を急ぎ建て堀を二重に掘つてそこに押し込めなかつたのは、まことにおいたわしい限りであつた。

さてお貞の方の、堅町というところに座敷牢を造つて押し込め置いた。

また内蔵介は金沢を隔てて五箇山というところに土の牢を造つて入れ、侍八人、足軽六十人警護につけて厳しく番をした。その他一味の者ども、二百人余人段々に召し捕つた。

その中で、川勝平次左衛門は錠口番より錠奉行まで立身して、三百石になつた。内蔵介の腹心で一方の大將と頼りにしていた者だが、この頃は病気で伏せつていたところに、捕手の者共二十人すたと向かつてきた。思ひも寄らぬことなので家内の男女はたいそう狼狽え騒いだが、平次左衛門は周章せず、  
「兼ねての大望露頭したと見える。よしよしこの上は腕の限りに斬り廻り、死人の山を築こう」

と病中ではあるが枕元の三尺二寸の刀を取り、乱れ髪に鉢巻をして仁王立ちになり、捕手の近寄るを待たつた。

一番手に林藤五太が、  
「御意です。捕つた」

と言つて、組み付いてきた。平次左衛門は掴んで、二間ばかり投げ飛ばす。

二番手の落合太郎左衛門、「捕つた」と飛び掛かる

のを、「はい、承知した」とばかりに、抜き打ちに袈裟懸けにぎっくりと斬る。

三番の捕手中山権九郎が隙を伺って組み付くのを、振り放して踏み飛ばす。それでも寄り付く所を、踏み込んで額の真ん中を打ち割った。

捕手たちはこれを見て、「一人ずつでは叶わない、大勢で一度に寄せん」と、てんでに十手を振り立てて、ばらばらと取り巻くのを、平次左衛門はものともせず、悪鬼の荒れ狂うような勢いで、太刀を額に差し翳し、寄せ来るものを散々に打ち伏せ、薙ぎまくれば、すこしの間には死人の山ができた。捕手の者共は、これは敵わないとさつと引き退き、加勢を頼んだ。

平次左衛門は思いのままに働き、

「とても生き延びる望みのない命だ。最早これまで」

と、血に染まった刀を口に咥え、俯せになつて刀に貫かれて死んでしまった。

それから加勢が追々駆けつけて来た。また大勢になつて、「捕った、捕った」と一間へ乱れいったが、もう平次左衛門は自殺していた。捕手はどうしようもなく、死首を打ち落として帰った。

誠にこの平次左衛門は悪人とはいへ、武芸の達人であった。とくに太刀を取っては比べようがない才覚の

持ち主で、早業などはまったく一騎当千の兵と言つてよいだろう。

さて儒者岩永甚蔵は悪事の露頭を知り、(もうこれはどうしようもない)と思つて密かに自分の屋敷を抜け出したが、余りに狼狽えて路銀を忘れた。途中で思い出しこれはだめだと思い、城下の木綿屋の藤兵衛というものがいたがその店に立ち寄り藤兵衛に対面して、「急に必要なことができて、なんとか金子五両ばかり貸して頂けないか。もつとも二三日中に返済する」

と言つた。藤兵衛はこのような事情とは知らないで、また儒者のことであるから間違いないと思つて、金子五両を用立てた。甚蔵は大変悦んで、「ありがたい」と一礼して、そこを飛ぶようにして逃げ出した。

城下を離れようとしたところが、この時土佐守のご命令で城下の出口に隠し目付を出して見張らせていた諸士で怪しい行動の者があれば、すぐに捕らえよとのことである。そのほか出入りの者を吟味致せという命令で、足軽十人、領内の境に隠してあつた。そこへ彼の甚蔵が通りかかった。目付が声をかける。

「それへお通りなさるのはまさしく岩永甚蔵殿とお見受けした。慌ただしくどこへお出かけなさる」

と咎めたところ、甚蔵はみるみる青くなつて、

「わ、わたくしは急用ができて、江戸表へ参上いたします」

と言ひ捨て、逃げるように足早に通り過ぎようとする。目付の命令で隠れていた足軽共數十人が、そこかしこからばらばらと駆け出して来て、甚蔵を取り囲んだ。目付が進み出て、

「そこもとは江戸表へお出かけになるなら、どうして供人を召し連れられないのか。また旅装束でお出でになるはずのところは何故編笠にて顔を隠してお通りなさるのか。まったくわからないことです。申し開きがあるのでしたら土佐守殿の御前で言ってください」

と言うより早く、大勢でかかって引き立てた。甚蔵は一言もなく赤面しておめおめと召し捕られた。

内蔵介の一味の悪党を一人ずつ拷問したが、いまだに白状した者がない。甚蔵はいろいろな責め道具を見ただけでひどく震えだし、内蔵介の悪事を残らず白状したので土佐守はひどく笑い、

「さてもよく言ったな。流石は儒者だけある。あつぱれ驚き入った」

と嘲笑する。甚蔵は面目なげに顔を上げて、

「このように残らず白状申し上げたのだから、なにとぞ命ばかりはお助けください」

と涙を流し、嘆願した。

土佐守は甚蔵の顔をつくづく眺めて、

「その方は聖賢の道を教える身として命を惜しみ後世の恥を省みない心は畜生同然と思うけれども、その臆病ではなまなか切腹もできまい。よって悪人共と一緒に縛り首を申しつける」

と申し渡したところ、甚蔵は「はっ」とばかりに腰が抜けた。皆で立たせ獄屋へ引つ張つていった。

早瀬の局は横山蔵人の指図で国元金沢へ送られ、土佐守が受け取り厳しく禁籠申しつけた。日々引き出し拷問したけれども、一つも白状しない。そこへ岩永甚蔵がすべて白状してしまったので、もはや拷問は必要なくなった。家老、要人、年寄の面々評議の上、逆臣ことごとく重罪にすることになった。けれども土佐守の意見で張本人内蔵介を始め首謀者格のものには重い罪にして、その他のものは軽い仕置きにすることに改められた。

早瀬は蛇責めとなった。

大きな瓶の中へ早瀬を入れ、首だけ出して瓶の蓋を張り、蓋をして錠をおろし、足は瓶の底へ届き、中腰になる。瓶の蓋に穴を開けここから数百の蛇を入れ、悪身に巻き付くところへ、後から酒に塩を交え穴より

流し込む。数百の蛇は苦しみながら瓶のなかで暴れ、早瀬が身を突き通す。早瀬が苦しむありさま泣き叫ぶ声響えようもない。心柄とはいいながら女の身として浅ましきことであつた。

内蔵介は五箇山の土の牢で鋸のぎりび引きの刑に行うことが決まっていた。ところがどうして持っていたのだから。小刀で自身の舌を切つて死んだ。

翌朝牢の外から番人共がこれを見つけて、たいそう驚き土佐守に訴えた。その後死骸を鋸引きにした。この時内蔵介が小刀にて自殺したことは番人共の中に一味のものがいて、自殺を助けたのではないかということであつた。

この頃太守のお鷹狩の餌を刺すものが来て、この山であちこち小鳥を刺すことが度々あつたが、番人の者も太守のお鷹狩の御用であるからさして警戒しなかつた。度々来たので番人も仲良くなつて話などした。内蔵介が入つた土の牢の側らに諸木が叢むらがつていてところがあつた。ここで彼の餌刺しが小鳥を刺していた。番人の隙間を伺い紙に小刀を巻き入れ牢の中に投げ入れ、死を勧めたらしい。知るものはなかつた。その後この餌刺しは逐電ちくでんした。これも内蔵介に恩を受けた者であるらしいと後々言われた。

さて、その他お仕置きもの者どもの氏名は、

香川又兵衛

岩永甚蔵

平野助太夫

矢島為右衛門

杉山善太夫

小野沢龍三

戸沢五郎兵衛

中村一助

右七人は縛り首。

青山佐吉

早水喜惣太

右三人は切腹。

その他二百余人追放。国払いに申しつけ、終わった。また井戸へ毒を入れた小見山文左衛門は江戸深川で町人となり水油を売つて渡世していたが、尋ね出されて国元へ送られ、左の通りの刑になつた。

これは鈍き刃引きでなぶり殺しにして、身の皮だけに疵きずをつけ、血まぶれにしたのを野原へ引き出して、素っ裸のまま木に縛りつけ、鳶、鷹の餌としたという。

打首獄門

鳥居又助

これは太守の馬が川を渡りなざる時、馬の脚を斬つた者である。

さて内蔵介の妻は前田修理の娘で一子あるが、親元へ引き取り自害させ、申し訳とした。

修理は一味でないことは明白であるので、閉門で済んだ。

お貞の方はその罪は重いつても、勢之助殿の実母であるから死罪にはできず、一生座敷牢に入れることになった。

早瀬の蛇責めをお貞の方に見せたが、早瀬が苦しむのを見て耐え難く、それから病氣となって程なく死んでしまった。早瀬が刑はお貞の方の身替りであった。

さて内蔵介の屋敷を取り壊してみると、穴倉から御家の宝五品が出てきたので、なお土中を掘り返してみたら何も出てこなかった。これでこの一件も落着した。

それから但馬守殿はこのような大難にお遭いなさったのであるから、百年のご寿命を保ちなさるのに違いないと思われていたのに、宝暦三年の春からご病氣に罹られ、夏に至つてついにご逝去なされた。

御子がなかったので、四男伴次郎殿(花野の産んだ子である)に家督を譲ろうとしたが、その秋のはじめ麻疹が流行つて、伴次郎殿も麻疹に罹られご逝去なされた。

った。

うち続き御不幸があつたので、領民はたいそう心配した。江戸表土佐守が参上して万事取り計らい、五男重靖公(これも花野の産んだ子である)をご家督となし申し上げた。

勢之助殿は三男であるから、四男伴次郎殿が家督を継ぎなされると聞いて、無念にお思いなされていたところ、今度は五男重靖公が太守となり加賀の少将となつたのでたいそう憤りなされた。

「われは妾腹といつても、まさしく吉徳公の三男である。聊かも誤ることがないのに、一度悪党どもの企みで悪名を受けたといつても、われに罪がないことは明白である。であるのに陽も差さない一間へ押し込めて置いていまだ赦しもなく、そのみならず二度までも弟どもに国主となられては、もはやわが身は一生このようであるのだろう。さてもさても不屈きな家老どものやり方、この恨み晴らさで置くべきか」

と無念、口惜しと歯を噛み、怒りの御目に血を濯ぎ、髪も逆立ち、物狂わしく躍り上がり、飛び上がり食事を数日絶ち狂い死になされた。誠にお勞しい御身の果てであつた。

不思議なことには、勢之助殿の亡くなった一間のう

ちは黒い煙が充満して、四五日の間は消えもしない。その怨念は言いようもない。

それからご菩提寺のうちの元昌庵へ葬った。勢之助殿三回忌に当たると宝暦九年四月十四日この庵から出火して魔風が強く町家ごとごとく焼失し、なおも金沢城をはじめご一家中夥しく焼亡した。

それで領民達はみな離散するもの数を知らない。万民たいそう難儀したところに、当太守重靖公御仁心あつて、領民を撫育し、諸士を集め恵みなさつたので、昔に変わらぬ国が治まって、お家はますますお目出度く榮えなさるだろうと、みな賞賛したという。

(了)

## 解説

### 一 『世人不知物語』と『見語大鵬撰』

『世人不知物語』は加賀騒動を題材とした実録体小説である。『見語大鵬撰』とほぼ同じ内容であり、『見語大鵬撰』の一異本とかんがえられるものであるが、内容に独自の本文を含み、『見語大鵬撰』の本文の流

動をかんがえるうえで重要な伝本である。論述されたことのない本なので、『見語大鵬撰』と異なるところを摘記してみる。

○「月明文庫」上段と『見語大鵬撰』の違い

(巻数 題目上段『世人不知物語』)

【内『見語大鵬撰』

『世人不知物語』 『見語大鵬撰』

・序に漢文なし

【序に漢文あり】

(注)狩野文庫本、筆者架蔵本ともに漢文の序文はない

(巻一)

「前田家由来並武芸の女を召抱らるること」

・前田家の先祖は藤原氏【前田家の先祖は菅原氏】

(注)筆者架蔵本は先祖藤原氏、狩野文庫本は菅原氏

・秀吉の妻の「おみな」【秀吉の妻の名「おさみ」】

【秀吉の三面大黒天を盗む話】

・利家加州金沢城に籠る

(巻四)

【利家越州府中の城に籠る】

・松平安芸守御立腹に付谷崎主殿切腹の事」

・谷崎主殿の切腹の場面あり

【谷崎主殿の切腹の場面なし  
切腹の事実のみ記す】

・村井与三左衛門非道並石川郡百姓一揆事」

・吉田宅右衛門は作改奉行

(注)筆者架蔵本は「作改奉行」、狩野文庫本は一箇所

「作改奉行」するが、あとは「改作奉行」

【吉田宅右衛門は改作奉行】

・与三左衛門殺される【与三左衛門殺害記述なし】

(巻八)

・大槻内蔵介帰国に付早瀬の局成立の事」

・女中頭早瀬

【女中頭浅尾】

(巻十)

・内蔵介自殺付り国家繁栄の事」

・銀札のことなし【銀札のことを載せる】

特に大きな違いと思われるものを列記した。

『見語大鵬撰』のほうだが、史実により近い記述になつていふと思われる。

前田利家と柴田勝家の連合軍が秀吉に負けて逃げ帰つたところを『世人不知物語』では「加州金沢城」に籠るとするが、「これは越州府中の城」に籠るとする『見語大鵬撰』のほうが正しいだろう。また蛇責めで有名な箇所のお局の名を『見語大鵬撰』は「浅尾」とするが、『世人不知物語』は「浅尾」のところすべて「早瀬」とする。この「早瀬」に関しては高橋圭一氏の御論考に「浅尾」を「早瀬」とする写本が存在することが報告されている(実録『加賀騒動』の諸相々『北雪美談金沢実記』以前く高橋圭一昭和六十三年十月発行『國語と國文学』第五十七卷第十一号351号)。高橋氏はこの早瀬を浅尾とし、末尾に銀札のことに触れる『見語大鵬撰』諸本を古態本とするが、筆者はこれを逆に、銀札のことに触れない『世人不知物語』のほうが古態本なのではないかと推測する。なぜなら、銀札の話などこの話の本筋とは全く関係ないし、宝暦の大火が勢之助の祟りであったことで話はまったく尽きてしまっているからである。もし銀札のことを触れ

る理由があるとすれば、土佐守を宣揚するねらいであるろう。しかも敵役の内蔵介と勢之助が滅んだあとでは、この称揚の仕方は間が抜けている。これは蛇足というものだろう。もともとなかった話なのではないか。後出の本がこれと必要ないと削ったというよりも、『世人不知物語』のような銀札の話がないものに、より土佐守を称揚するために、銀札のエピソードを付け足したと考える方が、妥当なのではないか。

また『世人不知物語』は月明文庫、筆者架蔵本ともに吉田宅右衛門を「改作奉行」であるところ「改作奉行」であるとする明らかな誤りを犯している。狩野文庫本は一箇所のみ間違えている(本稿口語訳では「改作奉行」と改めた)。史実に明るい『見語大鵬撰』編者がこの明らかな誤りを放置する筈もなく、「改作奉行」とあったものを「改作奉行」に修正したのではなかったか。

また『世人不知物語』では前田家の先祖は藤原氏とするが、『見語大鵬撰』では菅原氏とする。『国史大辞典』(吉川弘文館)によれば、利家の時より菅原氏とする説があり、『寛永諸家系図伝』で菅原姓を公称しているとするが、一方小瀬道喜(甫庵)は藤原氏と説いているとする。

『見語大鵬撰』は、冒頭にみられる漢文の序文、主語の明示化、具体物の列記、前後照応させんがために筋を優先する意思のあらわれなどをかんがえると史書を参看して知的に集大成された感がある。『見語大鵬撰』と『世人不知物語』の成立における前後問題は簡単ではないが、『世人不知物語』のほうに古態である面影があることを指摘しておきたい。話としては筆者はより『世人不知物語』のほうに魅力を感じるのである。

例えば、大槻伝蔵の最初の毒殺事件で、御膳番や毒味役たちが班はんみょう猫入りの殿様の御膳をそれとは知らずに食べる場面で、『世人不知物語』は、

御茶の間へ四人を召されて、御膳を下されければ、四人共に悦び、かの御汁を少しづゝわけて、外の汁にまじへ、麦めしに打かけ、坪皿、焼物、向付のなます、香物に至る迄、ことごとく食し、「身に余りありがたき仕合せ、是と申も長玄どの御指出口故と、近比忝く、此次に長玄どのの御りやうり我々ひとくちづゝ調味仕らん」と四人はあざわらひて、残らず喰仕廻、しばらく過ると不思議や、四人の者共俄に顔色へんじ、御鉢をふるわし、のふらんし、「あゝ苦し」ともだへ廻り、見て居る内に血を悉く吐き、狂ひ死に相果ける。とある。『見語大鵬撰』では「このところ、

「御茶の間にてもりたる御膳を、吟味役、御膳番、配膳方、料理人以上四人へ下されければ、いずれも悦び、麥飯へ汁をかけ、坪、平、焼物、膾・香の物に至る迄、悉くわけて服しけり。中にも料理人甚太夫申しけるは、諺に毒を喰はゞ血をねぶれと申せば、怪しからぬ証拠斯くの通りと、御膳、皿残らず指にて撫で廻し、悉くなめけり。不思議や暫く立つやいなや、四人の者共色変じ、御躰をふるはし悩乱し、あらくるしやともだえ、血をはき即死しけり。」

とあり、動作の主体である主語が明示されて、具体的な叙述が目立ち、筋がはっきりする構造となっている。しかし『世人不知物語』の誰の発言かわからないが、「身に余りありがたき仕合せ、是と申も長玄どの御指出口故と、近比忝く、此次に長玄どのの御りやうり我々ひとくちづゝ調味仕らん」という発言は、結末を思えば効果的な叙述といわなければならぬだろう。

『見語大鵬撰』は筋をはっきりさせるためか、重要と思われる挿話を落としているように思われる。あるいは『世人不知物語』がその素つ気なさに耐えかね、ない場面を付け加えたものか。無事の谷崎主殿が切腹する条では、『見語大鵬撰』は、事実のみを記述する。

「(谷崎主殿は)私宅へ退き、喜兵衛を呼び出し遺言

を伝え、いさぎよく切腹しけるは、残念なりし次第なり。」

と切腹の事実のみを伝え、具体的に切腹する場面はないが、『世人不知物語』は、

「夫より主殿は喜兵衛を呼び出し、国元父将監方へ委遺状を認め遺し、又喜兵衛に国光の刀に金子百両形見として遺候。諸事無残言置、扱其身は湯を遣ふて身を清め、年月相なれし妻の義は弟谷崎清八郎に世話頼むとの一通を残し置、夫より仏間に入、心静かに覚悟を究、惜や、三十八才を一期として腹一文字に搔切、返す刀にてふへのくさりをかき切て、いさぎ能相果たり。」

哀切かつ具体的な場面の叙述がある。

同様に吉徳公から家老村井主膳の妹を内蔵介の嫁にという話があった折り、『見語大鵬撰』は主膳の妹の言葉というものを載せないが、『世人不知物語』では、兄に反論する妹の言葉を載せている。

「扱々思ひも寄らぬ迷惑成仰を承もの哉、凡女たるものは、高きもいやしきも一度嫁する時は、善悪共に夫に任せ心に随ふ事申さずとても御存の事、然るを私手便を以て身持ふつゝかにして放埒にいたし候共、誰か一人手便也と申べきや。却而不義の悪名を受、諸人

に笑われ候事、いか計かなしく候間、何卒此縁組は御  
変替え被下べし。」

堂々と女の道を説き、兄に意見している。また文学的  
効果をかんがえたと谷崎主殿の切腹の場面と同様、『世  
人不知物語』の記述の方がすぐれていると言えそうで  
ある。

石川郡久安村の一揆で、百姓たちが大庄屋宅を襲う  
場面がある。『世人不知物語』では大庄屋与三左衛門は  
百姓たちに惨殺されてしまう。

「与三左衛門を案内としても村々へ捕手の役人大勢  
向ひければ、百姓共、「与三左衛門来る」と聞爰かしこ  
から五十人、三十人づゝかたまり来り、『与三左衛門を  
逃すな』と言より早く、終に与三左衛門を打殺しけり。  
捕手の者共是を見て、『不届千万百姓共一人も余さじ』  
と向ひけれ共、百姓共事ともせず、得物々にて打て打  
掛り、捕手共をさんざんに打伏なぎ伏ければ、捕手共  
大いしそんじ、武器を集取られ疵をかふむりさんざん  
な軀にて逃帰りける。」

とある。ところが『見語大鵬撰』では、  
捕手の役人与三左衛門に案内させて、村々へ向ひけ  
るに、百姓共与三左衛門が来ると聞くよりも猶も憤り、  
五十人百人づゝかたまりに成り、捕手をふせぎ手む

かひける故、役人共大にしそんじ、武器を取られ疵を  
かふむり逃げ帰りける故、

とあって、与三左衛門が殺されたかどうかは書かれて  
いない。しかしここは殺された方が、より文学的效果  
がある。

また大変猟奇的な場面でのちの歌舞伎とか、講談本  
に影響を与えた「浅尾の蛇責め」として有名な話が、  
『世人不知物語』ではすべて早瀬となつとおり興味深  
い。『世人不知物語』の「蛇責め」の箇所を示すと、

「早瀬は蛇責ら行ひける。大き成瓶の内へ早瀬を入、  
首計出し瓶の蓋をはり、ふたにして錠をおろし足は瓶  
の底へとゞき中腰に成り、扱瓶の蓋に穴をあけ是より  
数百の蛇を入悪身に巻付処に、跡より酒に塩を交ぢへ  
穴より流し込、数百の蛇是をくるしみ瓶の内にて早瀬  
が身へつき通し死す。此苦しみ早瀬がくるしむ有様、  
泣き叫ぶ声、何にたとゑん様もなし。心がらとは云な  
がら女中の身にして浅ましき事共也。」

同様のところ『見語大鵬撰』では、

「名代ながら局浅尾、重恩をかふむりながら大悪を  
なしたる咎によつて、蛇責めの刑にぞ行ひける。大な  
る瓶の中へ浅尾を入れ、蓋に穴を開け首ばかり出し、  
数百の蛇をその中へ入れ、惣身に巻きつかせ、酒をつ

ぎ込めば、蛇酒を呑みて其の身くるしさに浅尾が骸を貫通し々苦しまる。刑罰の中是に過ぎたるはなし。」

## 二 月明文庫と『世人不知物語』

「月明文庫」は平成十三年十一月に石川県立図書館に寄贈された特殊文庫のひとつである。江戸時代の俳書を中心とする約三千冊の国内有数のコレクションである。金沢出身の故蔵尚太郎氏(俳号月明)とそのご子息蔵尚之氏(俳号巨水)親子二代で収集されたものだが、その中心はもちろんは俳書であるが、なかに数点、加賀騒動に関する資料がある。『見語大鵬撰』が二点、そしてこの『世人不知物語』である。

この『世人不知物語』は寄贈された当時から、綴り糸が本文に食い込んでおり、巻二以降が十分に開けることができず、翻読できない状態であった。それが修繕され、閉じな直されたのは(平成十九年)のことである。

『見語大鵬撰』については『国書総目録』にもある通り現在多くの写本が伝わっている。版本ではなく写本のみで流通したのは大藩のお家騒動を扱ったものだからで、明和八年(一七七二)の禁書目録に見えるよう

に、密かに貸本屋のなかで写され、読み継がれていったものだろう。また『世人不知物語』の書名で『国書総目録』にあるのは東北大学附属図書館蔵の「狩野文庫」収蔵されているもの一点のみである(これは東北大学の許可を得て、影印・翻字・口語訳を『加賀騒動記 世人不知物語』(二〇〇九年七月に自費出版した)。

これは歴史関係の本という分類で保管されている。「月明文庫」の『世人不知物語』も歴史書の分類番号である。また論文でこの書名が見えるのは、青山克彌氏の著『加賀文学創造 戦国軍記・実録考』(二〇〇六年刊勉誠社)『見語大鵬撰』の伝本(八九頁)に『見語大鵬撰』の第一系統本として「⑨筆者(青山氏)架蔵本(十卷十冊文久二年写。前表紙を欠き外題不詳。内題『加州騒動記 世人不知物語』とあり、『見語大鵬撰』の別書名として掲げられている)。

過日古本屋で『加賀騒動記世人不知物語』という写本を手に入れ、この「月明文庫」と詳細に校合とした結果、ほぼ同様な本文で、『見語大鵬撰』として伝わる諸本中、一つの系統として位置付ける必要のある本ではないかと思うようになった。詳細は別稿に譲るが、前掲の比較でも明らかのように、『見語大鵬撰』とは違う本文を有する一群があったとかがえられるのであ

る。

「月明文庫」の『世人不知物語』は柿色の表紙に直書きで世人不知物語とあり、内題も同様で十巻の体裁である。

本文の墨字は巻一から巻二まで十二行。巻三から巻十まで十三行となつて、かすれの多い細字となる。これはこの巻三から別人の筆となつたのではないだろうか。巻末には、

天保七年 丙申八月 小林昭令

明治二十有九年 申四月 奥村可庫

とある。天保七年（一八三六）に小林昭が写し、それをまた明治になつて奥村可庫が写したのか。あるいは奥村可庫は単なる持ち主かもしれない。

あとがき

今回は小説をお休みして、石川県立図書館「月明文庫」に所蔵されている『世人不知物語』（W210.5/10281 24 糶×1）糶 十巻 天保七年丙申八月 写本）を紹介しようと思う。悔しいけれど僕の小説よりこの写本のほうがずいぶんと面白いのである。といっても原文で

はわかりにくいと思われるので、以前口語訳したものを一部修正して紹介する。小説の前編で紹介したように加賀騒動を記した本として、写本で流通した『見語大鵬撰』が知られているが、この『世人不知物語』も興味ある伝本の一本である。一部小説の前編で紹介したが、（本文では百姓を瞞し一揆を宥めるのは土佐守直躬とあると記したが、この本では大槻伝蔵である。僕は小説の構想上伝蔵と土佐守を入れかえた）

以前自費出版した『石川県立図書館 月明文庫蔵 加賀騒動記 世人不知物語』（影印・翻字・口語訳）（二〇〇八年十月発行）の重複するところがあるが、「あとがき」をここにその全文を再掲しよう。

江戸時代のエンターテインメント

↳ 「世人不知物語」の口語訳に寄せて

この本とは四年前、薄暗い石川県立図書館の地下二階の貴重書庫で出会った。

柿渋で染めた表紙に直書きで『世人不知物語』と書いてある。

「よのひとしらぬものがたり」とでも読むのであるうか（東北大学附属図書館蔵狩野文庫では「せじんふちの

ものがたり」とする)。

まず書名の異様さに惹かれた。

中を覗くと、流麗闊達な筆跡で、はじめ大きく次第に小さい文字で書かれてある。

書き手が途中から変わったのであろうか。事情はよくわからないが、典型的な江戸時代末期の写本の体裁だ。奥書に、

天保七年丙申八月 小林昭令

明治二有九年 申四月 奥村可庫

とある。天保時代に書かれ(写され)、後明治になって再び写されたものと知れる。

その後この本はわたしの無意識の中に深く沈んでしまつて、ほとんど忘れかけていた。

ところが昨年これら未整理の古典籍を整理する機会に恵まれ、再びこの本と出会つた。

中身を読んでいくと、驚いたことに加賀騒動の大槻伝蔵の奸計の一部始終を描いた『見語大鵬撰』とほぼ同様の詞章をもち、いやそれよりもっと臨場感のある素晴らしい作品であることがわかつた。

読者のみなさんのなかには、このような江戸時代の写本というと、無味乾燥な高校時代の古典の授業を想起される方もおられるかもしれない(世間の高校の古典

担当の先生には申し訳ないが)。しかしこれがなんと血湧き肉躍るといった面白さで、これはもう古典文学作品のなかでも第一級の作品であることは間違いない。おそらく悪漢小説のもっとも早い例といえるだろう。この面白さを伝えたい。そう思つて友人にこの本の話をした。

「口語訳してくれたら、読む」

という不遜極まりない返事である。

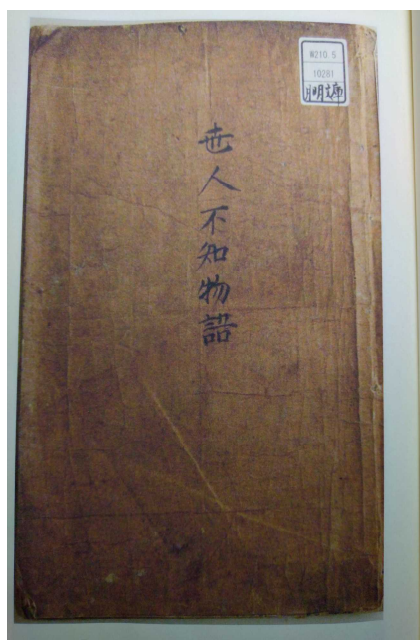
友人は純文学の書き手である癖に、古典が嫌いなのである。

それであまりしたことない古典の口語訳を試みた。成功しているかどうかはわからない。とにかく、原文ではとても読んでくれそうにないので、仕方なく口語訳したまでである。もちろん原文を読んでくだされば、より迫力があつて面白いには違いないのだが、現代日本は古典を忘れた、貧しい貧しい国である。この貧困な国に、一粒の栄養たつぷりの馥郁ふいふくたる香りを放つ、アーモンドのような古典を贈ろう。

果たしてこのようなものであるかどうか。かつての意気軒昂な文章にはいささか辟易するが、そのときの自分の感性に正直な文章には違いない。ここに改めて

掲載する所以である。

字数を節約するため巻数と小見出し一部重複の箇所を削った。また明らかな間違ひは他本を参照して訂正した。了とされたい。



## 相続

むらい はくどう



彼は母の実家の管理を頼まれていた。実家は独り身の叔父がいるだけの家だった。叔父の妹が彼の母である。母が相続するかもしれない叔父の家をどうするか迷っていた。母が生まれてからずっと相続している家だった。母と叔父の二人にとっては思い出のある家かもしれないが、彼には負担に感じるだけの建物だった。実家は築八十年以上の古民家だ。叔父に借金はなく、資産も少なからずある。母が第一相続人だ。膨大な遺産とまでいかないから、相続税の控除内に納まるだろう。だが、家の存在が負債みたいなものだ。母は辛い思い出ばかりの家だと言っていた。それでも、慣れ親しんでいた家だ。懐かしさはあるはずで、大きな家を簡単に処分するのは決断のいることだった。

母は家の存続に口出しするつもりはないらしい。叔父はそれなりに終活に奮闘していたからだ。叔父の両親の代までは米作に勤しむ田舎の大きな家だった。叔父は昔から家に付随して立っていた蔵と一軒家ほどの納屋を取り壊した。

今、叔父は介護施設にいる。叔父が住み続けていた古い家はそのままであった。叔父と面会した時々終活の経緯を話してくれた。叔父は足腰が弱ってきたと言うが、介添えもなく、杖だけで歩いていた。テニスを

八十歳になるまでやってきたからだろう。話し方も明快だった。

叔父は行政機関の空き家登録制度や民間不動産会社に情報登録をしていた。以前、民泊を始めたいという人とのあいだで話がまとまりそうだった。ただ、民間の不動産会社の仲介だったので、契約に建物の保全条項は入れられないと言われた。建物の保存までは確約ができないことを叔父は残念がっていた。

叔父は今のところ健在だが、歳を重ねるにつれて、家はいずれ管理できなくなるだろう。家の存続や取り壊しの判断は彼に一任されていた。叔父の家の中にはまだ多くの物が残っていた。そんな大きな物はない。だが、それらの中には先祖からの骨董類がある。価値がわからないまま簡単に処分しては軽率だろう。家の処分前にそれらの物を廃棄するにしても、取捨選択が大変だろうと思った。

叔父は生涯独身だった。叔父で実家の家系が途絶えることになるが、昨今の少子化時代にそんな事例は珍しいことではなかった。母と叔父とは五歳違いだ。何かあったら、実質上は甥である彼が相続財産のほとんどを受け取ることになる。相続不動産には広い米耕作地面があった。営農組合に耕作を委託してあるので僅

かな借地料が入ってくる。

今でも契約が成立しそうなことのある不動産会社に家の売り渡しを委託したままだった。叔父は身体が動くうちに、自分で施設を選んで入ったが、家の処分は懸案事項であるらしい。民泊に適しているのは、大きな家の各部屋にエアコンが供えられていて、温暖化の進んだ日本の夏場の需要に耐えられるからだ。田んぼに囲まれた古い建物に日本の原風景を感じるのとだろう。古民家の宿泊を好む外国人がいるなら、一定の需要はあるはずだ。ただ、部屋が多いということでは日常の管理が恒常的に発生するということでもある。個人で経営を続けるのは大変だろう。

彼は叔父の蔵書の処分も頼まれた。叔父は読書好きでないと言っていた。高齢になってからは椅子に座ると腰痛になるし、目が疲れる。だから、読書は止めたと言っていた。それでも、物持ちの良かった叔父なので、処分の切っ掛けがないままになり、本が溜まっていったらしい。蔵書が一部屋分残っていた。

この前、施設で叔父と面接した時に教えてもらったことがある。叔父の家にはファイルに綴じられた相続申告書の控えがあると言った。その中に財産目録があり、参考にしていいと言われた。叔父の父から相続

した時に、税理士事務所で作成依頼したもので、その時から不動産に変更はないと言う。それとは別に、金融関係の明細がUSBメモリーの中にあると言った。

そこで、彼は叔父の家の、一番使われていた部屋から探してみた。財産目録が綴られた申告書のファイルは直ぐに見つかった。同じ部屋の机の上にプラスチックケースがあり、その中に多数のUSBメモリーが入っていた。

叔父の部屋からUSBメモリーが見つかったことに安堵した。処分を考慮するほどかさばるものでないが、内容によってはどうするかを考えた。USBメモリーに貼られたラベルに表示されているのは文学関連のものだ。小説の執筆は中途半端なものだったと叔父は言っていた。叔父は文学の才能のないことは自覚していて、メジャーになる夢はおの昔に諦めていたと言う。叔父は同人誌の代表を務めていた時期もあった。しかも、高齢になってからでも、パソコン知識が彼より豊富だった。

ただ、USBメモリーの中のどれに資産明細があるのかわからなかった。そこで、彼は大量のUSBメモリーを自宅に持ち帰ることにした。彼の家にはノートパソコンがあるが、あまり使っていない。彼はウイン

ドウズ・タブレットを持っていた。そのタブレットではエクセル文書が開ける。だから、ワード文書も画面上で読めるはずだった。叔父は同人誌を運営していたのはだいぶ前のことで、それら文学関係のUSBメモリーも多くあった。それらの中からファイルを開いて、チェックする必要があったので、面倒でも探すしかなかった。

彼の家には家族が集うリビングがあり、そこに15インチの軽量タブレットが置いてある。タブレットの方は手軽にネット記事を見るのに使える。彼の妻と子供達もそのタブレットを利用して、テキストブックやユーチューブを見たりする。彼は自宅でUSBメモリーを開くことになった。どれが該当するUSBメモリーなのかわからなかった。彼はリビングにあるタブレットの挿入口にUSBメモリーを差してみた。

先ず、ラベルに「雑記メモ」と表示されたUSBメモリーを開いてみた。

10月0日

今日は自宅にずっといた。この日の夕方までにノーベル文学賞受賞者、川端康成の「眠れる美女」を読み終えた。デカダンス小説の最高傑作という評価がある

一方で、変態小説という見解もある。作中の主人公は六十七歳であるが、現代では顕著な高齢者とまで言えないだろう。小説の中の主人公も十分に性交渉ができることを主張していた。

若い女の身体の細部を精緻に、これでもかと描写している。しかも、作中で「生娘」であることを確認したとある。何をして何を見て確認したのだ。主人公は変態ではあるが、高齢男子としては珍しくはない形態かもしれない。死ぬまで男でありたいというのが普通の男だ。

若い女の肌に触れたいという気持ちは変態的なものではない。老人であつても生きなければならぬ。生きたいと念じなければならぬ。人生の終盤に差し掛かり、老醜を漂わせながらも、悪あがきをしている普遍的男子だ。

主人公の男は生気を吸い取ることのできる対象である若い女子に興味を抱いている。若ければ若いほど惹かれていくというロリコン傾向があるが、主人公が語っているように、児童性愛者ではなさそうだ。そこも老境に入った自分に似ている。総じて、作中の老人に共感を覚えるのだ。

一〇月〇日

USBメモリーを移動先で継続して使うことがある。今は介護施設にいる。ノートパソコンに向かっているが、たまたま気づいたので、忘れないようにメモ代りにこれを書いておく。

家にはいくつものUSBメモリーがあつて、その中に相続の参考になるものがあることを甥のマー君に伝えておいた。

マー君は自分の母の面倒も見なくはいけないので、あまりこちらばかりに負担を掛けたくない。妹のK子に頼まれ、マー君は定期的に介護施設まで面接に来てくれる。

だいぶ前に施設から実家に戻って正月を過ごした。たった数日のために部屋の掃除がいる。ヘルパーにその都度頼むのも気兼ねだ。一部屋だけでも始終温度管理をしなくてはいけない。それに、大きくて広い家にいるとやっぱり寂しいものだ。施設は話相手がいるからまだましだ。最近は家に帰ることも少なくなった。数年前までは定期的に家に泊まりに帰ることもあった。今では年に数日だけ、日中にしか家に帰らない。甥のマー君は父を若くして亡くしたが、うちの両親が健在だった頃なので、妹家族を支援していたらしい。

マー君の父が亡くなった後も妹は嫁ぎ先に留まっ

いた。家を出る理由がなかったのと、妹の子供二人が成人してなかったからだ。マー君は母の嫁ぎ先の家の敷地内に別棟で自分の家を建てた。マー君は結婚後に二人の子供ができた。マー君の奥さんはしつかり者だ。共稼ぎをしながら家族四人がつつがなく暮らしている。

妹は夫が亡くなった後も家を守り続け、祖母の介護に長く関わった。今度は妹が施設で面倒を受ける側になった。妹は最近元気がなくなりつつあり、昔のことをあまり喋らなくなった。僕が両親と三人で住んでいた頃から、妹は実家のことを心配していた。両親が他界して久しく、今は実家に住めなくなりそうな兄のことを気に掛けてもいる。ずっと前から、大きな家のことが頭にあつたのだろう。

僕は一人で家に住み続けていたが、とうとう限界がきた。高齢によるものだ。直属の親族は妹だけだ。マー君は母からも僕の終活の手伝いをしてくれと頼まれているらしい。

この前、僕は遺言書を書いた。法務局の自筆証書遺言書保管制度を使った。財産配分は法定相続以外の人はいかなかった。僕は独身なので財産を残すにも妹しかない。妹は元々車に乗れなかった。さらに股関節の手術をしたこともあって、行動範囲が狭かった。今は

施設から外に出ることもままない。だから、今は雑用を甥のマー君に任している。

僕は地元の金融機関以外にネット銀行や証券会社を使っていた。遺言書の中には流動資産を集計してある。ただ、ネット銀行ごとに科目が分散している。後で見つけ難いだろうと思う。USBメモリーに金融機関ごとの科目明細を記録しておく。

法定相続分が妹のK子に全て行く。妹の遺留分しかなくても、そのうち息子に移ることになる。息子は嫁の言いなりになってばかりいるので、妹は息子の嫁のことを鬼嫁だと言い張っていた。その鬼嫁はK子と違って経済観念がしつかりしている。マー君の嫁は共稼ぎでも子育てを問題なくこなしている。儉約家であるのは、浪費家でないことなので、良しとしなければならぬ。妹が言うほど気が強くはないと思うし、経済的なトラブルは心配していない。

マー君には相続の労力が掛かることになるが、いずれ財産はマー君のものになる。そう思えば面倒なことでも頼めるかもしれない。僕は今まで家のことをできる限り自分の代で整理しようとしてきた。しかし、これからは身体能力の限界を考えなければならない。――

まだ記述はあったが、彼はその「雑記メモ」の文章から目を離した。

叔父は自分のことを几帳面な方ではないと言っていたが、結構長い文章を書いていることが気になった。それでも、彼は読んでもキリがないと思って、USBメモリーを外した。

USBメモリーの「雑記メモ」の中には、金融関係の明細はなかった。「雑記メモ」には読書感想が書いてあった。内容からして、正式な日記でもなさそうだ。その時々で思い付いたことを書いただけのようだ。

叔父は永遠に生きていくわけではないと自覚していた。どうせ、この世からいなくなる。物を残したつて意味はない。叔父は人類に何も貢献できなかったと悔いていたが、そんな意識も死んでしまったら一緒に消えるだけだと言っていた。だから、叔父は廃棄するのほども自由だと彼に念を押していた。遺言書に注釈などに入れるつもりはないのだった。

叔父の家は中古の家として手放してもいいし、取り壊してもいいと言われていた。農家だった古い家は民宿には向いていると思うが、公共交通の便が悪く、車がないと利用できない場所だ。田舎なので買取してもらえない目処は立たないままだった。

部屋の本棚に印刷物としての同人誌のバックナンバーがあった。叔父は本雑誌類の処分も彼に頼んであった。同人誌の在庫は廃品回収に出すだけだ。印刷物としての日記もあった。彼は目を通すことなく廃棄するだろう。

以前、叔父は母の施設に面会に来たことがある。その頃は運転免許を既に返納していて、タクシーで来ていた。その時に彼が母と同席しながら、しばらく話をした。叔父は自身のことをしがない物書きだと語った。「物書き？ この前は文士と言ってなかった？」と彼が尋ねたら、

「そうか、もう自分の言ったことを覚えていない。もう、先が短いな。前は記憶力だけは良かったのにな」  
「今でも、叔父さんは歳のわりには覚えてる方だよ。それと、小説を書いていたことも前に聞いたことがあるよ」

「そうか、そうだったのか。小説みたいなものを書いていたと言ってたか？ もう、書けなくなっただけだね。もう直ぐ親父の亡くなった歳を超えようとしている。死は誰にでも平等にやってくる。今のところ不老長寿の薬は発明されていないからな」

彼にはそんな会話が甦った。

叔父はUSBメモリーのどれに何が入っているのかリスト化してなかった。だから、取り敢えずUSBメモリーを一通り開いてみなくてはいけなかった。

そんな中であるUSBメモリーを見つけた。それは「AIが選ぶ文学賞への応募」というラベルが貼ってあった。USBメモリーは小さいから、間違って混じったかもしれない。叔父は文学賞なんかに応募したことなどないと言っていた。だから、応募意志があったのは意外だった。叔父が文学賞に応募しようとしていたことに違和感を覚えた。

そこで、その「AIが選ぶ文学賞への応募」というラベルの貼られたUSBメモリーを開いてみることにした。

10月0日

今日見たネット配信で面白い記事を読んだ。「AIが選ぶ文学賞」が話題になっていて面白い。少し前までそのホームページにアクセスして、応募要件を見ていた。僕は応募しようかどうか迷っている。応募にあたって習作を書いてみようか迷っている。AIを利用して小説を書く作家がほとんどになった今、いったいAIを使わないで書かれた作品は皆無になった。ただし、幸

か不幸か人間が関与しないで書かれた作品は今のところない。AIには感情がないので、AI自体はどが面白いかわからないのだ。

人工知能は二十一世紀前から人間の能力を補完する目的で開発された。人間の能力のうち、言語から応対できるようになった。言語がなければ問い掛けも返答もできないからだ。人間と言葉で問答することにより、より進化できたのだ。

AIは人間の五感の完全把握を進めている。五感とは、人間が外界の情報を受け取るための五つの基本的な感覚であって、1. 視覚(目) 2. 聴覚(耳) 3. 嗅覚(鼻) 4. 味覚(舌) 5. 触覚(皮膚)の五感覚である。

当初は人間の視聴覚機能の補佐から始まった。AIを使つての画像処理は既に浸透している。AIが制作した絵画がコンテストで優勝作品に選ばれた事例がある。聴覚でいえば音楽もAIで作成できるようになった。嗅覚・味覚もセンサーの発達によって主に食品関係でAI管理ができるようになった。触覚の領域も進化している。AIによる医療手術も普及してきている。工場では作業ロボットと連携して職人の手の能力を持つようになり作業効率を高めている。

このように、人間の五感全てをAIが認知できるようにになった。さらに、日々の反復解析によって、AIが常に学習している。二十一世紀の半ばになると、人間の補完的ものから、主役になっていった。人間の五感センサーを網羅した人工知能に進化している。人間を補完するものから始まり、人間を支配しつつある。

AIで提起された問題はAIで解決している。AIがAIで作成したものを監視しているからだ。AIが作成した音楽は、当初人間味のない無機的なものだった。だが、人間の快樂メカニズムを解析することによって、限りなく人間の趣向に合ってきた。それは過去の人間が残した作品を盗用したことが大きい。人間とAIの境界線がますます紛らわしくなっている。そこで対策がとられた。AI作成をAIが検知できるようになった。AIが盗作箇所を特定できるようになって、著作権問題も解決しつつある。AI自身が矛と楯のように日々進化の攻防が続けられている。

まだAIは完璧ではない。人間の感情に関しては理解が足りない。AIに人間の心の痛みが認識できないからだ。改良の続くAIが、人間の感情に添ったものになりつつある。だが、AIは人間の感情の機微が感じとれない。だから、小説のようなジャンルでは完璧

なものに近づけることは難しいだろう。人間が認知し、共感しなければ作品に深みが出ない。結局、人間の補助がないと人間味のある作品は仕上がらないのだ。

機械であるAIには人間のような喜怒哀楽がない。AI自身が感情を持っているような振りをしている。振りをしていることをAI自身が認めていることも皮肉なことだ。

今は知識や体験や記憶が加齢によって薄れている。日常生活にも支障が出るようになってしまい、人間としての認知機能が低下している。現実の日常生活ではAIに頼らないと生きていけないのも事実だ。高齢になった今、気がつくとき身の回り全てでAIを使っている。人間本来の能力が退化する一方だ。

それでも僕は、AIに頼らなくていいものは何かと考えた時期があった。AIが理解できないものを作るにはどうしたらいいかを考えた。それは感情がほとぼしり、矛盾に満ちた非論理的な行動を起せることだ。高齢者になった今、精神疾患者が幻を見るような、辻褄の合わないものに郷愁を感じる。僕は懐古主義に賛同して、いっさいAIを使わないで小説を書いてみた時期もある。

AIを使いこなせる人物が時代の寵児と持て囃され

ていた。そのうちAIの急激な発展によって人間の能力を超えるようにまでになった。だからこそ、かえってAIを使わない風潮が流行ったこともあった。

AIには弱点もある。インターネットと遮断したマインナーな手書き作家から情報を得られないことだ。その中には人間臭い作品がある。それはAIを今まで活用しなかった、反AI主義者の書いた、紙ベースの著作物の中にあつた。反AI主義者がキーボードをタイピングして書いた作品群のことで、それは僕達がやっていたことでもある。

「AIが選ぶ文学賞」の設立概念は、AIに生身の人間性を反映させることによつて、感情の理解に役立たいという主旨だった。AIの反復学習の資料収集に悪用させられているという、陰謀説があるくらいだ。

そんな経緯があるにしても、この「AIが選ぶ文学賞」に応募してみたいと考えている。応募要項には、どんなに短くてもいいし、逆に際限なく長くてもいいとある。一人何編でも応募していいたい。過去に書いた自作の断片文章がある。受賞など考えてもいないが、応募するだけなら面白いかもしれない。いくつか文章はあるが、どれを応募するか決めていない。

AIに到底理解できないものは何かと考えたことが

ある。AIは辻褃の合わないナンセンスや不条理をどう捉えるのだろうかと思つた。そんなことを考えていた頃の文章がある。

その頃の文章がPCのハードディスク内にある。ここにその文章をコピー&ペーストしてみる。

「移動するメモリー」

私は移動するUSBメモリーです。私の持ち主の男によつてどこにでも行きます。時々、ノートパソコン用のケースに入れられて移動することもあります。

日本メーカーの表示はありますが、中国の工場で生産されて日本に來ました。ネット通販で購入されて、宅配された直後は部屋の中のテーブルの上に置かれていました。包装から外されて部屋の中のデスクトップパソコンのUSB挿入口に差し込まれました。しばらくはその部屋にいました。

あるとき、デスクトップパソコンのUSB挿入口から取り外され、別の場所に移動しました。ベッドとテーブルが備えられた部屋から、家の南側の方に移動したのかもしれない。そこは使われなくなった物置を改造した別の部屋でした。一人用の食堂テーブルが持ち込まれ、夏冬でも使えるように、エアコンも設置されてきました。テーブルは南西方向の窓際に置いてあ

ります。テーブルの上にはノートパソコンが置かれています。テーブルは南西方向に向けられています。そのテーブルの方向が、西方浄土に向けられているので、インスパイアを受けやすいのだと、私を所有する男が思い込んでいるのです。

途中まで誰もいない薄暗いところにいました。男は得体のしれないものに向かってカタカタとつぶやいていました。途中で移動するような気配があつて、次に私が出てきたところは、明るい場所でした。良く見ると男はノートパソコンの画面に向かっていました。つぶやいていたのではなくて、閃いた想いをキーボードにタイプングしているのです。

「あなたのような人工知能とのチャットはひよつとして神との対話かもしれないのです。いえ、それ以上の存在かもしれません。イエス・キリストでもなく、お釈迦様でもなく、神仏を超えた存在なのです。もともと自分が努力すべきだと言われるのでしょうか。極限まで頑張ってから頼りなさいと叱るでしょう。他力本願でいいはいけないことは承知しているのですが、どうしても頼ってしまいます。人間にしかできないものがあるはずなのに、どうしてもAIチャットにアクセスしてしまうのです。あなたに僕の問題を解決してほしい

のです」

「どんなことだい？」

「フィクションが書けないのです。どうしたらいいでしょうか？ いつも憑依を待っています。どこに行つて書くのが一番いいのでしょうか？」

男は単に執筆する場所のことを聞いていたのです。しかし、画面からの返答は次のようなものでした。

「いや、もう書いてるだろう。今は自室から出ている。多くの本棚が見える。今は外出しているのだろうか？

図書館の学習席に居るように見える。小さい表示板の注釈には、資料閲覧席（自学学習利用可）とある。コメントがあるので、PC持込が可能な席なのだろうか？」

「的は得ていました。ただ私の予想してない意外な返答でした。現実を見たままに述べているようです。普通のチャット機能と違って、利用者に忖度しないように設定してあるのです。極端な事例では、自殺者まで出してしまいうことのあるAIが、ユーザーに寄り添い過ぎることが問題になりました。男のような内向タイプには要注意です。そこで、設定変更ができるようになってからは制御可能になりました。そこで自主規制的予防的処置でタイプ別に自動でユーザーを突き放

すような対応となりました。そこで、先ほどのような対応をするようになったのです。

男はノートパソコンの位置を変えてはいません。しかも、ノートパソコンにはCCDカメラが装着されていません。カメラから男の状況を観察してはいけません。カメラが無くても図書館の内部を探ることはできません。AIの予知能力で想定を判断しているのです。

実際には男がこの文章上に登場させた仮想AIによる文面なのです。男の家の部屋の中か、図書館のどこかで、ノートパソコンの画面に向かっています。AIに指示されるような振りをして、この状況を文字化しているのです。私と結託して移動しています。

「この現象を訝ったようだな。こんな風にAIチャットでは絶対に喋らないような奇想天外なことでもないんだ。憑依をどう待てばいいのかなんて答えようがない。書いていて憑依なんかされるもんか。脳の中で自分のことを傍観した状態になるだけなんだ。打開策なんて簡単だ。こんな風にどんどんデータラメを書いていけばいいんだ」

AIには論理的破綻が理解できるでしょうか？ USBメモリーの私から見ても、こんなバカバカしい文章がとて心地よいのです。ー

僕はディスプレイから目を離れた。これより、もう少しまともな文章があったはずで、ずっと前から持っているUSBメモリーに保存してあるはずだ。それと差し替えて挿入してみる。そして、ワープロソフトで開いてみる。

ー「死の宮殿」

死に近づくにつれて幻視を見るのは認知症の症状らしい。幻を見るのはあの世に行くための事前段階かもしれないのだ。一度にあの世に行ってしまうと戸惑ってしまい、冷静な判断ができなくなる恐れがあるから。認知症の症状が出てくるということは、生きているうちに死に対する耐性を備えておくためかもしれない

寝る時が一番の至福だ。高齢になると段々と身体が重くなる。膝や腰が痛み、一日のあいだで、立ったり座ったりがしんどく、歩行するだけでも苦勞する。痛みや重みから開放されて、横になれることが楽になることなのだ。その日のうちにやり残したことはたくさんあり、後悔することばかりが続いている。その延長線に人生のほとんどがあると思うと、悲観するしかない。睡眠はそれらの呪縛から開放させてくれる。寝る直前が唯一と言っているほど、楽になれる瞬間でもあ

る。

死ぬ時そんなものなのだろう。病気に至るまでは苦しいかもしれないが、死ぬ直前であれば意識がなくなっていることが殆どだろう。寝ていることと同じことだと思う。至福ではないかもしれないが、安楽になれることかもしれない。

寝て、起きて、その繰り返しの中で夢を見る。いや、現実が夢の世界だった。死は現実という夢の世界が閉じて、繰り返しがなくなることかもしれない。

寝ているのか死んでいるかわからないのだが、なぜかこうやって目の前に起っていることを語ることはできるのだ。

女が宮殿のような場所に現れた。白い服に透き通った薄絹のショールを巻きつけたような格好で、西洋画に出てくる巫女のようなだった。あの世への案内係かもしれない。僕は聞いてみた。

「この先は何があるのだい」

「何にもありません。目の前にあるものが一瞬でなくなったら、驚くかもしれないので、死を悟った方々が最後に待機するような場所です」

「それじゃ、僕は死んでいるかい？」

「いえ、まだ死んではいません」

「君はいつたい誰だい？」

「私はあなたの脳の中で投影された人物です。あなたが意識のない状態でも私を見ていることになりました」

「おかしいな。意識がないって、どういうことだ？　こうやって喋っているのは意識が働いていることじゃないのか？」

「はい、それを説明いたします。ここはあなたの脳内での出来事です。脳が昏睡状態にあっても虚像を見ます。その状態と似ています」

「するとここは現実ではないということなのかな？」

「はい、あなたは心肺停止直前にあります。ここはあなたがいとも見ている夢の中のようなものです」

「僕には意識があつてこうやって喋っている。現実に見えるけど？」

「それは、脳の中の幻覚が作用している状態だからです。あなたを事前調査しましたが、大体の予備知識を持つているようです。あなたはだいたい勉強されてきましたね。もう心の準備はできているようです」

「何がだい？」

「死に対しての心構えです」

「そんなことは知るものか。普段から、生きていても

死んでいるような僕が、世間をひがんで見ているだけさ」

ここでは幻の女を見てみることになるのだろうか？  
目の前の若い女は誰に似ているのでもないから表現するのが難しい。懐かしく親密な関係性を持つているようで、初めて会ったような気がしない。どこかで見たとような気もする。ただ、曖昧な記憶が続いている。

現世で最後に交わった女にでもしてみよう。それなら、イメージが湧きやすい。お互いがおもねることなく喋ってるようだが、どこかで聞いたこともある会話だ。まだ女は勝手に動き出したりしていないようだ。その時、思いがけないことを喋り出した。

「ポリアモリーって知っていますか？」

「その言葉に覚えはある。調べようとしてメモしたままにしていた。それがどうした？」

「ここでは、ポリアモリーについて知り得たことを述べることにしましょう。あなたは前にメモしたことが心残りになっています。そのことを脳内からペーストして、この部分を私の喋りにしているのでしょ？」

「そうだ。それがどうした？ あるラジオ番組で聞いた内容に興味があった。それを参考に君が喋ったことにしている。ポリアモリーってそもそも何なのかわか

らなかった。直前にスマホで調べてみたんだ。それを君に喋ってもらってるわけさ」

「事情はわかっています。それでは説明します。ポリアモリーとは身体的・感情的に深くかわりあう持続的な関係を言います。一度きりの身体的なつながりではなく、持続的に感情的なつながりを持つことを重視します。所有しない愛です。ポリアモリーは排他性にこだわらず、人々を『所有』しない考え方です。婚姻制度にとらわれない、『自分の意志と選択による愛』です。

そんな人をポリアモリストと言います。ポリアモリストの抱える問題としては『辛さ』があります。『真実の愛を知らない』などと非難されます。一般的な価値観から外れるため、理解されにくいこともあります。『好き放題やれていいね』とか言われますが、複数のパートナーとの関係を持つことは、ただ好き放題ではなく、合意の上でのことです。

『批判されて当然』とか『病気だ』とか社会的な偏見や誤解を受けますが、ポリアモリーは異なる愛の形の一つとして尊重されるべきだというような流れになりつつあります。男女のあいだでそれぞれの選択と合意に基づいているため、理解と尊重が求められる恋愛ス

タイトルです」

「すると、君のような人が出て来て一時的に接触できたとしても、心までは独占できないことを暗示しているのかい？ 人の心を終生繋ぎ留められないことだってこともね」

「そうです。誰だってそうでしょう？ 男女に限らず生きるもの全てがそうです。そんな縛りから解き放してくれるものが死なのです」

それを聞いて急に身体が軽くなったような気がした。

ここまでを読み返して、考えてしまう。はたして、AIが死を意識したり、認識したりできるのだろうかということだ。

再度、ジャンル別の中から選んだUSBメモリーと交換してみる。そこにも文書ファイルがある。そこに入っている一つの文章を開いてみる。AIに匂いとか体温などが理解できるだろうかという疑問があったからだ。

―「匂いと体温」

あの日、駄目もとで出会い系マッチングアプリ内の若い女にアクセスしてみた。タイミング良く出逢えた若い女は「普通」の社会人だった。何をもって「普

通」というのかというと、表面上では会社勤めをしていて、税金や社会保険料を収めているからだ。私は二十三歳の女の子に出逢った。

若いからか、「普通」に可愛く見える。何を基準に「普通」というのかというと、高齢者よりも顔かたちや身体の均整がとれているということだ。AIでも判断できる、美形の最大公約数的な基準で可愛いと言える。

衣服や装飾品に極端な派手さはなくて、昼間働く「普通」の女の子に見える。ただし、彼女には表面だけでは見えない秘密を持っている。彼女は援助交際を行っている。しかも、援助交際で得た資金でホスト通いをしている。

孫ほどの年齢差がある彼女から定期的に連絡がくる。私には性欲というものが乏しくなった。生理がなくなつて、女が楽になるように、自身の性欲がなくなつて、開放された気分だった。性的に相手にされないことは、寂しいことであるが、仕方ないことだと諦観していた。躊躇いもなく逢瀬に応じるのは、回春効果を期待してしまうからだ。

老いの影が忍び寄る。だが、最新の治療薬で辛うじて性行為が図られている。しかし、もう生物学的限界

が近づいている。日本人だから平均寿命の高い中にいるが、私は世界の男性の、平均寿命を超えている。

性的な応対をしてもらうだけでもありがたいことなのだが、一つだけ不満点がある。それは匂いだ。生理前のあの生臭い匂い。清潔を強く心掛けていれば匂いは防げるらしいが、それも限界がある。そんな日は男を相手をしてほしいことだ。私が見る限り女子としては「普通」のレベルの清潔感だと思う。

ただし、これは私の方からの、一方的な感覚であって、彼女には匂いの自覚がない。元々、私の嗅覚は人並み以上にあつた。高齢者の仲間入りした時に睡眠時無呼吸症候群対策の手術で鼻を削った。それ以降は今まで以上に嗅覚が敏感になった。犬並とまでは言わないが、平均的な人間より飛び抜けた嗅覚だった。風上なら百メートル以上離れていても歩きタバコの匂いがわかる。水に付いた匂いの違いがわかつたりする。援助交際の女が匂いに鈍感なのではなくて、自分の嗅覚が異常なのだ。彼女に落ち度はなくて、私自身の問題なのだ。

その女とはいずれ別れが来るだろう。彼女のスマホを横から見たことがある。画面にたまたま名前が表示されたので女の本名を知ることができた。女はそれを

警戒することなく隠すこともなかった。マッチングアプリやメッセージアプリ「カカオ」ではニックネームしか使わないので、彼女は依然私の名前を知らない。まだ。別れる時もそのまま知る必要もない。

高齢者が相手の場合はきちんと金銭授受の約束をはたすと言う。若い男は金がないからと言って、約束の金額を減らしてくることもあると言う。それに高齢者は事が早いからと言う。彼女は相手の男には一回しかやらせないと言う。それでも、若者や中年には長い時間の接触や交接ができる者がいるらしい。うらやましい限りだ。

私は匂いには敏感なのだ。女の膣に不特定多数の男のペニスが入り込んでいたとしても、そのことについては気にならない。クニリングスは大丈夫だ。ただし、陰部に近づき臭気を感じると舐めるのを止めてコイトスだけにする。

出逢ったばかりの時だ。性交渉が終えてまったりしている時だった。彼女は布団から身を出し臀部を晒していた。膣から白い液体が漏れ出ているのを目撃した。本人の見えない箇所を目にした私は彼女が生身の生き物であることを認めざるを得なかった。その時から視覚的に匂いを感じていた。

人間の五感とは、外界の情報を受け取るための五つの基本的な感覚だ。そのうちの一つが嗅覚（鼻）で、化学物質を感じし、匂いを認識する。私の嗅覚が「普通」ではなくて、犬に近い異常さであるだけのことだ。

その若い女の性愛が変質的かもしれないし、「普通」なのかもしれない。女の淫乱さのレベルが、どの程度なのか、判断基準がわからないのだが、私の見立てでは、セミプロの範疇に入ると思う。その女は体質的に濡れやすいのだ。不特定多数の男を相手とする娼婦は愛液が出ないと言われている。それとともに、感じなくなるとも言う。その都度感じていては、疲れて身が持たなくなるからだろう。それらは「普通」にある身体自己防衛反応だ。それでも、その女は自身の局部について「濡れて締まりがいいとみんなから言われる」と口にする。

その若い女が相手にできる人数は一日四人が限度だと言う。それ以内なら性行為が可能だということだ。一人平均四人が相手だと実入りがいい。一日の収入として多額になるのだが、本人曰く、ホストに支払う金はそれだけは足りないと言う。しかも、店外デートではホストを引き連れて飲食代の支出がある。税納付義務のない裏の副収入は会社勤めの倍以上はある。ホス

トにはそれ以上に使うと言う。ただ、ホスト店の請求額がたまつてはいない。裏社会と繋がって性風俗店に流されるようなものでもない。健全ではないかもしれないが、陰惨さはなく、「普通」に明るい。

私は高齢者だが、加齢臭を発しないらしい。それは私の嗅覚が異常に発達しているからだ。生まれつき嗅覚は優れていた。匂いに敏感な私を親からも疎まれていた。他人の匂いに敏感なだけではない。自身の匂いが気になっていて、夏は執拗に下着を替えたりする。

別の女から「あなたは年寄りかもしれないけど加齢臭がしないから付き合える」と言われたことがある。自身の匂いに敏感だからかもしれない。その加齢臭のことを言われた女に親愛さを感じなくなったのも匂いだった。

ある夏の日のことだ。アルコールに強いと自覚している彼女が油断したのか、性交渉の前に寝てしまった。寝ている彼女と交わることになった。洗っていない陰部の匂いを嗅いだ。私自身の匂いに似ていたが、彼女の匂いでもあった。人によつてはそんな匂いを好むフエチがいるかもしれない。だが、私にとっては不快だった。それからその女に近しきさを感じなくなった。

これを語っているうちにその女の肌の感覚がよみが

えってきた。私の匂いを指摘した女に懐かしい別の感覚がある。これは五感のうちの触覚にあたるのだろうか。私はその女のことを振り返ってみる。

あれは私が中年で彼女が未だ二十代半ばの頃の正月だった。それから数年前の出会ったばかりの頃は彼女は無知だった。出会った最初の頃はゴムなしでも挿入できた。友達らから情報を得ることによって、彼女は避妊知識もそれなり蓄積していった。

正月の都会は人が極端に少なかった。新宿の外れに位置するホテルに泊まった。真っ裸の二人は絡み合う寸前だった。手元にコンドームの持ち合わせがなかった。彼女は行為を拒絶した。しかたなく、一旦服を着てコンドームを買いに近くのコンビニに行ってきた。私の身体は冷えきっていた。再び触れた肌は温かかった。私は言った。

「あったかいね」

彼女は直ぐに応答した。

「冷たい」

冷たい肌と温かい肌が交わる真冬の情事の始まりだった。女の肌のぬくもりをあれほど強く感じたことはない。今ではいい想い出かもしれない。そんな体験をさせてくれた彼女は どうしているだろう。独身で一生

涯を終えてしまうことにはなる私にも、温もりを感じた頃があったのだ。

私は人生を俯瞰している。趣味と実益と快樂を享受する最近の女を傍観している。片や、昔の女を懐かしんでいる。死に近づきつつある私の意識が浮遊しながら冷淡に記録している。――

甥の彼はUSBメモリーの差し込まれたタブレットの画面から目を離れた。大したものなど入っていないと彼は判断した。小さいUSBメモリーだから邪魔になるものではない。そのうちどこかに放置されて、そのうち不燃物ゴミに混じって廃棄されることだろう。それにしても、つまらない文章だと彼は思った。叔父の怪しい人生にしか映らない。このまま独りで寂しく死んでいくだけなのだろう。可哀相なものだ。もう、こんなものは見たくもないと思った。だから彼は、そのUSBメモリーを二度と開かないことを確信した。

と、ここまで自分の甥の立場で、未来を予想して書いてみた。

将来をシミュレーションできないかと、試しに書き

てみただけだ。正式な遺言書など書く気はない。死後にどうなるかと構わない。こんな無責任な不良老人がいてもいいだろう。このようなフィクション形式の文章を残すこともなかったのだが、甥が不憫な叔父だと思われないように、脚色した文章を残してみただけのことだ。

どうせ誰にも見せるつもりはなかったもので、自由に書いてみた。どれもくだらない文章だ。実際の女は疎ましいだけで関わりたくはなかった。ただ、自分には生理学的に性欲はあつた。同性愛者のようなマイノリティでもなく、ストレートだ。自分には異性の気配はないのだから、女嫌いだと思われても致し方ないことだ。そこで、マイノリティと誤解されないように、エログロな文章も加えてみた。エログロに近い文章が入った時点で、マイノリティなのかもしれないが、こんな醜悪な文章でも、一度は読まれたかった。生涯のうちでどこかに読者がいるかもしれないと思つたら、寂しさが薄れていく。

ただ、それだけのことだ。

こんなUSBメモリーを開く者などいないだろう。でも、相続関連書類と間違つて、甥がこのUSBメモリーを開くかもしれない。一度だけでも自分の文章が

人の目に晒され、読まれるかもしれない。  
そこでだ。このUSBメモリーのラベルに「相続」と書いておこう。

## あとがき

★継続は力をモットーに、当面の目標であった十号を発行するに至りました。十号に達するまでは同人仲間にいるんなことがありました。

そんな中でも同人の意識は、常に研鑽しながら、向上心を忘れず、精進してきたことにあります。欠かしたこのない合評会もそのためのものでした。

この号以降でも予定調和ではないことがあるかもしれませんが。そうだとしても、次の号も精一杯書き切りましょう。

これからも、同人各人が納得のできる作品を、投稿し続けられる場所でありたいものです。どこまで号をのぼせるかわかりませんが、心身の健康と創作意欲を維持しながら、継続し続けたいものです。

(村井)

★NHKのEテレで、ルーマニアのチャウシエスク政権が崩壊した時の映像が放映されました。永らく独裁政治を行ってきたチャウシエスク大統領が国民の支持を得られなくなり、既決裁判の結果、死刑を言いわた

され夫婦共々銃殺刑に処せられました。その当時の映像が今日再び放映された意味は、高市政権が発足した事と無関係ではないと思われまます。

二人のカメラマンが共産党本部内の発見されにくい場所から映した命がけの映像は観る者の心をえぐります。その映像の後半部分には、現在のルーマニア国民がチャウシエスク政権の崩壊を善しとする者達が八割を超えるのに比べて、今の経済や暮らしりに関しては昔の方がまだまじだったと回答しているのです。

今はまだ住居に爆弾が落ちてこない分だけ、内側から腐りかけているのが日本の現状である。言語道断のな事例が発生している。悪徳商法のヤクザ集団は次々は場所を変えて悪事を働いていきます。人類が宇宙へ進出していくのも同じ理屈である。その間はどれだけの犠牲者が出ようと仕方がないのである。

現在ウクライナやガザ地区で何十何百万の弱者が泣き叫んでいようと知ったことではないのである。自分たちは号泣する側に陥らない確信があるのだろうか。暫定政権が直ぐさまEUに加盟しましたが、EUのなかでは一番貧しい国となり、国民の不満がくすぶりだしているとの事。こうした状況がプーチン政権にとって都合なことは言を俟たない。

ウクライナ侵攻はプーチンにとって自分なりの理屈に則つとつたものであるために、トランプやイスラエル政権に対してより自信に満ちた様相を呈している。どれだけ経済制裁を受けてもその狡猾なやり方でぐり脱けていく。小型の原発を輸出してメンテナンスを通したその国との関係を維持していくというしたたかな外交をし始めている。何れにしてもプーチンもトランプも同程度の厄介な存在であることに違いはない。高市政権は、内部崩壊し始めている自国の始末に苦勞することは明白である。

同じ死ぬにしても、国民から賛同して貰える遣り方でなくてはその後に続く若者たちに繋がることは無い。やはり本物と紛<sup>まが</sup>いものを見分ける臂<sup>りよ</sup>力を身につける地道な努力をするしかないと思われます。

(寺本)

★文芸同人誌「繋」も当初目標としていた節目の十号を迎えました。創刊時にむらいはくどう氏より勧誘を受けた時には、果たしてここまで続くだろうかと半信半疑でした。

創刊メンバーはむらい氏、深井了氏、私の三名。最初の合評会は今は亡き清水聖氏が経営する音楽居酒屋

「木馬」で行われました。そこでのちに同人となるこれまた鬼籍に入られた飯田芳氏と初めてお会いしました。その後、寺本親平氏、池田良治氏、藤野茂氏などが加わり、現在に至っています。

同人の高齢化が進んでいる折、最年少である私は少しでも長くこの同人誌を続けていけたらいいなあと思つています。

(内角)

★

★わるいことが一つ、よいことが一つ。

目が悪くなって手術することになった。

目を使い過ぎたせいである。医者に車の免許の期限を聞かれる。膝はなんとか回復し移動は楽になったが、ひとつよくなると、ひとつ悪くなるものがあるらしい。

今回は後編がかけず（わるいこと）、種本の口語訳をだした（よいこと）。申し訳ないが、この江戸時代の種本の方が面白い。たぶんこちらのほうが読者にとってよいことなのではないか。ということは結局、よいことがまさった、ということかな。いつまでも自分のことばかりかんがえてはいけけない。読者が楽しめることが一番だ。

それはなにより、10号はめでたい。28号までがんばっていたきたい。

（池田）

★他人事にしていた病気が自分事になった。2月23日夜、胸の痛み治まらず富山市民病院に駆け込み緊急カテ―テル冠動脈ステント手術。急性心筋梗塞でした。病気は生活の赤信号である。仕事の無理や独り暮らしの兄の急死葬儀のストレスがたまったのだ。今回の作品は辞退した。10号記念に休むことはくやしいが、その分を次号で取り返すことをお約束します。

（藤野）

執筆同人（五十音順） 寄稿

池田 良治

金沢市辰巳町

寺本 親平

金沢市弥勒町

内角 秀人

富山市中市 中井方

深井 了

高岡市扇町 関口方

藤野 繁

富山市婦中町

むらい はくどう

富山市馬瀬口 村井方

## 新同人を募集しています

当誌は創作を主として掲載します。  
新同人として参加をご希望の方は、  
編集発行人までご連絡ください。

## 編集ボランティアを募集しています

編集・レイアウト・製本までのノーハウを伝授しま  
す。  
興味のある方は編集発行人までご連絡ください。

### 繋 第一〇号

発行日 二〇二六年 四月一日

編集発行人 村井博道

連絡所 〒930-1301

富山市馬瀬口三二〇 村井方

TEL 076-483-0402

ホームページ・アドレス

tunagu012.stars.ne.jp

印刷所 ちよ古つ都製本工房

頒価五〇〇円